

ふ が ぬ とう

与那国島の濟州島漂流民伝承

Fuganutu, Oral Tradition on the Drifters from Jeju
to Yonaguni Island in the Ryukyu Arc

和歌嵐香 N子 WAKARANKO Nko

安溪貴子・安溪遊地 編
ANKEI Takako & ANKEI Yuji eds.

LINKAGE Project, The Research Institute for Humanity and Nature (Japan)
総合地球環境学研究所 LINKAGE プロジェクト

著者の体調のため、本書の内容についての**ご連絡はすべて**
以下のメールあてにお願いします。 a@ankei.jp

Due to the author's condition, all correspondence regarding
the content should be addressed to a@ankei.jp

同じ著者による与那国語 4000 語・画像・祈りの動画
Visit a database of 4000-word vocabulary, drawings, and
movies of prayers and songs in Yonaguni language.

【与那国島生物文化データベース】
URL <https://dunanmunui.wixsite.com/my-site>



本書では、与那国語は《どうなんむぬい》などのように《 》にはさんで表記しています。が行の鼻濁音は、半濁音の記号がついた「が、ぎ、ぐ」で表しています。また、韓国語の濃音や日本語の促音に似た、か行とた行の発音については、前に「'」の印をつけることで区別しています。

この本を手にしたみなさまへ

この本の内容は、わたしたち与那国島の人が、このお話をくり返しきり返し話すことで伝えてきたものです。いったいどこの誰がいつ、ということも知らずに、昔むかしあつたこととして伝えてきたのでした。

島の人たちは、誰かが何かを受け持つて話したのではなくて、めいめいが好き勝手に、みんなが少しずつ違う話をするというやり方でした。その最後のバトンを受け取ったわたしが、どんどこ安渥さん夫妻にわたしたところ、こんな形にまとまりました。

こんなにたくさんのエピソードを、こうしておぼえていられたのは、わたしにこの話をくり返しきり返し聞かせてくれた明治生まれのおじいさん、おばあさんたちのおかげです。そして「これを放りだしたらいかんよ」「もしも島を出る時は、確かな人にわたすんだよ」とくり返しきり返し言われていたためです。

でも、父や母のような大正半ばより後に生まれた世代の人たちには、この話は伝えられていなくて、これまでこのお話を額面通りに受け取ってくれた人はいませんでした。「誰が聞かせたか?」と言われるから「話した人はもうみんなお墓の中よ」と答えたなら「また作り話をしているの」と

か「でまかせばかりいうな!」と言われるのでした。幼稚園の先生と小学校の先生の二人だけが、真剣に聞いてくださったのでしたけれど、まだ幼かったわたしは、たくさんは話せませんでした。

成長するにつれて、このお話を受け取ってくれる「確かな人」なんてますますどこにも見つからなくなってしまったのです。それで、わたしは小学校の四年生の時から、毎日お祈りをすることにしました。「もし、この《ふがぬとう》のお話をわたせる確かな人が身近にこられたら、わたしの体に何かの《しらし》(報せ) をください」と祈ってきました。

わたしにこの話をしてくれた最後のお年寄りも亡くなられたあと、2007年3月に、本棚の整理をしていたら、本の間から6枚の紙きれが落ちました。それを見たら、はじめて学校で文字を習ったわたしが書きつけた漂流民の話だったのです。すっかり忘れていたこのことを思い出したとたん、立っていられないほどの体のしびれにおそわれました。

そのとき、眼の前に安渥さんから届いたレターパックがありました。ひょっとしたらと思ってそこに書かれていた番号に電話しました。ようやく本棚につかまって、しびれに耐えながら電話で紙切れに書かれていた三人の漂流民がやってきたということを話しました。

そうしたら、電話の向こうで安渢さんが「タカコー！タカコー！ 録音機持ってきてえ!!」と叫んでいるのが聞こえました。そして、二人は、一生懸命に耳を傾けてくれました。

安渢さんたちは、わたしが何を話しても、そのまま額面通り受け取ってくれました。それで、この長いお話のひとこまひとこまをどんどん話したり、録音したり、原稿に書いて送ったりしました。おじいさんおばあさんの語ったことをわかりやすく伝えるために、お二人にはげまされて、絵を描くようになりました。

2009年2月には、安渢さん夫妻とソウル大学校のチョン・ギヨンス先生が、濟州島からやってきた三人の《ふがぬとう》と五人の仲間たちのための、感謝と供養のチエサ（祖先祭祀）を与那国島と西表島でしてくださいました。

三人の漂流民が無事故郷の島に帰れたことを知って、もうそれを喜んでくれる人が誰もいなくても、語り続けたみなさんの長い長い間の重荷が軽くなったのを感じました。

この《ふがぬとう》の伝承の中には、わたしたちみんなにとっての多くの財産があると思います。このお話の中には、あふれている、人としてのやさしさ、あたたかさ、細やかな親切の心を伝えたいと思っています。

人間の歴史と、今日の世界の各地には、自分たちと違う人たちを、認めない・のけものにする・暴力をふるう・殺してしまう、といった虐待^{ぎやくたい}が、まるでひとつの方程式であるかのように、たくさん見られます。

わたしが《ふがぬとう》との交流を通して学んだのは、自分の知らない人だからといって、のけ者にしたりしないこと、自分と違う相手だからといって、いじめたりしないことです。

《ふがぬとう》との交流の経験から得られた、人は人としてどのように振る舞うべきかの道しるべとして、2本の大切な柱があります。そのひとつは「どんな人もひもじい思いをさせてはいけない」ということ。もうひとつは「どんな人も一人ぼっちにさせない」ということです。これは、今日まで伝えられてきた与那国島の知恵です。

《ふがぬとう》の伝承のバトンを最後に受け取ったわたしは、この2本の柱の大切さを世界に向かって大きく示したいと願っています。ぜひみなさんもごいっしょに、この本にかかれていることを高くかかげて、世界に示していきましょう。

感謝をこめて

著者 和歌嵐香N子

目 次

与那国島のみなさまへ（著者） 表紙裏

この本を手にしたみなさまへ 3

第1部 語りつがれた漂流民の物語 7

- 1.1 昔むかしの与那国島で 8
- 1.2 猫と鶏が大さわぎ 10
- 1.3 海で見つけた男たち 12
- 1.4 みんなで浜にむかえる 14
- 1.5 ヨモギを集め・鶏と猫をねぎらう 16
- 1.6 はじめての食事 18
- 1.7 家を建ててあげる 20
- 1.8 身体検査と魂の健康 22
- 1.9 下着《あっぱ》とはじめての着物 24

- 2.1 泣きやまない《ふがぬとう》 26
- 2.2 五人の仲間が死んだ 28
- 2.3 五人の仲間のために 30
- 2.4 山みかんの花に泣きくずれる 32
- 2.5 病気になったとき 34

- 3.1 潮の満ち引きをはかり日を数える 38
- 3.2 庭に絵を描く 40
- 3.3 水と便所と火 42
- 3.4 食べていいものといけないもの 44
- 3.5 魚を見ておどろく 46
- 3.6 山に入る時の約束 48
- 3.7 天気をよむ 50

- 3.8 海のものと山のものをひとつ鍋で 52
- 3.9 すぐ割れる土鍋とその改良 54
- 3.10 ヤシの葉の鍋を作る 56
- 3.11 新しい漬物のおいしさ 58
- 3.12 果物の汁と皮を生かす 60
- 3.13 もやしと発酵の力 62
- 3.14 魚をつぶして食べる 64
- 3.15 香りを楽しむ 66
- 3.16 大げんかと片思い 68
- 3.17 牛も鳥も食べさせてもらえない 70
- 3.18 鼠を追いかける 72

- 4.1 芭蕉布を教える 74
- 4.2 お手伝いはありませんか 76
- 4.3 繩をなう・新しいかご作り 78
- 4.4 ほうきと竹の刃物と竹串と 80
- 4.5 子どもたちと楽しく遊ぶ 82
- 4.6 ゆりかご 84
- 4.7 台湾からつれてきた女の子 86
- 4.8 競争遊びのいろいろ 88
- 4.9 数を数える遊び 90
- 4.10 ゆかいな仲間 92

- 5.1 稲刈りおりこうさん 94
- 5.2 稲とご飯と餅の新旧を当てる 96
- 5.3 朝日を拝む・魚に祈る・葬式のこと 98
- 5.4 庭に立てた石に祈る 100
- 5.5 火に祈る 102
- 5.6 月光のちぎり 104

- 6.1 舟と縄の準備 106
- 6.2 旅立ちの準備と猫への感謝 108
- 6.3 旅立ちと別れ 110
- 6.4 波をこえて 112
- 6.5 三人を追いかけようとした若者たち 114
- 6.6 報せを受け取る木を植える 116
- 6.7 《むらぬうや》の旅立ち 118
- 6.8 卵を抱くめんどり 120

第2部 語りついだ人びと 121

- 7.1 話し手のみなさん 122
- 7.2 よい報せを待ち続けた歌 130
- 7.3 五つのおむすびと三つの団子 132
- 7.4 《ふがぬとう》を忘れないために 134
- 7.5 精霊流し 136
- 7.6 与那国語での語りと日本語訳 138

第3部 济州島漂流民の語り 141

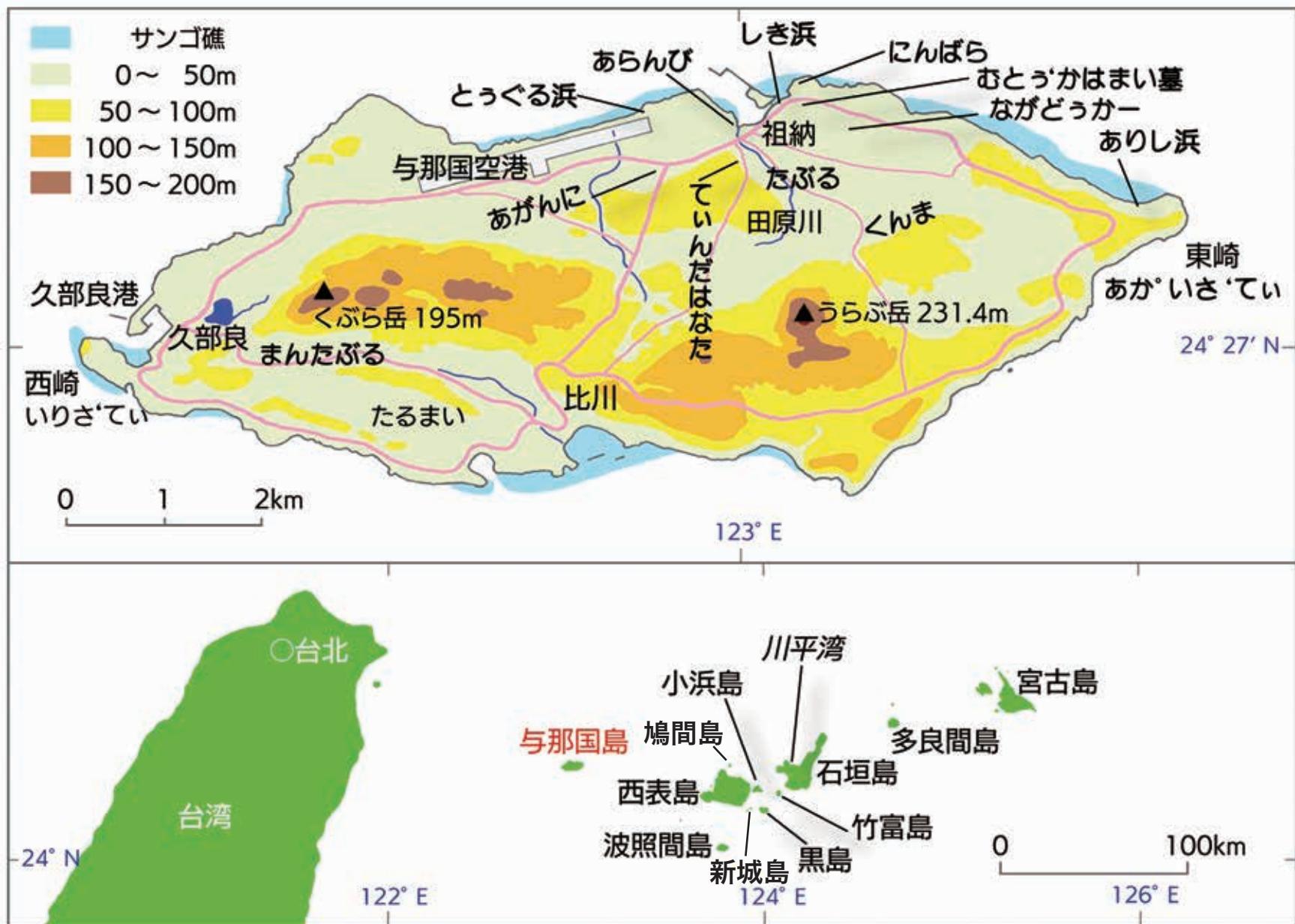
- 『成宗大王実録』卷104から 142
- 『成宗大王実録』卷105から 142
- 解説 149

第4部 伝承と記録の対話 151

- 『朝鮮王朝実録』と伝承の対比 152
- 著者との対話 154

編者のことば 165

- プロフィール 167
- 奥付 168
- 濟州島のみなさまへ（全京秀） 169



与那国島の位置（下）と《ふがぬとう》伝承に登場するおもな地名（太字）

地図作成 © 渡久地健



第1部 語りつがれた漂流民の物語 (昔むかしの与那国島で)



1. 1 昔むかしの与那国島で

見わたす限り、まわりは海です。
青い青い海と、澄んだ青い空。サン
ゴの海の小さな島、それが与那国島
です。

これは、いつも知れない遠い昔
から伝わるお話です。



このお話の頃からある《ぬ‘ていぬちん》(いのちの粒) といわれる雨水のため方

1.2 猫と鶏が大さわぎ

昔むかし、いつのことかわからないほどの大昔、いつも静かな島が、急にさわがしくなりました。

ねこにわとり
猫や鶏が、けたたましく鳴きさけびます。そのうえ、西へ東へと走りまわる大さわぎ。昼も夜も鳴きさけびます。

「これはただごとではない、何かが起こるんだ」人々は、不安な日々を過ごしていました。

* このお話の頃の与那国島では、鶏は鳩などの野生の鳥たちや牛とともに、神聖な生き物とされていて、食べることはませんでした。猫は、人間の暮らしの安全を見守り、危険が迫ると警告を発してくれるものとして大切にされていました。それらが大騒ぎしたのは、何か重大な異変が起きる予兆だと思われたのです。





1.3 海で見つけた男たち

そんなある日、四艘の舟が大きな魚を捕ろうと、島の南の海に出ました。一人の男が何か胸騒ぎがするというので、島の東側にまわってみることにしました。すると、与那国島と西表島との間の海で、三人の人が、海の中で一枚の大きな板に胸をあずけるようにして漂っているのを見つけました。つかまっていたのは、壊れた船のへさきの部分の板のようでした。手を振って助けを求めていました。舟に助けあげてみたら*波にさらわれたのか、ほとんど裸でわずかに腰のまわりに残った布もかわいそうにぼろぼろです。

めいめいが板に紐でお腹をくくりつけていたのはたとえ死んでもばらばらにならないためだったのでしょう。

口ぐちにいっしょうけんめい話していますが、何を言っているのかひとこともわかりません。舟の人たちはとりあえず着物をぬいで、裸をおおつてあげて大いそぎで島にひき返しました。

島では 何かがおこったことが すぐにわかつて 《むらぬうや》 **に伝えられました。



* 舟が1艘しかないときは、人の命を救うために、積んでいるものをすべて海に捨てるのですが、この時は舟が多かったので大いそぎで荷物や魚をみんな2艘の舟に集めて、空けた2艘の舟に漂流者を乗せました。

** 島の大切なことに指示をする役目の人。このときは女人でした。



1.4 みんなで浜にむかえる

あっという間に、浜にはおおぜいの人が集まりました。島に着いた三人はとても疲れきっていました。まず、井戸水をわかして飲ませました。食べ物はどうしようか？ 島のものを食べさせてよいのだろうか？ みんなで相談が始まりました。

顔つきは島の人たちと同じようですが、どこから来たのかわかりません。その頃の島の人が知っていた、沖縄でも、日本でも、中国でも、台湾でも、その南の島々のどこからでもないようです。ずっと後で知った 西洋の人たちともちがっていました。

それにしてもどうして髪^{かみ}の毛が、魚のしっぽのように短いのでしょうか。何か悪いことをして、その罰^{ばつ}を受けて切られてしまったのでしょうか。ひげはのばしていないし、からだの方も、毛が少なくてつるつるです。

三人がいっしょにけんめい話しています。島の人はちつともわからないなりに、いっしょにけんめいに聞いています。

当時の島の人たちは、髪を切るということをしませんでしたから、髪の長さが背丈ぐらいある女性はざらにいました。男性も髪は長いけれど、髪型はちがっていました。仕事をするとき、例えば稻刈りのときなんかは、長い髪では差つかえます。万一まちがえて、自分の髪を切ったりしたら、それは自分を守ってくれる髪を自分で切ってしまうということで、大変な不幸です。ですから、男は、うしろに束ねて、五寸（15センチ）ぐらいずつひもでくくって、じゃまにならないようにしていました。

後の話ですが、漂流民のところに集まってみんなで遊んでいるときに《まいぬどうち》（イナゴ）が飛んできて、長いあごひげに止まるのを面白がって、みんなで、誰のあごひげにたくさん止まるかを競争したそうです。

《むらぬうや》がお祈りするときは、曲玉や小さな珠を糸でつなげた宝物を天にかざします。普通の人もふだん首からかけているものをはずして上に差し上げてから祈りました。珠の色は、青、緑、茶色っぽいものなどがありました。



1.5 ヨモギを集める・鶏と猫をねぎらう

この様子を見ていた一人のおじいさんが言いました。

「ヨモギの匂いをかがせなさい。それが決め手だ」。

陽はもうかたむいています。《ふち》（ヨモギ）のできるだけいろんな種類をたくさん集め、よくもんで匂いをかがせました。すると三人は顔をほころばせ明るい表情になりました。みんな大喜びで踊りだしました。同じ食べ物で大丈夫だ！ それ!!

当時の島では、野草を食べていました。《ふがぬとう》たちが遭難した場所が与那国島とその東の西表島の間の海でしたから、東崎のあたりで《んがな》（苦菜、ホソバワダン）を探っていた人が、南方に大物を捕りに行くと出かけた舟がそろってこんなに早く帰ってくるのはおかしいと気づいて、走って《むらぬうや》に知らせたのでした。

《むらぬうや》は《うやだいでい》（これは一大事）と若い人は、仕事がなければ行きなさい、若い女の人は直接三人のお世話をしなさい、と指示して、おじいさんもひとり行かせたのでした。このおじいさんの知恵で、ヨモギを探しに行ったわけです。

その後《むらぬうや》は、大きな声で《みったんあびこー！ まゆんあびこー！》つまり「鶏も呼んでこい！ 猫も呼んでこい！」と叫びました。

《むらぬうや》は《ふがぬとう》が島に来ることを知らせるため大騒ぎをした猫や鶏を集めて「あんたたちが教えてくれたので、何ごとかと身構えていたのがよかったです。おかげで見逃すことなく救うことができたから、もう心をしづめて安心してください。言葉はしっかり受け取りましたから」と手を合わせてお礼を言って、それぞれの好きなごちそうを用意してふるまいました。

「また何ごとかあったら、よろしくね」と言ったとたんに、一羽の鶏が「コケー！」と鳴きました。これは「ひきうけた！」というしるしと理解して「他の鶏にも教えなさいね」と言ったら、また「コケー！」と返事したので、うれしいことだ、と《むらぬうや》は舞いをまいました。そうしたら、猫も鶏もその後についてまわって踊ったと伝えられています。

なぜだか、わたしは《むらぬうや》が叫んだあと、猫と鶏に話していっしょに舞っている場面がとても好きです。



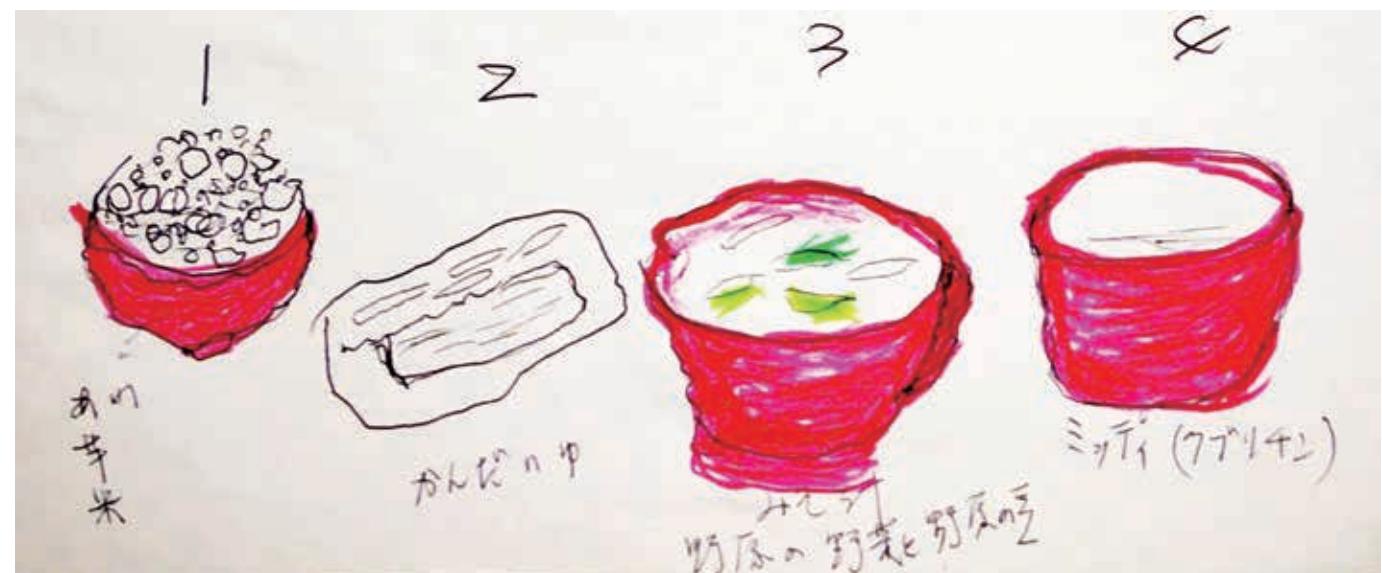
1.6 はじめての食事

人びとは手分けして大急ぎで三人の食事を用意しました。

- 1 お米に粟と山芋をませたごはん。
- 2 干した魚をあぶったもの。
- 3 野草と豆のおつゆ。
- 4 お米を口で噛んで作った、うすい甘いお酒。*

前の年にとった《ぬひる》(ノビル)の塩漬け**もそえました。竹を細かく割って編んだお盆のようなものの上に、木をくりぬいて作ったお椀をのせました。

三人は 何ばいもおかわりして 「ンム！ ヌム！」 といながら飲みこむように食べました。その様子にはみんなびっくりです。よほど長いあいだ ものを食べていなかつたのでしょうか。



*割れたお米とそれを炊いたご飯を口で噛んで発酵させる弱いお酒。このお話の頃から日常的に飲まれていました。

島では《み‘てい》といい、わたし (N子) が7歳になった頃から、村の行事ごとに口噛み酒を作るのがわたしだけの役割とされて、まる4日間も噛まされていました。あまりにもつらくて泣きながら噛んでいる絵は、わたしの画文集1『ぬ‘ていぬかーら・どうなん (いのち湧く島・与那国)』を見てください。

**左下の絵は《ひるかんち》(ノビルの塩漬け)を《かしぬは》(オオハマボウの葉)にのせたもので《ふがぬとう》がいた頃の食事だとして、わたしが毎日食べていたものです。



1.7 家を建ててあげる

言葉が通じない三人。どこから来たのかわかりません。人々は《ふがぬとう》(よその人)と呼ぶようになりました。三人には、一人ずつ住む家を建ててあげました。竹と木と草だけでできた家です。島では畠小屋として建てられていた《どういちだ》と呼ぶ家です。

いまの祖納の北の《しき浜》の少し東の方に、三人それぞれの家ができるまで、一日半かかったと伝えられています。それまでの間《むらぬうや》は海に近い《にんばら》の、いま《むとう‘かはまい》*さんのお墓がある東の方に住まわせました。

だんだん自分で料理もできるように、かまども作ってあげました。木と竹と草だけでできた家で**家の後ろは草の屋根がそのまま地面まで届いています。床は竹ででき正在、寝るところはクロツグの葉の上にバショウの葉をしきました。はだ寒いときは間に稲の藁を入れるとふかふかして暖かくなります。

人びとは毎日《ふがぬとう》が元気にしているか見にいきました。また《ふがぬとう》の家まで子猫をだいていって慣れさせて《ふがぬとう》のところまで、《まゆひらい》(猫たちの見回りの範囲)が届くようにしました。

* 食べ物のことや、季節のめぐりのお祈りと指示をする女人。ただし、この《ふがぬとう》のお話には《むとう‘かはまい》はこれ以外に登場しません。もう亡くなっていたか、それともまだ生まれていなかったのかはわかりませんが《ふがぬとう》がいた時は《むらぬうや》が《むとう‘かはまい》の役割もかねていたようです。《むとう‘かはまい》のお墓は、現在も北浦野1077-2番地にあります。

** さし絵は、与那国島では1970年代まで畠小屋として建てられていた《どういちだ》と呼ぶ住居です。《だ》は家のことですが《どういち》は「ゆらゆらする」という意味があります。





1.8 身体検査と魂の健康

海で救われて島に着いたときには、疲れきって、やせていた三人の《ふがぬとう》。かれらがそろそろ元気になってきた頃を見はからって《むらぬうや》は三人を連れてこさせました。

「舌を出してごらん」と言ってその舌をつまんで引っ張ったりして、全身の様子を見ていきました。その結果、健康な状態だと確認した《むらぬうや》は、お腹いっぱい食べなさいと、準備してあったごちそうをふるまいました。

《むらぬうや》の家には、いつでも両手両足の指の数よりも多い人に食べさせるだけの食べ物が、たっぷりと準備されていました。

すごくびっくりした時には、人間の《たまち》(魂)の一部が欠け落ちると、島では考えています。その欠け落ちた魂をひろい集めて、体の中にもどさないと、もとの元気をとりもどすことはできません。そのための儀式を与那国島では《たまちすい》と呼んでいます。海で遭難して助かった《ふがぬとう》たちも、元気になるには《たまちすい》が必要ですから、助けられてまもなくその儀式をするように《むらぬうや》はとりはからったのでした。

また、与那国島では男の人を事故や病気などの危険から

守るのは女の人の役割とされています。普通は《ぶない》(姉妹)がその役をはたすのですが《ふがぬとう》にはいません。そこで《むらぬうや》は三人の娘を選んでそれぞれが《ぶないがみ》(姉妹神)として《ふがぬとう》を守護するようにさせました。娘たちは《あとうあぶた》とも呼ばれましたが、これは「後お母さん」の意味で、普通はまだ子どもを産まない若いお嫁さんを指す言葉です。

でも《ふがぬとう》たちが故郷へ帰りたいという気持ちがとても強いことがわかつっていましたから、実際にお嫁さんになるのではなく、それぞれの《ふがぬとう》に気づかれないように、毎日のお祈りを通して安全を守るという役割だったのです。

*三人の《ふがぬとう》のひとりの左足には、指が5本ではなく6本ありました。自分自身、両手の指が6本ずつあった《むらぬうや》は、ほかの人と違っていることを大切にしようと、その6番目の指に、清めの《ぶー》(苧、カラムシ)の糸を巻きつけてていねいにお祈りをしました。

またあるひとりは《むらぬうや》に《またぶす》(内股)を見せて、そこにあざがあることを打ち明けました。これは《まりちぬち》と呼ばれ、生まれついて天から授かった特別の印のひとつですから《むらぬうや》は、そこに息を吹きかけて手をあわせて拝みました。



1.9 下着《あっぱ》とはじめての着物

救いあげて与那国島につれて帰った時の三人は、ほとんど裸でしたが、巻スカートのような下着をつけていました。この下着は与那国島のものとは違っていました。《ふがぬとう》がその作り方を地面に線を引いて教えてくれたので、島の人は鎌で自分の着物を切り裂いて、替えを作つてあげました。それは《あっぱ》と言われています。これは《ふがぬとう》の言葉だったかもしれません。それから着るものを作りました。^{はた}機で織った細い布を3枚、魚の骨の針でぬいあわせた袖のない服でした。植物の汁で染めてあります。

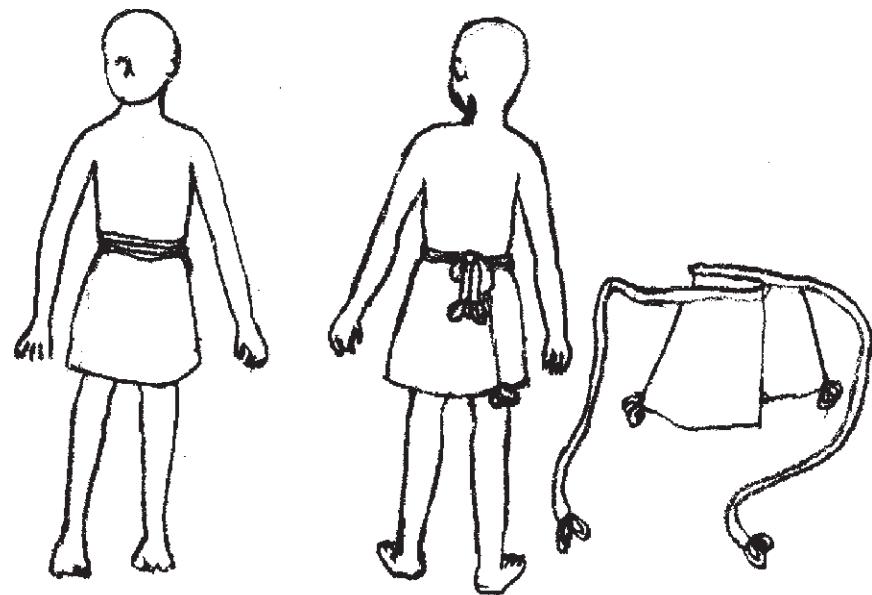
《ふがぬとう》の三人は、若者が小さめに作つて着せてみたら、体格に比べて小さすぎてつんつるてんだったので、みんなで思わず大声で笑いました。

これからは食べ物がなくて困ることがないように、という願いをこめて《むらぬうや》は米粒が入つたお守りをわたしました。

《ふがぬとう》のひとりはうれしそうに首をふりふり歌をうたいました。後から作つた着物は島の丈の長い着物とはちがつて上と下を短く作つて別べつに着るようにしてあげました。

《ふがぬとう》の下着の《あっぱ》は、ぼろぼろになつていましたが、乾かして広げたものを参考に、いっぱいいっぱい作つてあげました。ひもと布の端に、二つずつ輪がついている面白い形のものでした(7.4に写真)。

座る時は、与那国島では、正座はしないで膝を開いて両方の足の裏をつける《びらんか》と呼ばれる座り方が主流でしたが《ふがぬとう》は、この絵のように片膝を立てて座りました。わたしの知つているお年寄りも、座敷での座り方はいろいろでしたが、木の下にゴザを敷いて座る時はほとんどの人が立て膝でした。



《あっぱ》とそれを着けたようす © 安渥貴子



2.1 泣きやまない《ふがぬとう》

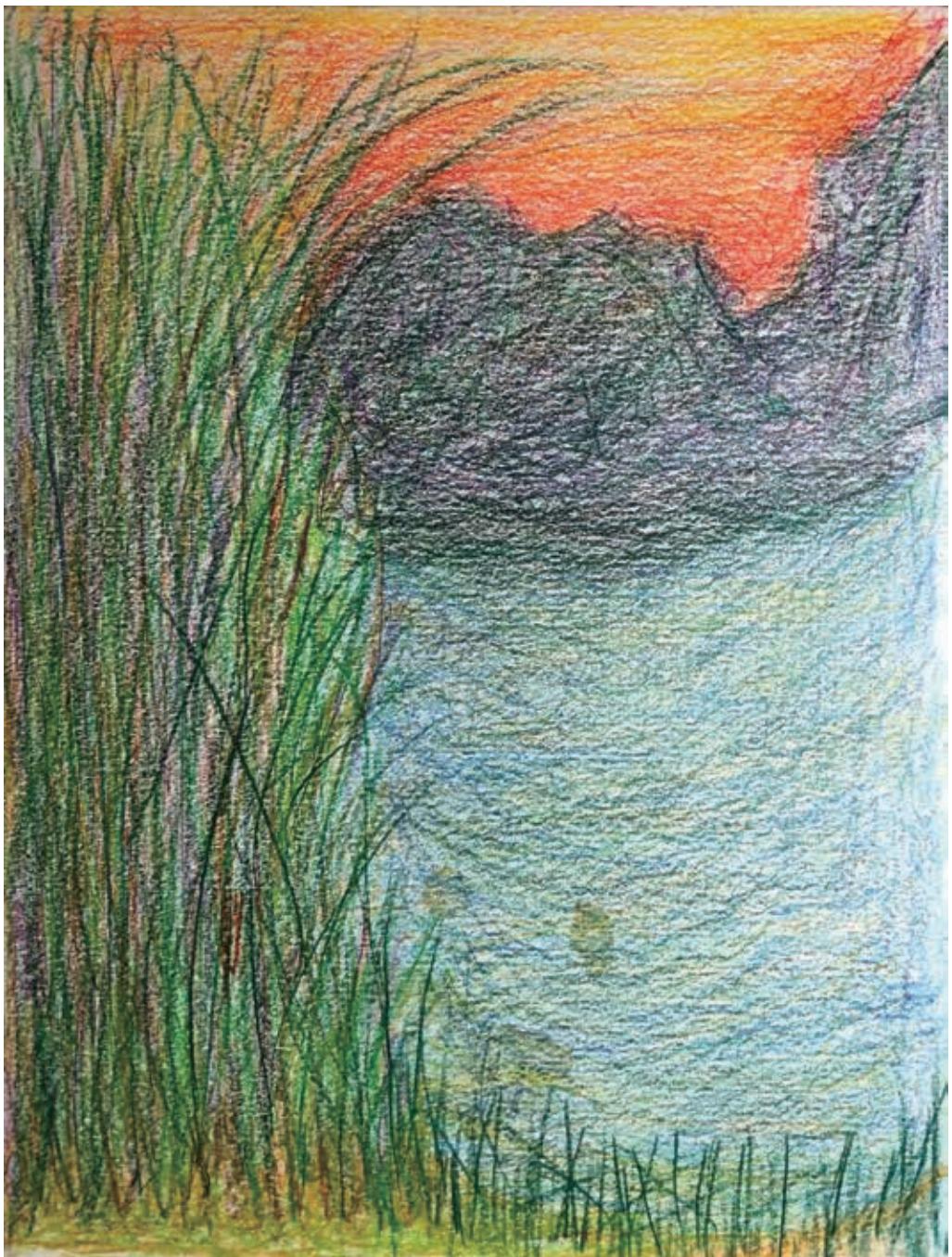
《ふがぬとう》の三人は《しき浜》の海に沈む夕日を眺めながら、北西の方角をみつめては泣いている姿がよく見かけられました。

島の言葉では《だんさ》*といいますが、島の人は、ああふるさとに帰りたくて悲しいんだなあと思いました。

《ふがぬとう》の一人が、木の下ですーっと泣いています。泣いては休み、休んでは泣きと、それが毎日続きます。

人々は気になり、ほかの二人を訪ねてみました。やはり同じように毎日泣いています。木の葉が落ちても気がつかない。虫が寄ってきても気づかない。だれが話しかけても、ただ「うんうん」といって泣くだけです。

* 誰かを恋しがって、会うに会えないことを切なく思う気持ち。主に、ホームシックを指す場合が多い。





2.2 五人の仲間が死んだ

みんなはどうしていいのかわからなくなり、三人を連れて《むらぬうや》に相談に行きました。泣き疲れている三人に「泣いてもいいよ」と話しかけながら、みんなもいっしょに泣けてきました。

《むらぬうや》は、泣きながら話す三人をやさしく抱きよせます。悲しみのわけを知った《むらぬうや》は、三人に静かに話しかけました。「友だち五人が海におぼれていったんだね。あなたたちは友だちの分も生きるんだよ。たくさん食べて元気になりなさい。そして、おとうさんおかあさんにきっと会うんだよ。」





2.3 五人の仲間のために

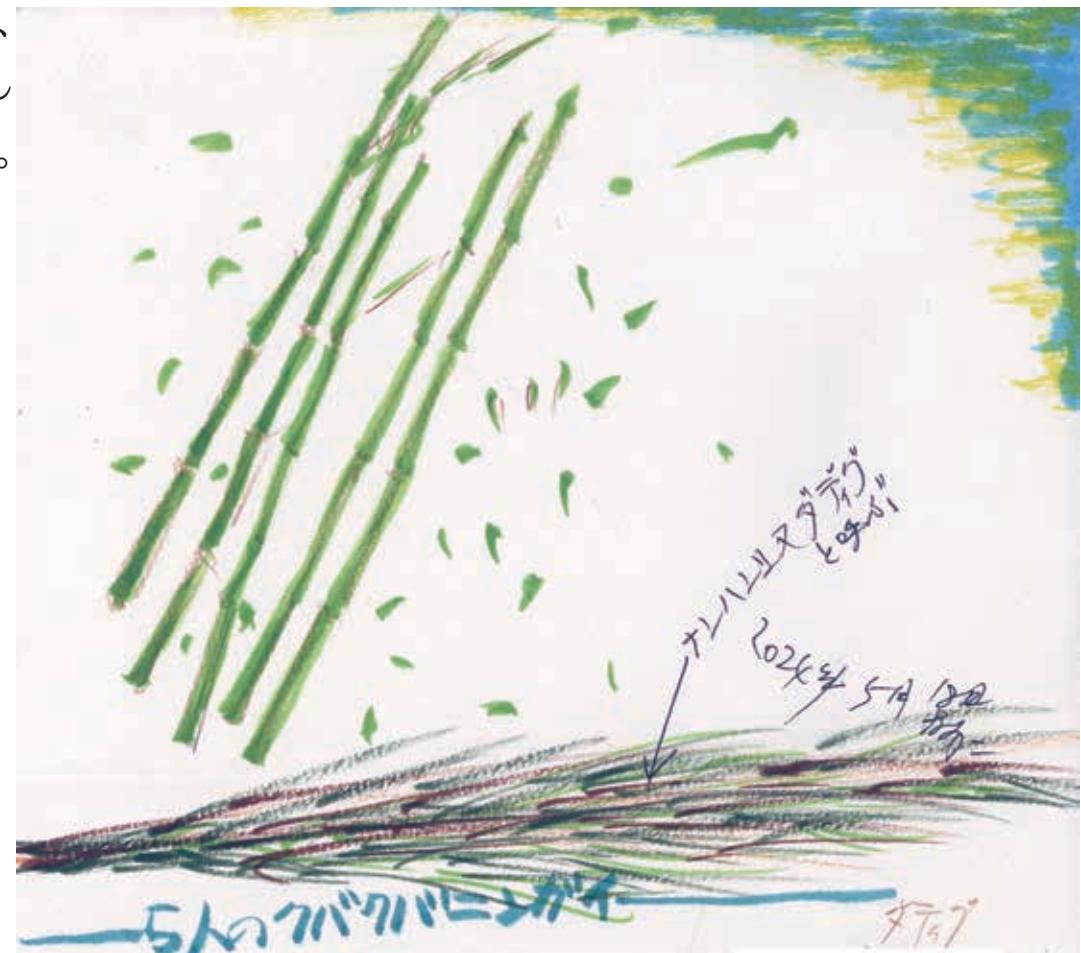
その日から《むらぬうや》は、なくなった五人のための祈りをかかさずに、毎日5つの小さなおむすびを作って食べました。

「わたしが食べたら、五人が食べたことになるんだよ。」

そして島の人たちは、五人が遭難した《あがいさ‘てい》(東崎)の北側の《ありし》という、おいしい水のある小さな浜に、海で亡くなった五人の魂を招くお祈り《‘くば‘くば にんがい》をして、魂が安心して休める場所を作ってあげました。

小さなおむすびを五つ、毎日吃るのは、小さい頃からわたし(N子)の役目になっていました。学校では先生があずかってくれて、給食の時に吃りました。その習慣がいつも聞かされていた《ふがぬとう》のお話と関係があると気づいたのは、ずっと後からのことでした。母は、祖母に言われるままに準備してくれていて《ふがぬとう》のお話を何も聞かされていないようでした。

わたしは中学生の時と高校を卒業したあの二回、お年寄りに言われてこの《ありし》の浜へ降りて《だでいぐ》(ダンチク)という靈力のある植物を、長いまま横たえて、五人の魂を招いて慰めることを覚えさせられました。





2.4 山みかんの花に泣きくずれる

山で《だまんにん》(シークワーサー、ヒラミレモン)の花が咲き乱れている所にさしかかった時のことです。《ふがぬとう》はワッ！と泣きだし、次から次と悲しい涙を流したのです。人々は「ああきっと、この人たちのふるさとの島にもみかんの花が咲くんだろうなあ」と思いました。そしてみんなもいっしょに泣いてしました。

下に示した、ホームシックになった《ふがぬとう》*にうたってあげた歌はその時にできたものと言われています。

白い花の山みかんの歌

だまぬすぐぬ つばなぬ だまんにん
かぶさる かぶさる かだい
んだ んにん かぶちい かぶち
だまんにん‘ていぬ かぶさるかだいば かでいにぬし
んだちむ んだんにんば まりちまんき
かなあでい ぐだるはでい



山の奥の 白い花の 山みかん
かぐわしい かぐわしい かおり
あなたの 心も かぐわしい
かわいい山みかんの かおりを 風にのせて
あなたの心も ふるさとに
きっと 届くはず

* 絵では三人を描きましたが、伝承では、このとき山に入ったのは二人だけだったということです。



2.5 病気になったとき

《ふがぬとう》のひとりが、暗がりでうずくまっていたので、心配して調べてみたら、お腹が痛いことがわかりました。《ぬひる》(ノビル) と《ちば‘てい》(ヒハツモドキ) を練りあわせて、お腹の上にのせたら、二、三日で治りました。

《ちぶらり》といって、粘液便がでてお腹が痛い様子だったときは《ぬひる》と《ちば‘てい》をすりつぶしたものを、交互に飲ませて治しました。

便秘で苦しがっていることがわかったときは、おじいさんが背中から《ふがぬとう》の体を抱きかかえて《しばきんなよー》(心配しないでいいよ) と声をかけ、おばあさんが手にツルムラサキをつぶしたぬるぬるしたものを塗りつけて、指でおしりの穴につまつた硬い便を掘り出してあげたら、たくさん出て治ったこともあります。

背中にできものができたときには、ヨモギの葉をつぶしたもの塗ってあげました。傷には、泥をぬって治療しました。

高い熱が出て何日か続いたことがあります。《ばすぬは》(バショウの葉) をたくさん並べたものの上に寝かせて、何枚も取り替えているうちに良くなりました。こんなことが四回ありました。

《ふがぬとう》たちは、猫たちをただのかわいいものと思っているようでしたが、あるとき《むらぬうや》が、猫には、人間の安全を見守り、危険が迫ったら合図をして伝えるという大切な役割があるのだということを伝えました。そうしたら《ふがぬとう》は、島の人と同じように、猫を拝んで心からお礼をいう《まゆうやまい》(猫敬い) をしました。



なみこ





なみ

3. I 潮の満ち引きをはかり日を数える

《ふがぬとう》は、魚をとるための網を止めている竹の棒が濡れているのを見て、潮が引いていることを言い当てました。この方法で、潮の干満を察知する方法を知った島の人々は、それまでよりはるかに安全に、磯に出かけて海の幸を採取することができます。川に竹を立てておくことで、海に行かなくても潮の干満を知ることができます。このようにして、潮の満ち引きをあらかじめ正確に予知して、潮が満ちてきて帰れなくなってしまうという事故も防げるようになり、子どもでも潮干狩りに行くことができるようになったと言われています。

また《ふがぬとう》は、家の軒下にはじめは藁を一本ずつ、やがてアカメガシワの葉をぶら下げて、毎日一枚ずつ増やしていました。

「きっと日にちを数えているんだろうなあ」と島の人びとは話しあっていました。





なめこ

3.2 庭に絵を描く

《ふがぬとう》は木の枝で庭にくるっと輪を描いて、その中にいろいろな絵を描いていました。

その日とれた貝や魚、野原から採ってきたおいしい草。山で採れた木の実。

その絵の横には《ぐでいぐでい》とした模様を描き、いっしょにけんめい説明しました。けれど島の人には最後までとうとうわかりませんでした。後になって、あれは島にはまだなかった「字」だったのかなあ、と話すようになりました。

* 月の形が前と同じになると、そのたびに藁を一本、家の軒にぶら下げる泥でぬりこめて何か月たったかを忘れないようにしていました。

この頃、島の人が数を数えるときは、なった縄に《さん》と呼ばれる短くした藁をはさむか、細い縄に結び目を作るか、大木にトウヅルモドキを細かく裂いたものを巻き付けて、竹を差し込むやり方をしていました。何を数えているかしらないけれど《ふがぬとう》のやり方は、島のやり方より手軽そうだとうわさされました。





3.3 水と便所と火

《ふがぬとう》たちがもっとも好んだ飲み水は《ていんだはなた》の絶壁の下の湧き水でした。

大きな木の幹にヤシの葉をしばりつけて《いちたらい》と呼ぶ石の容器に雨水を貯めることも《ふがぬとう》は普通にやっていました（1.1 参照）。

島の人がやっているように、貯めてある水にゲットウの茎を切って挿しておくと、ながく腐りにくく教えてあげたら、すなおにそのようにやっていました。

《ふがぬとう》がいた頃、すでに便所はありました。そして、出先出先で自分が出したものをきちんと処理することが与那国島の習慣でしたが、そのやりかたを《ふがぬとう》たちの納得のいくように教えるのが面倒くさいというか、教えきれなかったのです。

便所がないところでうんこが出たとすると、それを地面に浅く埋めます。その深さは、自分の指を広げた五寸（15センチほど）より深くしたらいけません。五寸先には、地底の神様である《にらがなち》がいらっしゃるから失礼になるんです。自分の足元の下五寸には《にらがなち》がおられるという信仰がすでにその頃あったということがわかります。浅く掘って、うんこしたら土をぱらぱらと掛けて、

その上に草を目印に乗せておき、おしっこはそのまま流します。やって見せられればすぐわかったのですが、実演がむずかしいでしょう。とくに「五寸の深さということが伝えきれなくて」と話しながら、島のお年寄りがよく爆笑する場面でした。演技してみせるじいちゃんや、股を広げてすわるばあちゃんなどありました。

便所も、住まいのあるところや道の途中の公衆便所みたいなものもありました。公衆便所みたいなというのは、木の枝で囲ってある場所。隠れるのではなくて丸見えでしたが、ここですよ、と木や竹の棒が立ててありました。人間の体の幅の2倍といわれている区画を棒でかこって示しておきます。現代人がするような立ち小便などはしない習慣でした。

当時のかまどは石を三つ置くものでしたが《ふがぬとう》には特別に、大きい石の間を小さな石で埋めてあげていました。火種がなくなると、火をおこすことはむずかしそうでしたから、火種をもっていってあげることになりました。火種の《うている》（おき）を助け合う仲を、島では《うていひらい》（おきの交際）と呼んできました。



祖納の東《ながどう》にある《カー》(井戸)。
《ふがぬとうぬかー》とも呼ばれた(6.7 参照)。



3.4 食べていいものといけないもの

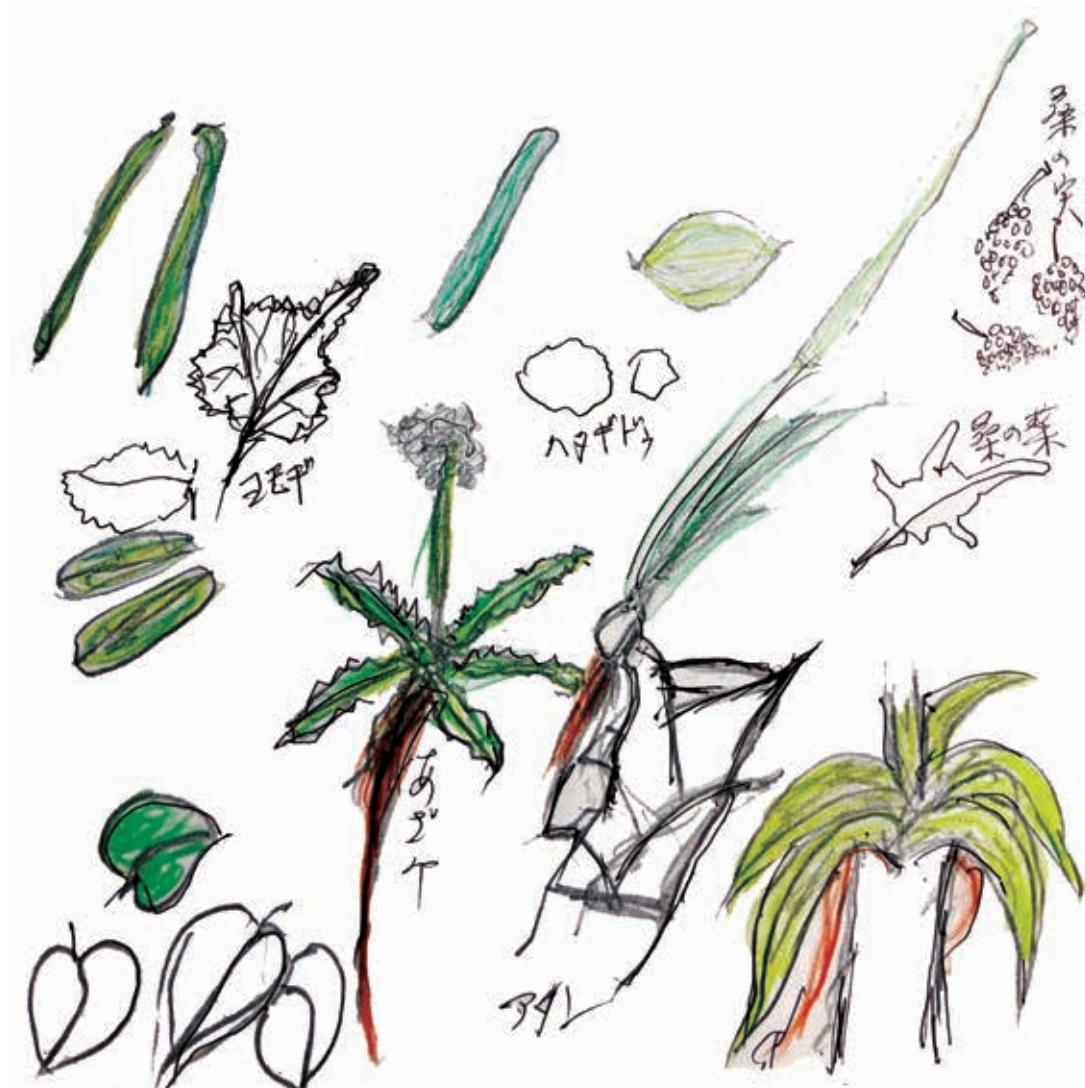
《ふがぬとう》がいた時の与那国島では、田んぼに育てる稻や、畑の粟が大事な食べ物でした。この頃の「いも」は サツマイモではなくて、山芋のことでした。そして野菜といえば、ここに描いたように、畑よりも野原に自然に生えるものがおもでした。

桑の実や山の椎の実はごちそうでした。椎の実を口でかんで作るお酒もありました。

《ふがぬとう》が滞在した頃、与那国島ではソテツの実を水でさらして毒ぬきして食べていました。《むらぬうや》は、言葉が十分通じないために、毒抜きのことを知らない《ふがぬとう》が万一中毒したらたいへんだから、ソテツが食べられるということを《ふがぬとう》たちに知られないように隠すことをきびしく指示しました*。クワズイモも食べたということですが、やはり強い毒があるものですから、これも食べられるとさとられないように隠しました。ヤシガニもソテツやクワズイモを食べて毒があることがあるせいか《ふがぬとう》に食べさせてはいけないものでした。

右の図で《はたぎどう》というのは、地面から出るキクラゲのようなもの（藍藻類）です。

* 若者たちが《むらぬうや》の禁令を破って、ソテツで作ったものを《ふがぬとう》に食べさせたことがあるそうで《ふがぬとう》たちは、うまいうまいと喜んで食べたと伝えられています。





トマト

2016/3/18

3.5 魚をみておどろく

三人は《にんばら》のサンゴの海にいる魚を珍しがって、いつも熱心に見ていました。赤・黄・青・緑・しま模様の魚たち。あまりにも珍しがるので、島の人たちは《ふがぬとう》のその姿がかえって珍しかったと言います。

《ふがぬとう》は、刺し身を食べませんでした。生で食べるときも、何かであえて食べていました。魚を薄く切って熱い石の上にならべて焼いて、その上に酢をかけるやりかたをしたら、島の人たちも《まんすや まんすや》（おいしい、おいしい）ということになりました。

かまどの火で熱くなった石も使いましたし《にんばら》では、太陽で熱くなった石も使っていました。

島ではあたりまえの魚を珍しがったり、刺し身を食べなかったりする《ふがぬとう》の姿に、この人たちの故郷は与那国とはちがう島なんだねえ、と言いあっていました。



なみい



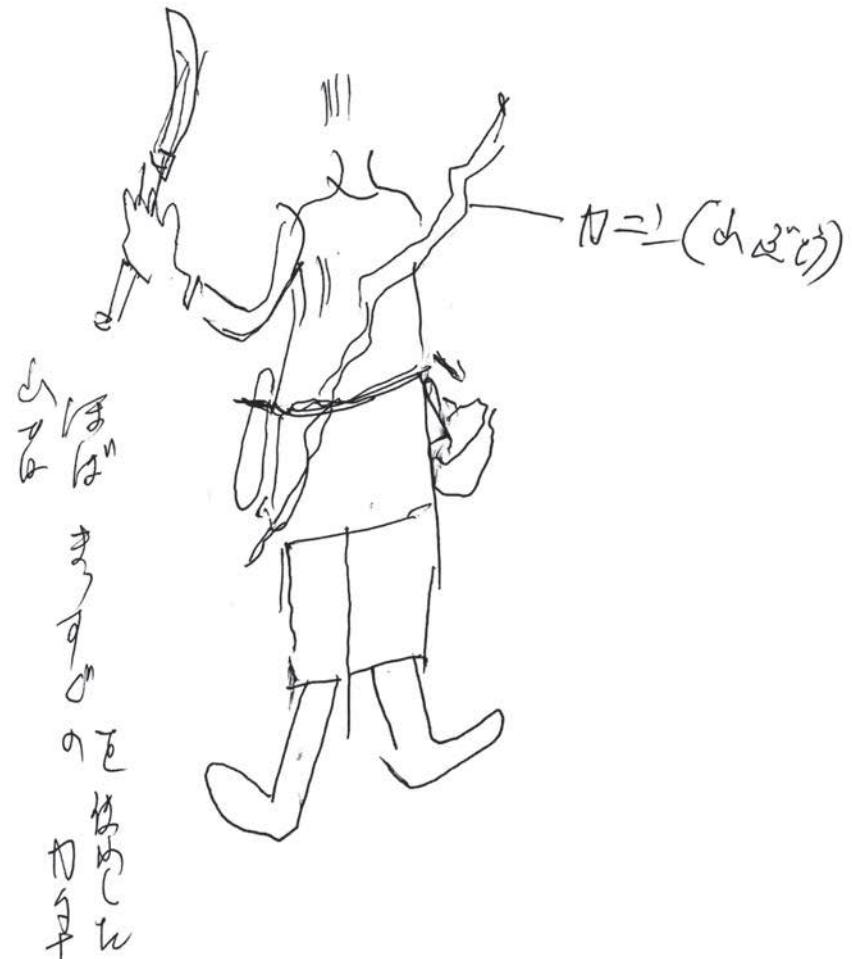
3.6 山に入る時の約束

はじめのうちは 山を歩くことになれていなくて、
「こんな坂、登ったことがない」と言うので、背負ってあ
げたこともありました。

やがて、島の人と同じかっこうをして 手には山刀を持
ち《かにん》(ヤマブドウ)のつるを背負うようになりました。

《ふがぬとう》が山に行くとき、島の人たちと一つの約束
をしました。山に入る所の木に白い布を下げておくこと
です。帰りには、それをとりはずしてくるのです。もしこの
白い布が下りっぱなしだと、みんなで探しに行くことに
しました。《ふがぬとう》はこれをよく守りました。また、山
から出てきた後の山へのお礼の祈りも教わったとおり、忘
れることはませんでした。

《ふがぬとう》は、一度通った道では、けっして迷うこと
がありませんでした。

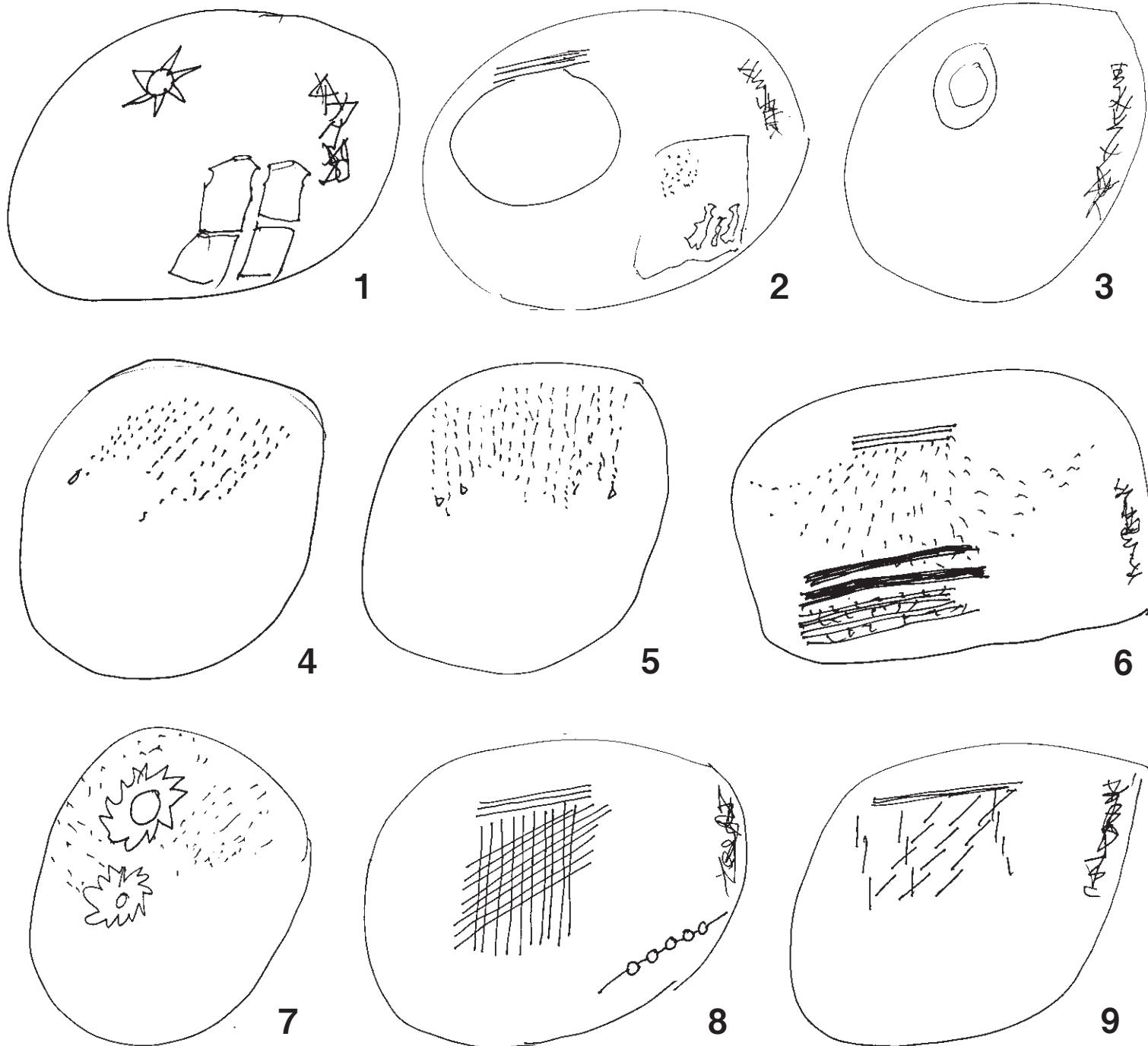


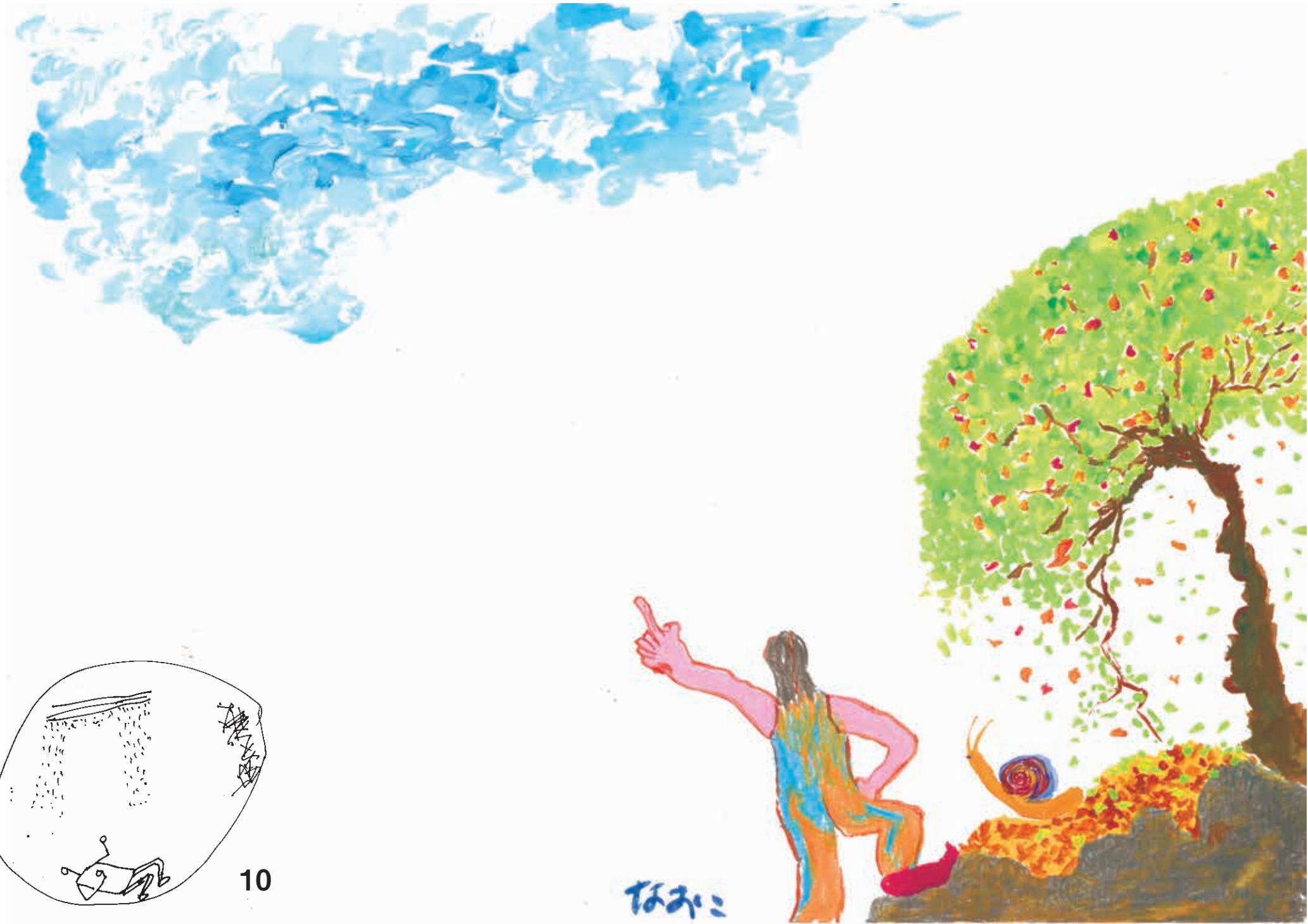
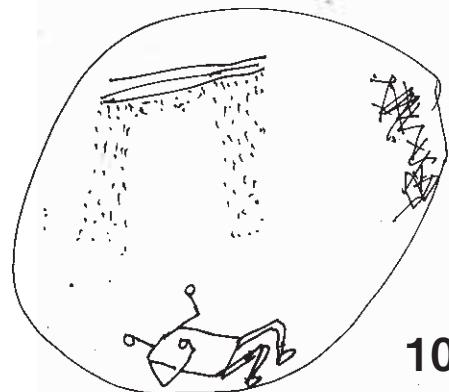


3.7 天気をよむ

《ふがぬとう》は雲を見て、それを指さしながら、今日はどんな天気になるか言うことができました。それに基づいて、その日はどこに何をしに行くかを決めていました。それを地面に描いたのを見て、島の人たちは手助けをしました。雨の日には、晴れたら使う道具や縄を準備したりしました。

- 1 カンカン照り、服を干す。
- 2 晴れ、野菜を干す。
- 3 夜、月に笠がかかる。
- 4 風雨。冷えきていた。
- 5 しとしと雨。
- 6 《きむやあみ》霧雨。
- 7 猛暑か。諸説あり。
- 8 1日中大雨。
- 9 雷雨。とても怖がった。
- 10 雨は一時止むが、また降るからお出かけはしない。





3.8 海のものと山のものをひとつ鍋で

おいしいものができると、持ち寄って人々は三人といっしょに食べました。海のものと山のものを、一つの鍋で料理することを三人は教えてくれました。島にはそれまでなかった食べ方です。あまりのおいしさにみんな大よろこび。

それからは このやり方がはやりようになりました。

魚や貝やカニを先に鍋に入れるともっとおいしくなることも教えてくれました。

ある時、島の人がまだ生きているきれいなサンゴをとってきて、飾るためにあげました。与那国島のサンゴは、近いところでいろいろの種類がとれます。ところが《ふがぬとう》は、これをばちばちに碎いて、葉っぱに包んで、煮物の鍋の中に入れました。そんなやり方を見たことはないので、島の人たちは驚きました。

《ふがぬとう》は、白にこげ茶色の節がある色がきれいなサンゴも、同じようにしました。

島の人は、きれいでしょ、とあげたのに、こなごなにしたのでびっくり。お料理に入れたので、二度びっくり。島の人たちがまねをしてみたけど、たいしておいしくもなかったので、それっきりになりました。





3.9 すぐ割れる土鍋とその改良

ある日 《ふがぬとう》はぶんぶん怒っていました。

庭に絵を描いて 文句を言いました。「土でできた鍋がすぐ割れる」ということです。

そうかそうかと言って、島の人たちは三人が困らないように、たくさん鍋を作ってあげました。

《ふがぬとう》が来た頃の与那国島の鍋は土鍋で、取っ手はついていませんでした。彼らは、それでは不便と思ったのか、土鍋を焼く時に取っ手をつけたり、トウヅルモドキという植物の蔓あとから取っ手を付けることを考えたりしました。島の人たちは《ふがぬとう》が島を去ってから、自分たちでもいろいろな土鍋を作ってみるようになりました。



この写真の土鍋は《ふがぬとう》が工夫した鍋のひとつ。汁だけを注ぎ出せるようになっています。おとしよりの話でわたしが形どって作ったものです。



なあこ

3.10 ヤシの葉の鍋を作る

ヤシの葉で鍋を作ることができます。《くば》の葉を丸めて作る容器の《んぶる》で湯が沸かせることを、島の人は知っていましたが、沸いてふきこぼれるまで《ふがぬとう》がしたので驚きました。



10
九：

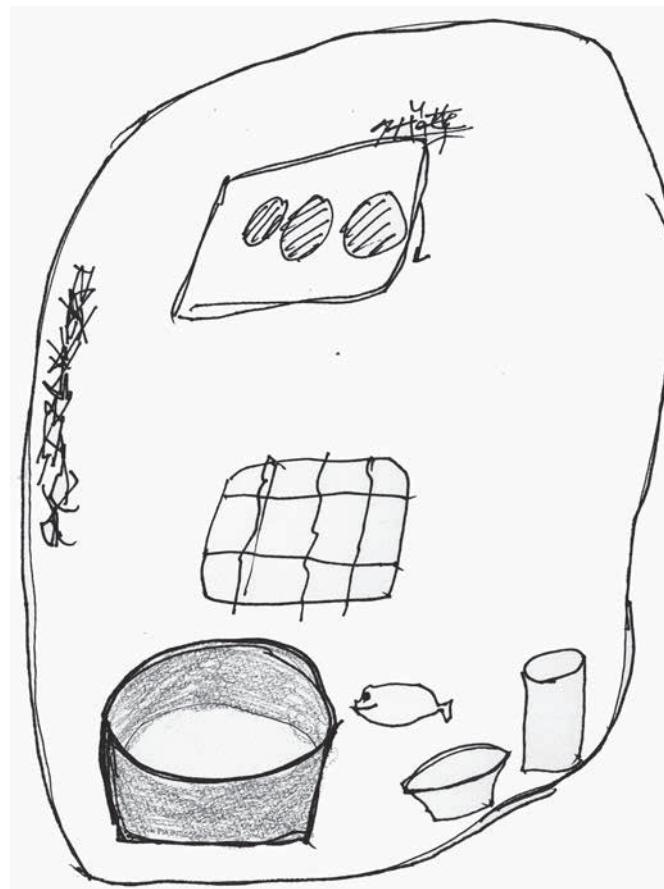
3.11 新しい漬物のおいしさ

その頃の《‘きむぬ》(漬物)は海に入れて味付けしていました。ところが《ふがぬとう》はアダンの新芽の芯をつかった漬物を作ったり、干した魚に去年の塩漬けのノビルとヒハツモドキの実やさらにツバキの実も入れて、その上から石を重しにしたのです。できあがった新しい漬物のおいしさに、みんなびっくり！

さっそく山に行って漬物石をさがしました。

また《くば》(ビロウ)の葉にはさんで、重しをして水気を少なくしてから鍋に入れるとおいしいこともやってみせました。

《ふがぬとう》の話に《くす》(トウガラシ)は、出てきません。一番辛いのは、トウガラシではなく《ぴばち》(ヒハツモドキ)でした。ヘクソカズラの実、カラスウリの葉っぱ、甘い木ノ実など、いろいろなものを入れて味付するのを教えてくれました。





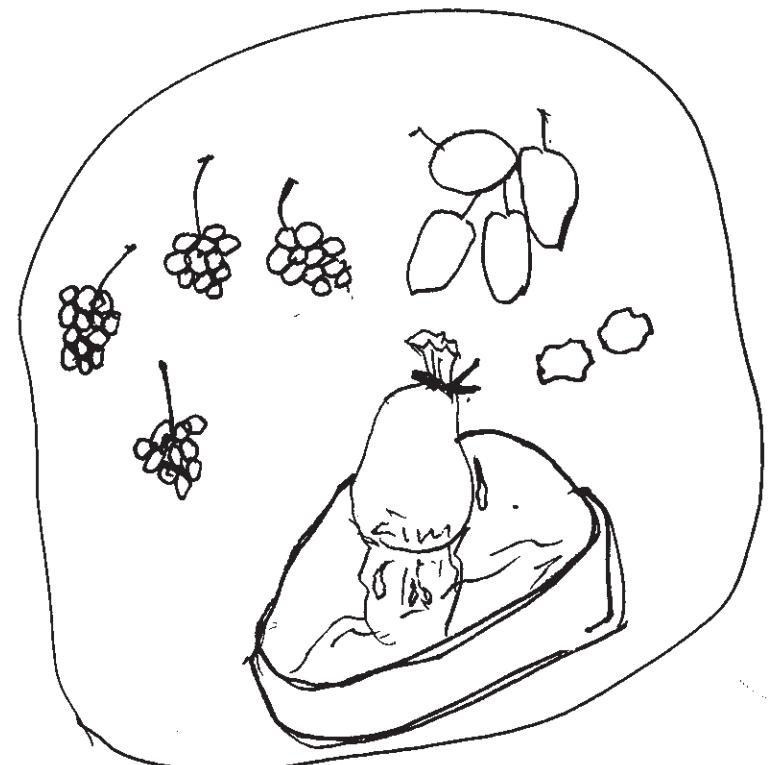
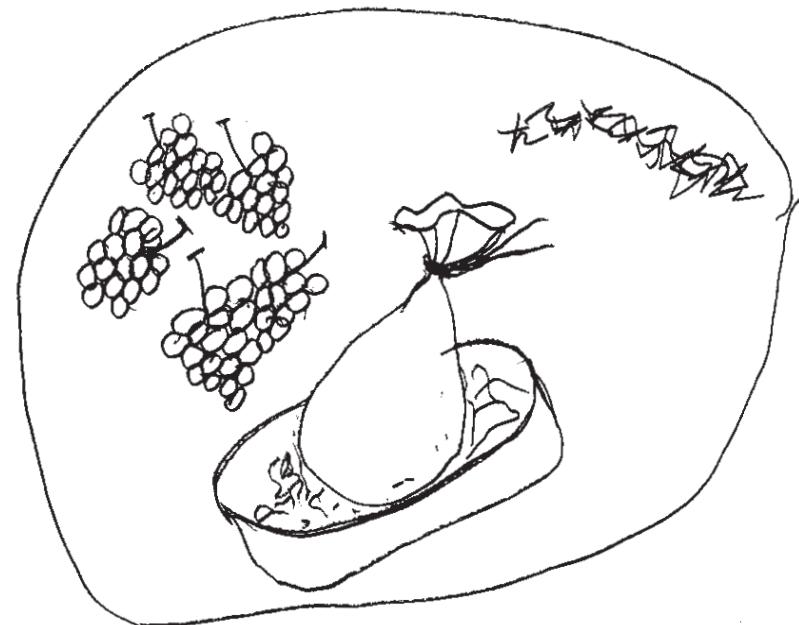
なみ

3.12 果物の汁と皮を生かす

《ふがぬとう》は、桑の木をとても気に入っていました。若葉は干しておいて食べますし、桑の実をつぶした汁を発酵させて川の上流に保存しておいたものを飲ませたら「おいしい」という顔をしました。《ふがぬとう》は桑の実を集めてしまって、その汁を漬物に入れたり、さらに口噛み酒を加えたり、いろいろな果物の汁をとって、たくさんの工夫をしていました。

みかんの皮を干した陳皮の作り方も《ふがぬとう》から習ったものです。陳皮は、島の言葉では「みかんの皮」の意味の《んにんぬかー》といいます。《んにんぬかー ふしぶたんさい》みかんの皮を干していたんだよ、と語られています。山みかんの青い皮をそのまま干して作る方法と、土に自分の肘の長さの穴を掘って、そこに藁に包んで入れてから、種子と皮と汁にわける方法でした。

皮と種子は乾かして、汁は甘味を加えておいしくして飲んだり、そのまま魚の切り身にかけたりしていました。沖縄で今普通にやっている刺し身にシークヮーサーの汁をかけて食べるという方法は、少なくとも与那国島では《ふがぬとう》以来のこととされています。





なあ

3.13 もやしと発酵の力

《ふがぬとう》は《ひんでいまみ》(フジマメ)という豆をもやしにして食べることをやってみせました。

やわらかくておいしいのでみんなびっくり！

《ぎんす》(下味噌)と呼んでいた味噌の作り方をやってみせたら《ふがぬとう》は、袋の中で少し作って木の棒で押し出すとじょうずに使えることを教えてくれました。

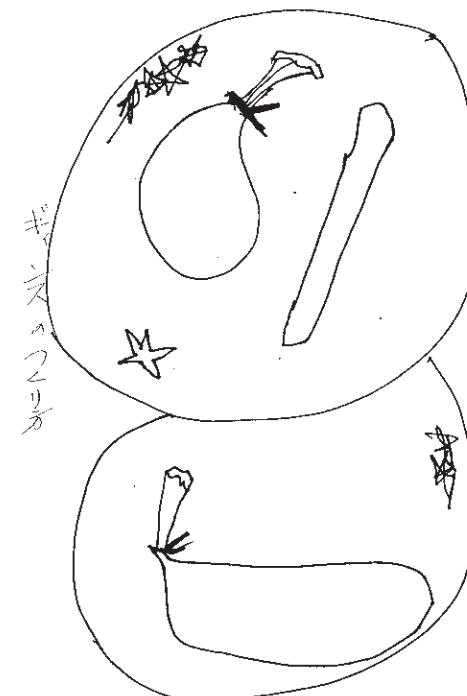
また《ふがぬとう》は、お米を固く炊いて、そこに甘い木の実を入れて、土に埋めておいて取り出したら、おいしいお酒ができている、というものを作って、みんなに振る舞いました。わたしもやってみたけれど、たしかに、口噛み酒よりも強くておいしいものになります。

酢を作ることも《ふがぬとう》が教えてくれたものと言われています。島には、酸っぱい味のものはもちろんあって、カタバミなどの酸っぱい味を好んでいました。けれど、一番最初の酢は《ふがぬとう》が作ったものでした。お米の酢を作ったり、まわりの木の実を集めて酢を作ったそうです。

わたしも、お話の中に出てくる《ちんまや》(ツルグミ)とか、ヤマブドウとかいろいろごちゃまぜにして酢を作つてみました。

《ふがぬとう》は、たくさんたくさん、島に新しい知恵と工夫を残してくれました。じいちゃんばあちゃんの話では《ふがぬとう》が教えたことで、島はいい暮らしになったと、くり返しきり返し出てきています。

ここから、島でいろんなものを、発酵させる暮らしが、一気に多くなりました。今、与那国島にある、いろいろな発酵食品の始まりは《ふがぬとう》たちの知恵にさかのぼるものが多いのではないかなど、これは、わたし個人で思っていることです。



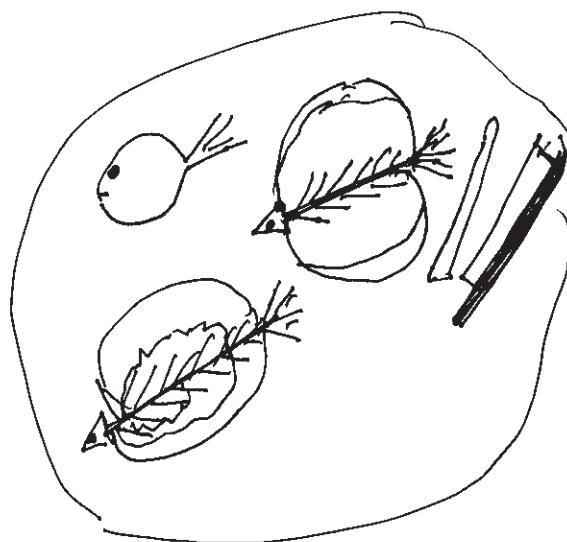
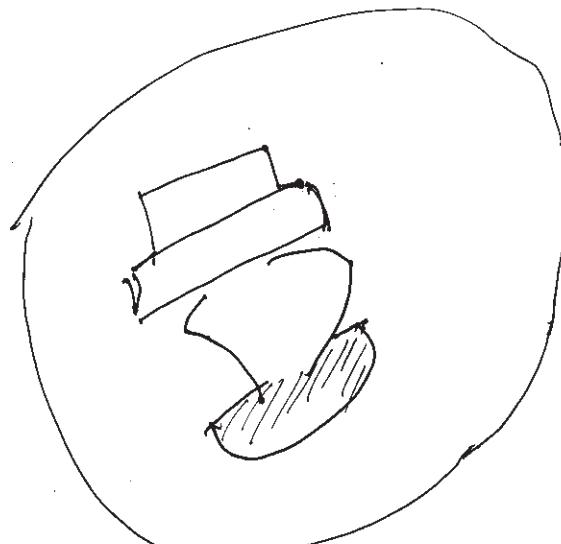


3.14 魚をつぶして食べる

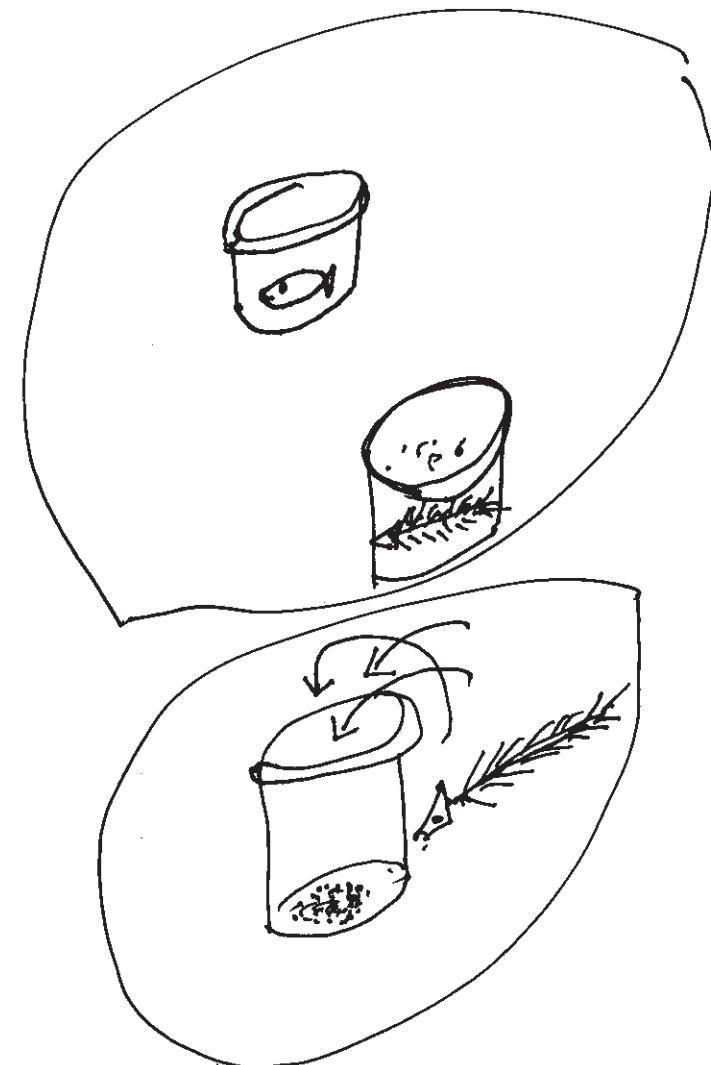
《ふがぬとう》は、魚をぐちゃぐちゃにして、魚の身も内臓も、骨と鱗以外は頭も入れて、みんなまぜて《なん‘てい》(小さな杵) で突っついて何かを作っていました。これを作るための杵は、他の料理には使わないようにしていました。

これを見ていた島の人は「あきゃー、あだりー、ぬーきるかや？ (まあ、きたならしい、何してるのかな？)」と言って見ていました。

魚の骨を外して、身だけを杵や《いん》という、石の斧のような道具でつぶしてクニュクニュにして食べる方法は、とてもおいしいと評判になりました。



クニュクニュ
あわておどかせ!



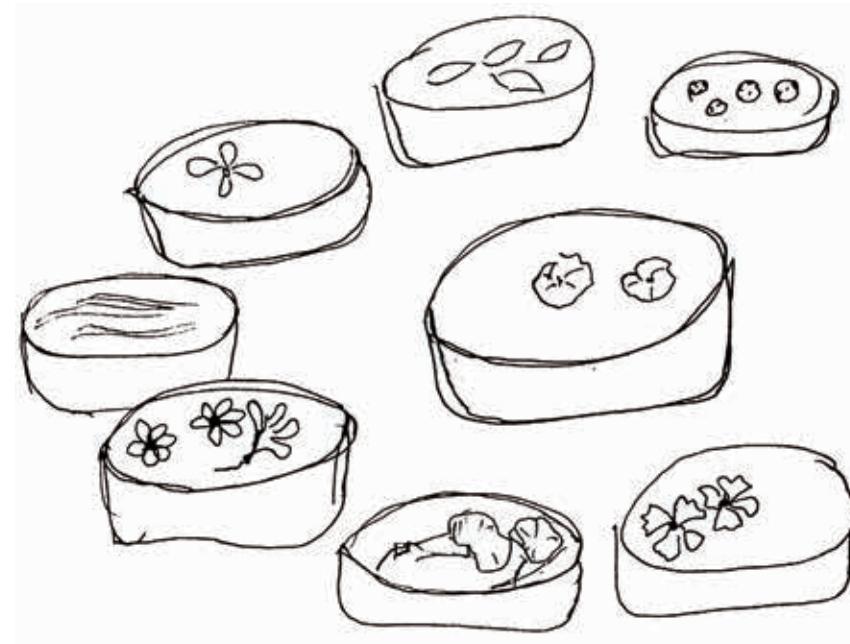


3.15 香りを楽しむ

与那国島では魚汁やタニシの汁に、山みかんの枝を浮かべて食べる習慣があります。香りでおつゆがおいしいのです。それは《ふがぬとう》が教えてくれた知恵です。彼らから習った知恵は今も島に多く伝わっています。

ゲットウの葉で魚を包んで蒸すとこれまで食べたことのないすばらしい味がしました。それからは、島の人たちもいろいろな蒸し料理をするようになりました。

水を入れた容器に いろんな花を浮かべて、その色やかたちや香りを楽しむ、そんな暮らし方を教えたら《ふがぬとう》も、とても楽しんでやっていました。





3.16 大げんかと片思い

《ふがぬとう》のみなさんは、おだやかで気立てのよい人たちでしたが、一度だけ、島の若者と取っ組み合いの大げんかになったことがありました。

若者たちが《ふがぬとう》の家を訪ねてみたら、鍋の底に、なんだかとっても臭いものが入っていたので、これは食べてはいけないものだと思って捨てました。

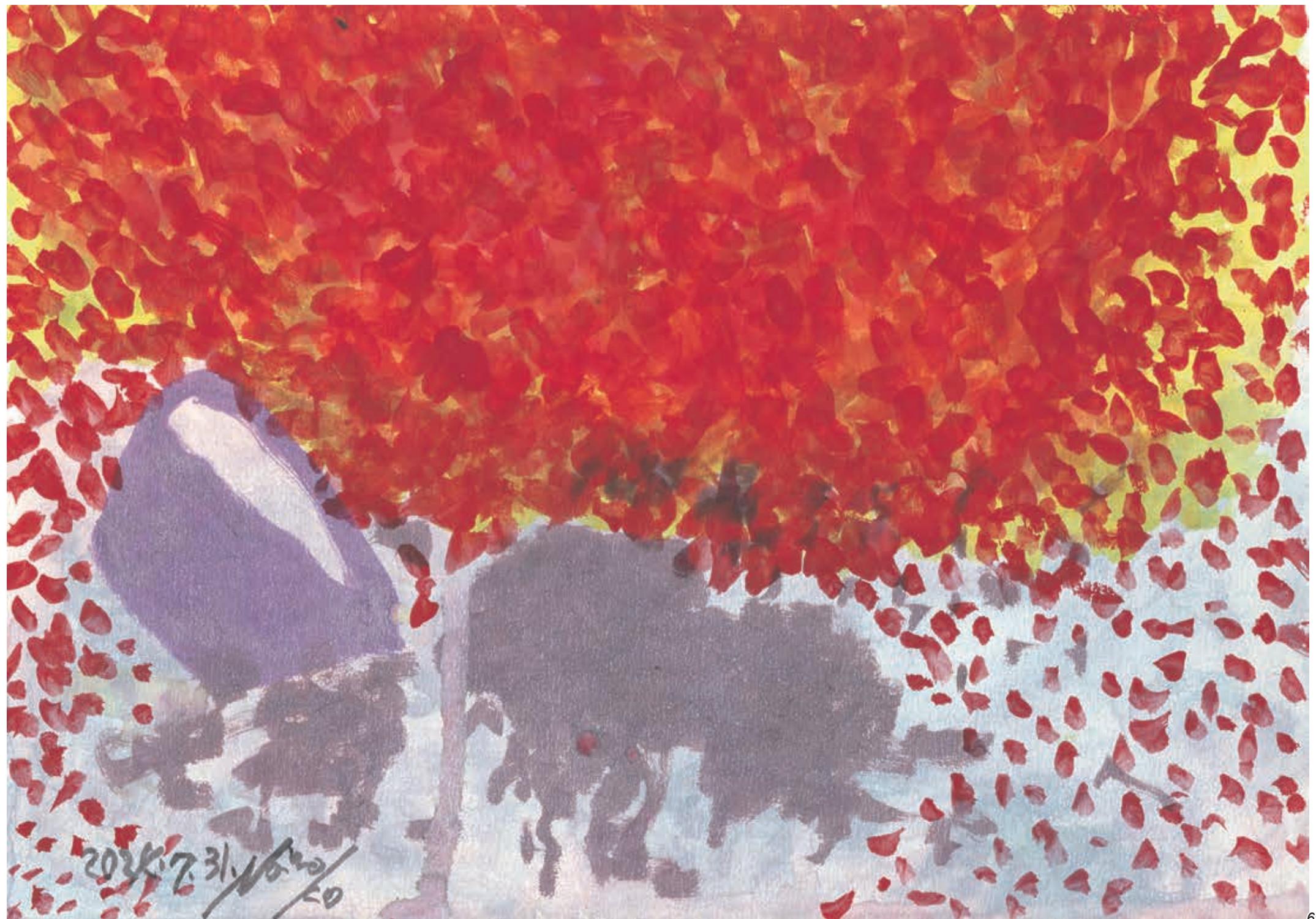
それを知った《ふがぬとう》はものすごく怒って、島の若者につかみかかってきて、上を下への、くんづほぐれつの大げんかになってしまいました。そばにいたみんなで二人を引き離しましたが、なぜそんなに怒ったのでしょうか？島の人たちにはさっぱりわかりませんでした。*

*わたしも、安渓さんに言われるまで全く気づきませんでしたが、これは、3.14で説明した「臭いもの」で《ふがぬとう》にとっては、魚にいろんな材料を取り合させてつぶしてまぜて長い時間をかけて作っただいじなだいじなおいしい味のするものだったと考えれば、ひどく怒ったのも納得がいきます。今でいう塩辛[チョッカル]のようなものでしょうか。

《ふがぬとう》に恋する女たちはたくさんいましたが、みんな片思いに終わりました**。恋しくてご飯も食べられないような時は《むらぬうや》が決めた《ぶないがみ》***（姉妹神）の役割をする《あとうあぶた》（お嫁さん）役が、女たちの涙の面倒を見ました。恋い焦がれた女が《ふがぬとう》に何かをあげたいと思って持ってきて、絶対に《ふがぬとう》には渡さないというきびしい決まりを《むらぬうや》は作っていました。それは《ぶないがみ》が引き受けて、代わりに渡すけれど、もともとは誰がもってきたものかを絶対言わないというやり方でした。

** このような恋をめぐるお話は、わたしが数えで13歳の祝いを済ませたあと、初めて語られたものです。

*** わたしが経験した範囲では《ぶないがみ》が決まったときには《ぎ‘てい》という儀式をします。《びぎ》（兄弟）を守る《ぶないがみ》（姉妹神）になるという儀式です。そのやりかたは、わたしが体験したものでは《びぎ》と《ぶない》と向き合ってお辞儀したら《ぶない》が《びぎ》に「どんなことがあっても、心配しないで」というと《びぎ》は《ぶない》に「どんな時も守ってちょうだい」といいます。《ぶない》は自分の頭のつむじをきれいに分けていて、そこからお父さんかお母さんが髪を少し切り取ります。これが《ぶない》の分身となって、大切に身に着けた《びぎ》を守ります。



2028.7.31.16:20
/20

3.17 牛も鳥も食べさせてもらえない

《ふがぬとう》が庭に○を書いて、その中に描いた絵の中に、牛と鳥の絵の横に×印を7つほど添えた場面がありました。牛が死んだときに、それを見せないように島の人たちが死骸を取り囮んで体で隠していたとき《ふがぬとう》は、なんとか隙間からのぞいて見ようとして、食べたそうなそぶりでしたが、これは食べ物ではない*と食べさせなかった、そのことを不満に思って描いたのでしょうか。

《ふがぬとう》の家に島の娘二人が、こねただんごを届けに行ったときのことです。家の近くの木に、鳥がしばりつけられていきました。島の言葉では、鳥はみんな《はとう》と呼んでいましたが、二人はおどろいて《ふがぬとう》に「どうして《はとう》を木にしばったの？」とたずねました。

《ふがぬとう》は、食べるつもりだと答えました。

さらにおどろいた二人は相談しました。一人は、残っていて《はとう》が、食事になるのを防ぐことにしました。もう一人は、他の人を呼びに走ります。男の人が、四人でやってきて《ふがぬとう》に食べてはいけないと話しました。でも《ふがぬとう》はなかなか聞き入れようとはしません。

それで男一人は、走ってお年寄りをむかえてきました。お年寄りは《ふがぬとう》をうんと「めんめこ」しました。

叱りつけることです。

木から《はとう》を逃がすように、と言われた《ふがぬとう》。「めんめこ」されているし、食べたいのに食べれず……。《ふがぬとう》は、プリプリしてしまいました。

お年寄りは、なんとか心をしずめようとしたが、なかなかプリプリはおさまりません。

みんなでまたまた相談して、大急ぎでごちそうを持ち寄り、ありったけのうまいものを並べて《ふがぬとう》三人に、こう言いました。

「おいしいものはこうしてたくさんあるから、いつものように食べて、歌って楽しく遊ぼうよ」と。

島の青年たちが、先んじて食べたり飲んだり歌ったりしました。そのうち《ふがぬとう》三人も心ほぐれて、食べて飲んで歌って踊って遊んだってさ。その夜は、月夜だったので遅くまで遊んだそうです。

* 与那国島では、田んぼで働く牛と、死者の魂を背中にのせて運んでくれるすべての鳥たちは神聖なものとみなしていて《ふがぬとう》が来た頃は絶対に食べませんでした。鶏は、鳥の中でも人間に警戒警報を発してくれたりする大切なですから、ますます食べなかったのです。伝承では、その頃豚が飼われていて、豚を知らなかった《ふがぬとう》がその甲高い声に驚いたので、これは豚だよと説明したそうです。



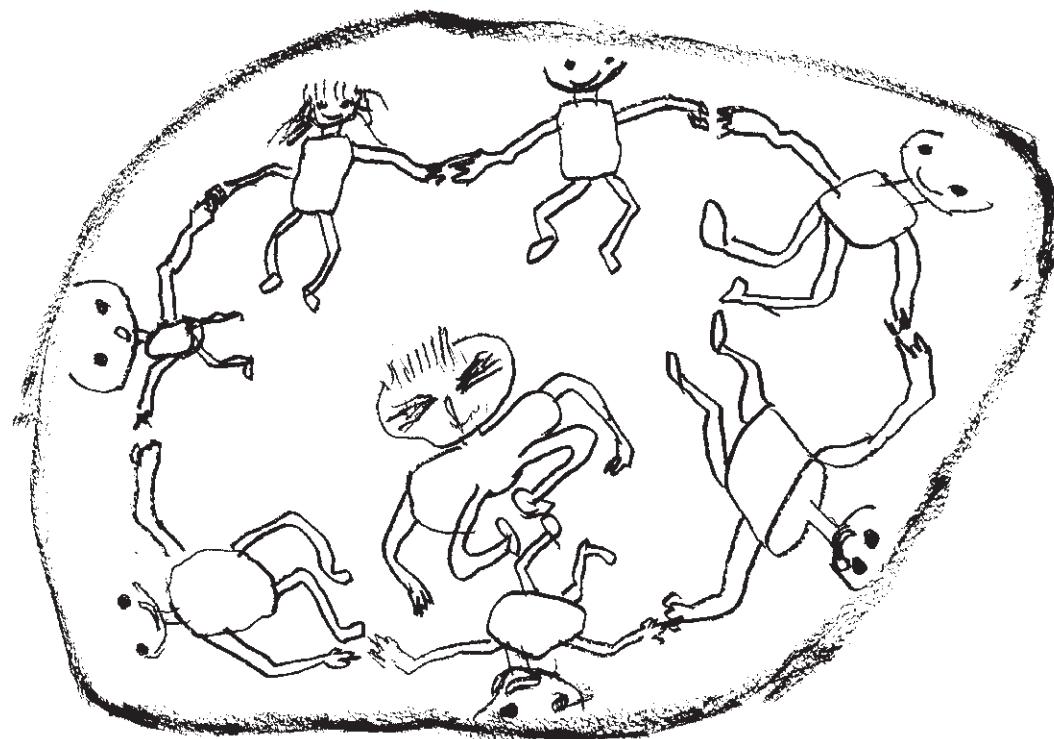
3.18 鼠を追いかける

牛の肉も、自分たちで捕まえた鳥の肉も結局食べられなかった《ふがぬとう》たちでしたが、食べ物として生きている鼠をあげたら、すぐに食べないで、遊ばせているうちに、逃がしてしまったことがあります。さあたいへん、と追いかけましたがなかなか捕まりません。

島の人たちは、鼠を炊いた肉のかけらが入ったおつゆ《ちちる‘てい》を届けてあげました。

そのときの鼠を追いかけるこっけいな様子が、遊びとして残りました。何人も集まって、手をつないで輪になります。輪の中に何人か子どもが入って、中の人は輪の中から隙を見て外に逃げだそうとします。輪を作っている人は、わざと手を上げて隙間を作ってみせるけれど、そこから逃げようとするとなつないだ手を下げて逃がさないようにします。その間に歌をうたいますが、歌が終わるとゲームは終了。逃げられなかった中の人は何かの罰を受ける、という遊びでした。

わたしには、これが今日の与那国島の手をつないで上下させながら輪になって踊る《どうんた》のはじまりのように思えてなりません。





アーチ=カリカリ

ねお

4. I 芭蕉布を教える

その頃、島の織物の糸は《ぶー》(苧、カラムシ)からとっていました。《ふがぬとう》は、今日の祖納から比川へ行く道の西側の《あがんに》に《だまばす》(山芭蕉)がたくさん生えているのを見つけて、これから糸が取れて、いい布ができると教えてくれました。《ぶー》よりずっと取りやすい糸で着心地もよく、これも島の人々は大よろこびでした。

機織りの道具は、家族にしか見せないきまりでしたが《ふがぬとう》にはそれぞれお世話する家族もできて、家族同然ということで、見せてもいいだろと《むらぬうや》の許しが出ました。見せてあげたらすっかり合点して、浜に植物を埋めて繊維を取る仕事も、ずいぶん積極的に手伝ってくれました。





ねえ でんぢや

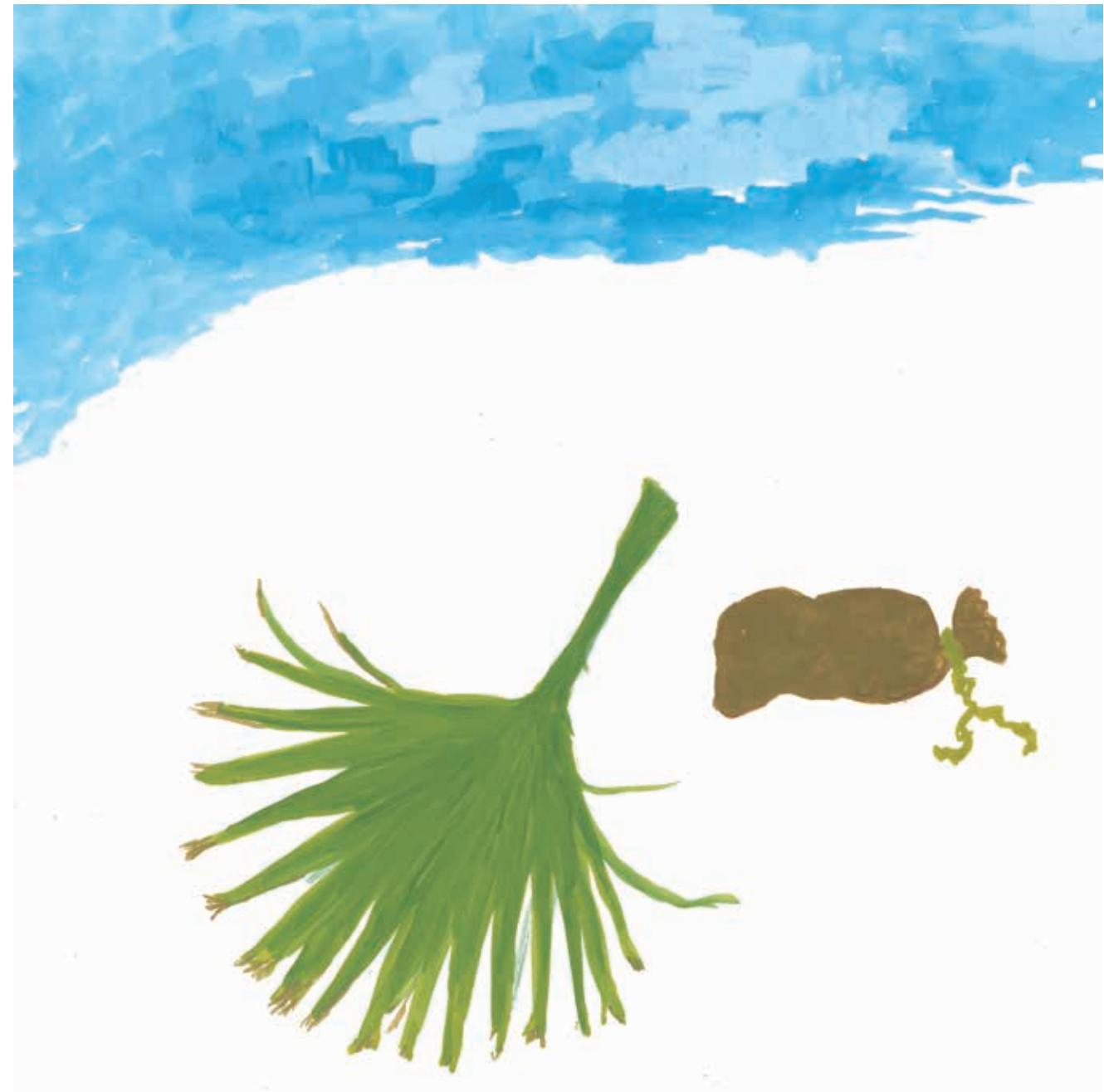
ねえ

4.2 お手伝いはありませんか

《ふがぬとう》は、理解が速く、仕事の要領もよかったです。島の人たちはたいへん助けられました。「何か手伝うことはありませんか」と言って家いえを回ってたずねて、手を貸してくれました。例えば重い荷物を運ぼうとしている人を見たら、進んで力を貸してくれました。力も強かったです。

また《くば》(ビロウ)の葉を二枚使って、荷物をくるんでくくりつけて引っ張れば、重いものでも楽に運べることをやってみました。

島の人たちは《がつ‘ていんき、ぐるぐあいてい》つまり「合点して要領もあって」と《ふがぬとう》に感心していたことがくり返し語られていました。



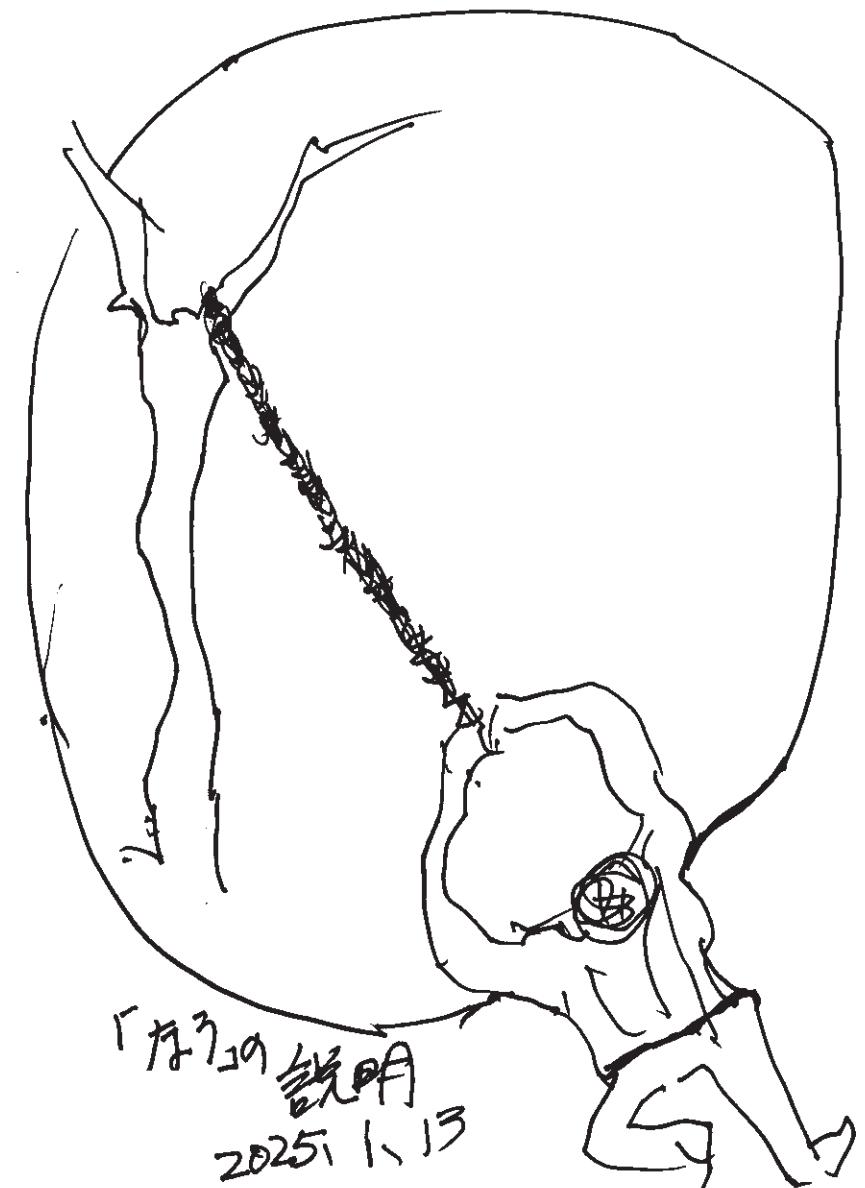
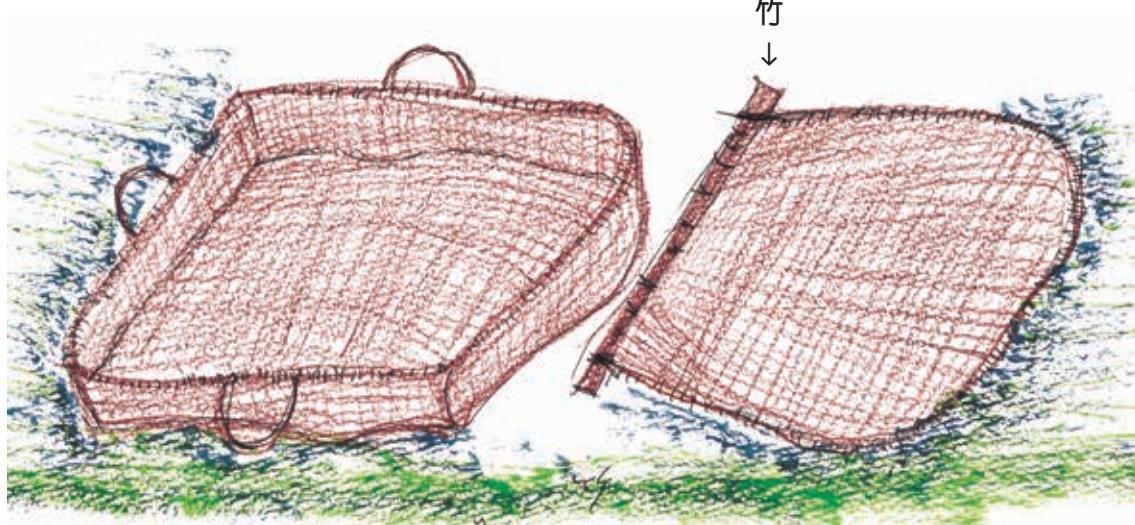


4.3 繩をなう・新しいかご作り

それまで、藁をひねって縄にすることはしていましたが、縄をなうというやり方や、木の枝を利用して、三人でなう方法などを《ふがぬとう》は教えてくれました。

一本の縄を家の中から外にかけて張って、洗った着物を、天気や昼夜に分けて家の中と外に干す工夫なども島の人たちを感心させた《ふがぬとう》の知恵でした。

それまでは、島の人は、竹を割いてかごを作っていましたが《ふがぬとう》は、縄としてしか使っていなかった《いとう》(トウヅルモドキ)の丈夫なツルを割いて、それまで島にはなかった、平たいかごや、口の方が小さくなったりさまざまな容器を作って見せてくれたのでした。



これは一人で縄をなうようすですが、三人でなう方法も《ふがぬとう》は教えてくれました。



4.4 ほうきと竹の刃物と竹串と

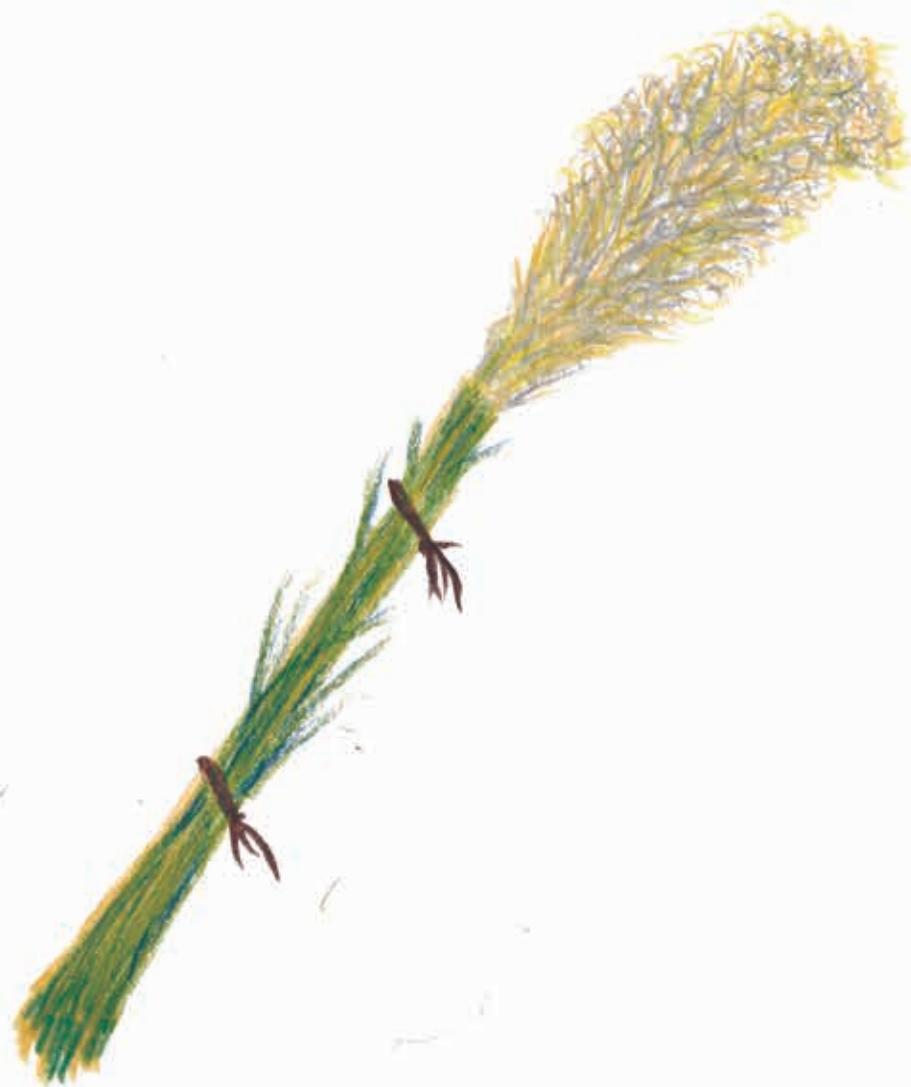
島の人が《ふがぬとう》に作ってあげたのは、大きな竹ぼうきでした。《ふがぬとう》はソテツの葉を重ねたり、ススキの穂を束ねたりした、これまでになかった手ぼうきもつくりました。

竹を削って刃物の代わりに使うこともよくやっていました。《ふがぬとう》は、竹を研いで作った小刀をたくさん作って、まわりのみんなに配ってあげました。これで、みんなは随分助かったということです。

また、大小さまざまな竹の《ぐし》(串)を道具として使うことも《ふがぬとう》が残した道具です。わたしは今も日常的に使っていますが、サツマイモや山芋を掘るとか、小さなものなら、髪を梳くとか、使い道は多いです。

右の葉っぱが2枚ずつの絵は、固くてつるつるしたフクギの葉ですが、これを使って砂や土などをこすつてつるつるにするというやり方も、教えてくれました。





4.5 子どもたちと楽しく遊ぶ

《ふがぬとう》は、子どもが大好きなんですよ。《ぶーらん》と呼んでいるプランコも《ふがぬとう》が作ってくれたものです。

三人それぞれに 子どもたちは集まって《ふがぬとう》に教わった遊びを楽しみました。

《ふがぬとう》は、子どもたちとお話しするときはかならず座って、子どもたちの目の高さでお話ししていました。

一度、お母さんが出かけるので赤ん坊をあずかったとき《ふがぬとう》が困りはてて助けを求めたことがあります。赤ん坊の《く‘た》(おしめ)の替え方がわからなかったのでした。

これを知って、島の人たちは「この人たちは、まだ一度も結婚したり、子どもをもったりした経験がないのかもね」と言い合いました。

*与那国島では、赤ん坊は六歳までは、神様たちの手の中にあるとされています。幼児が泣く時には、必ず相手するというより、母親が必要か？ 母親でなくても誰かが必要か？ なぜ泣くのかをよく理解してあげることが大事で、できる限り母親を中心にして皆で育てる事を心がけてきました。

子どもをじゃまもの扱いしたり、乱暴な言葉や力を加えることは、与那国島では決してしてはいけないこととされてきました。



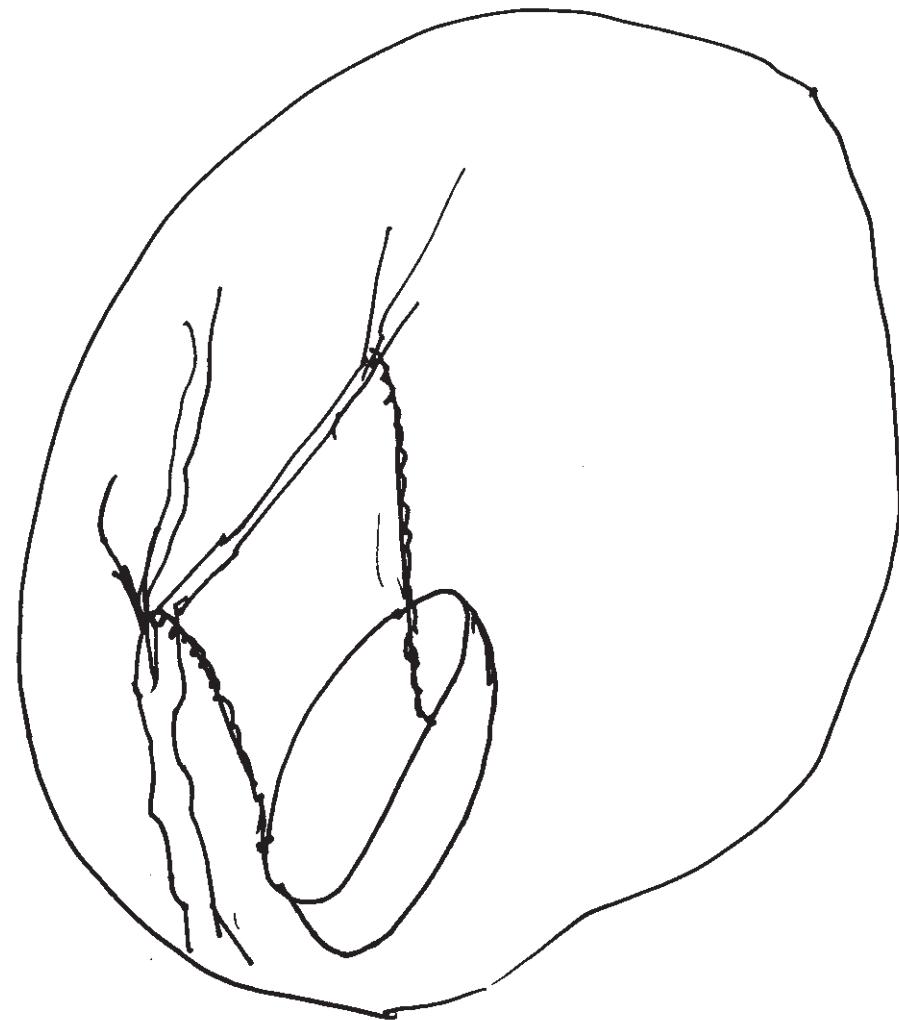


4.6 ゆりかご

ブランコと同じ考え方ですが、赤ん坊を寝かせる時に、かごのようにならんだものの上に寝かせて、木の枝にひもでかけて、これをゆらゆらさせる方法を《ふがぬとう》が教えてくれました。

与那国島で《あみらぐ》*と言っているゆりかごの始まりです。どうしても泣き止まない子どもは、こんなふうに木の枝にかけて、木や庭の力に任せると、ふしぎに落ち着くものでした。

*わたしの父は、遠い大阪で孫が生まれた時《あみらぐ》を作って、送ってやりました。与那国島の人にとって《あみらぐ》は、それほど大事なものになっていたのです。



アミラグを教えた



4.7 台湾からつれてきた女の子

《ふがぬとう》たちは、毎日あったことを地面に描いていたのですが、ものをくれた人がいたら、その人の姿ともらった物を描いて、忘れないようにしていました。

ある時、ひとりの女の子が、自分の名前も言わないで花をくれました。静かであまり遊ばない子です。《ふがぬとう》たちは、子どもたちの名前を全部知っていましたが、この女の子の名前がわかりません。それで《ふがぬとう》はその子の姿を地面に描いて、その子の名前をたずねました。

じつは、その子は台湾の子で、まだ島の言葉が話せなかつたのです。与那国島の舟が嵐を避けて台湾へ避難している時に、ひとりの女の子が海のおじさんにずっとついてきました。家族がいない子だとわかったので、与那国島まで連れてきたのでした。みんなでお世話をしていましたが、やがて与那国島の子にすることになりました。竹を中指の一節の長さに切つて、藁か紐をくくりつけ、海の砂を庭に積み上げている中に隠して、めいめい一本ずつ取るというくじを作って、くじ引きして決めました。けつきよく、今の祖納村の西の《かにくむら》の《あらんび》というところに住んでいた老夫婦がひきとて育っていました。

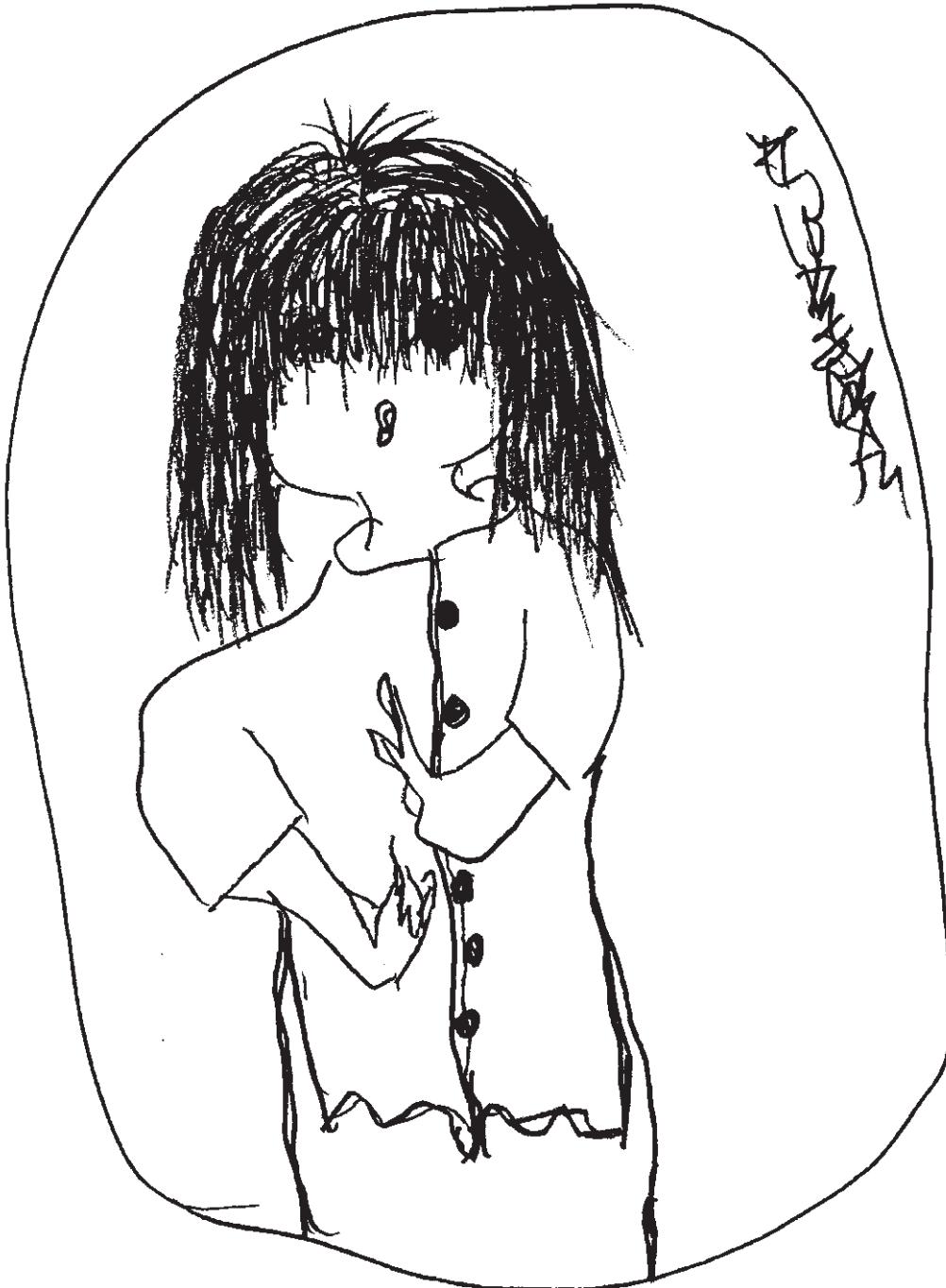
成長してからは、自分たちがいなくなった時のことを考えて、娘を与那国島の人と結婚させました。

その子が着ていた服が、島のものと違っていたことが《ふがぬとう》が地面に描いたという絵の話でわかったので、それを描いたものです。

ある晩のこと、猫たちが妙に騒ぐので(1.7 参照)、念のため《ふがぬとう》の家の周りを調べてみました。すると、物陰にひそんでいる男たちを見つけたのです。捕まえてしばりあげてみたら、それは台湾から来た男たちでした。いったい何をしていましたか、と問い合わせたところ「この男たちを殺して、その持ちものを奪おうと思っていた。島の人間じゃないみたいだから、あとくされがないだろうと思って」というのでした。

島の人たちはひどく怒って「着物でも鎌でもなんでもくれてやるから、お前たちはもう二度と島にくるな！」と言って、追い返したのでした。*

* このように《ふがぬとう》たちがいた時に、与那国島では台湾の人たちとの交流があったのですが《うんながぬどうち》つまり「海の上の友だち」と呼んでいた、台湾の人たちは、たいていは海上で出会って物のやりとりをすることが多くて、お互いに上陸することはそれほどひんぱんではなかったと言われています。



台湾から連れてきた。日本では珍しい
お土産です。台湾のアリの巣。市場
で「アリ巣」と書かれていました。巣の中
にアリがいました。巣を手で取って
おまけで貰いました。手で取った
アリ巣を手で触ると
アリが巣から出て来ます。何でも、よく食べます。
アリ巣は500円です。

長
じょう
くじら
はし
まざ

上と下

下はワヒー^{ヒー}
よろこび

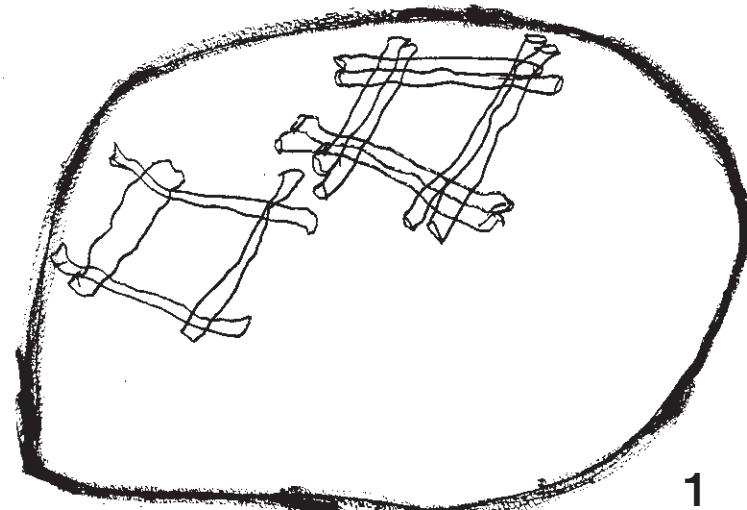
4.8 競争遊びのいろいろ

歌がうまく踊りもうまい三人は、子どもたちとよく遊びました。庭に絵を描いて、たくさんの遊びを教えました。カサガイの殻を積んで高さ比べ、雨の後たくさん出てくるヤスデという虫を走らせて競争させる、カタツムリを競争させる遊び。子どもたちはおもしろがって毎日大はしゃぎ。競争する遊びが島にはそれまでなかったのです。

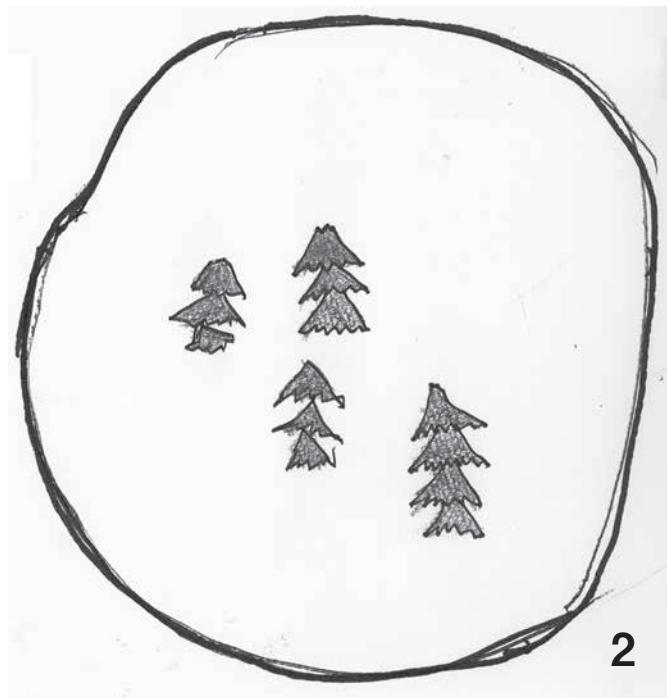
あんまり面白いので、大人にも競争遊びが広まりました。とうとう朝まで遊ぶ若者たちが、暗がりでころぶ事故もおこりました。《むらぬうや》は、生活があやうくなるから深夜は《ふがぬとう》の教えた競争遊びを禁止しました。

以下は、右の図の簡単な説明です。

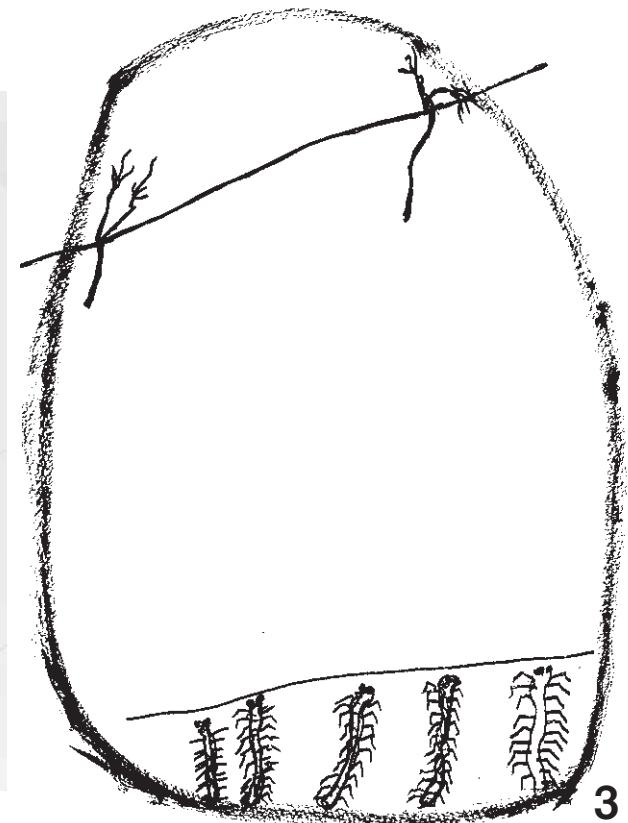
- 1 薪を積みながら中から外へ飛び越える。
- 2 笠貝をできるだけ高くつむ。
- 3 ヤスデをつかまえて競走させる。
- 4 地面に描いた絵に実物の葉を載せる。
- 5 誰もいない遊び（鬼ごっこ）。
- 6 四隅から真ん中の親へ一步ずつ進む。
- 7 ひもを引く「くじ引き」遊び。
- 8 石けり遊び。
- 9 親指と人差し指を回して陣取り遊び。



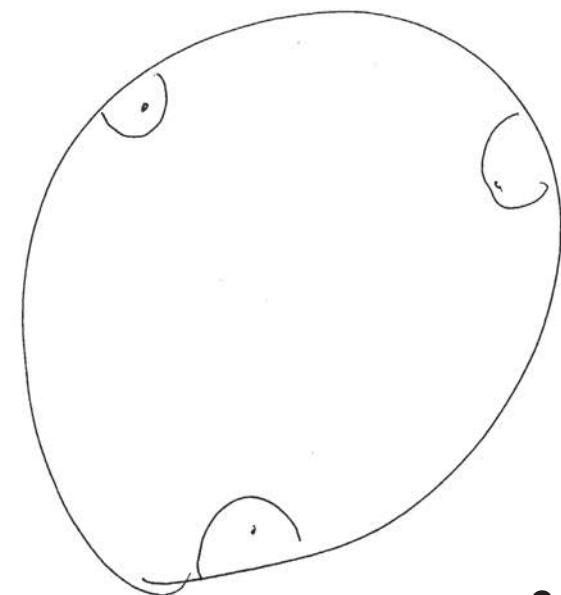
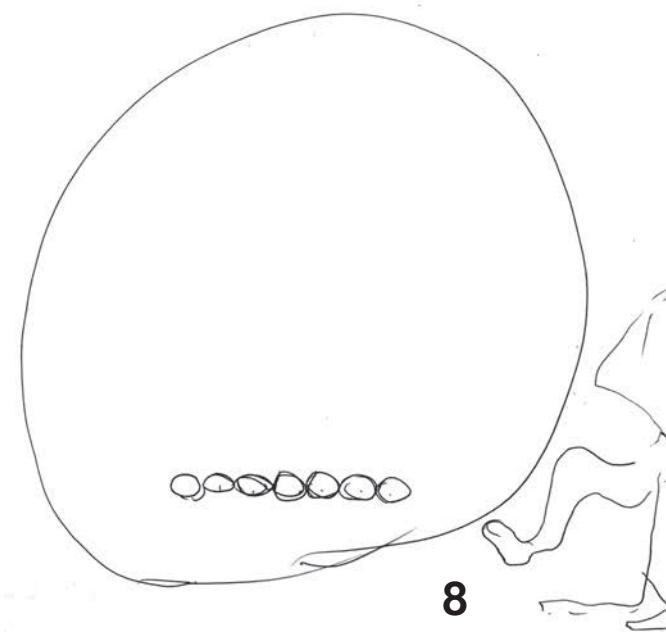
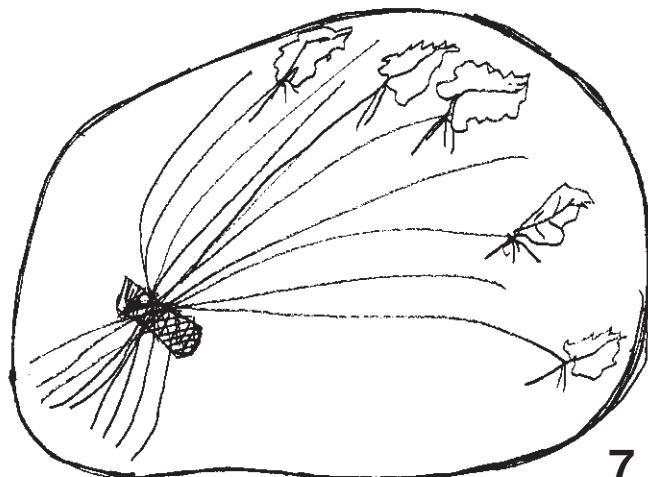
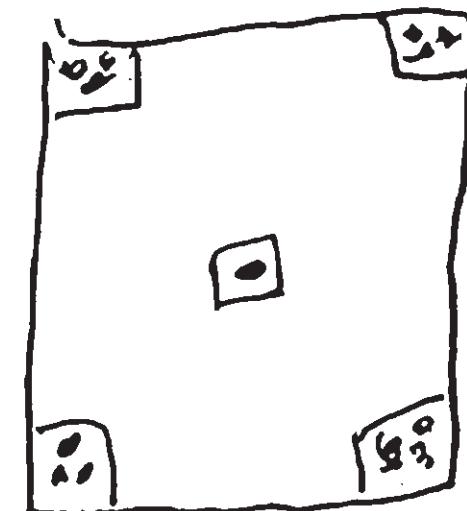
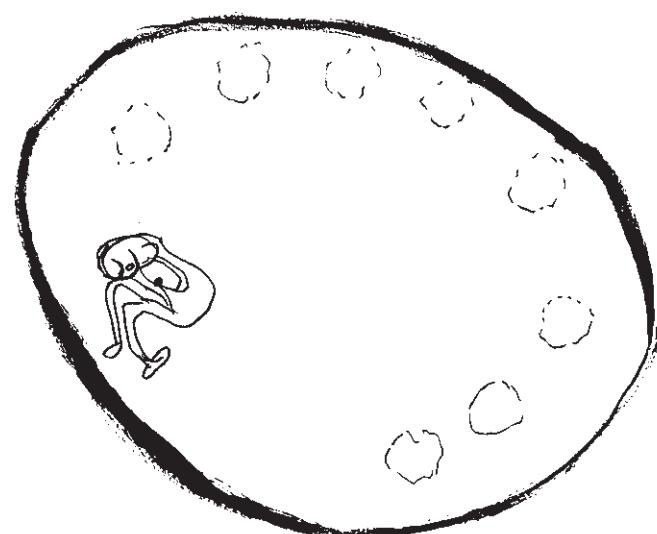
1



2



3

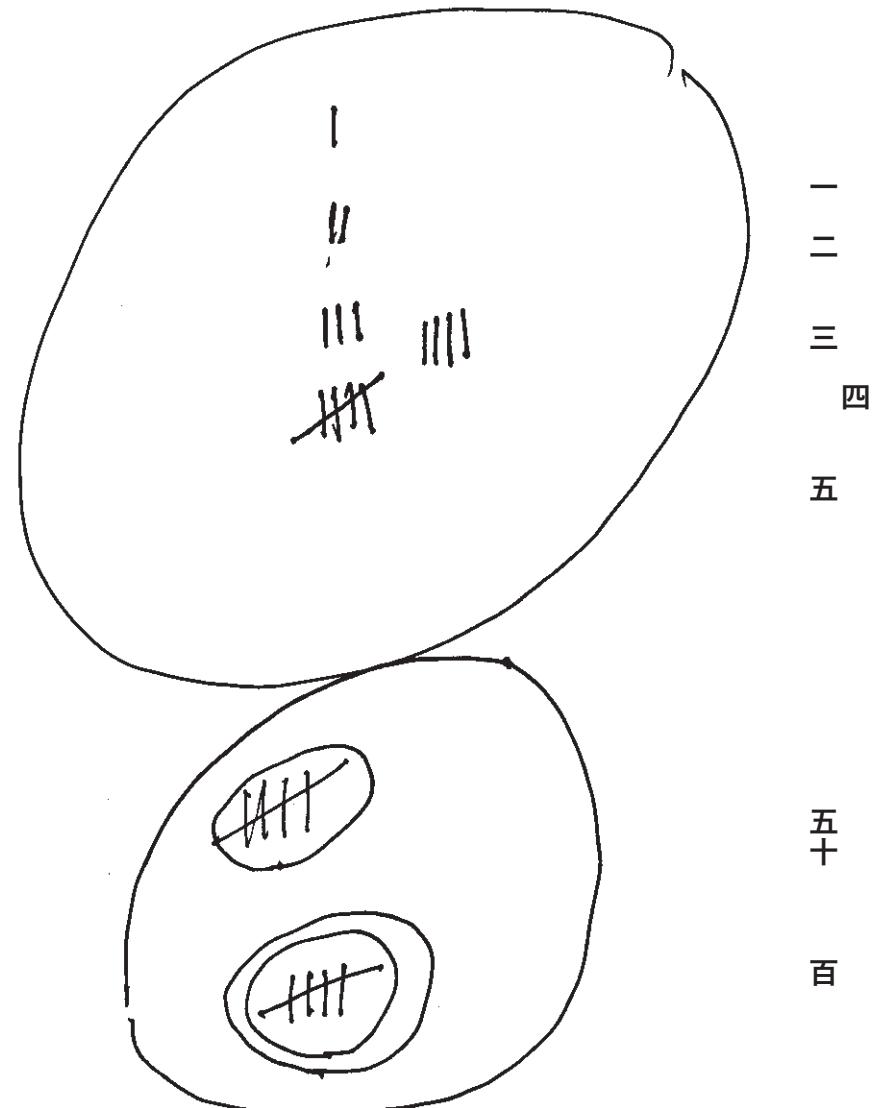


4.9 数を数える遊び

《ふがぬとう》は、足ぶみして数をかぞえることを、遊びとして子どもたちに教えました。ホップで片足で跳んで、ステップで前へ一步、ジャンプで両足でふむ。一束を頭の高さにあげ、五束ずつの束にして……。

数を数えること自体は大人は知っていましたが、なかなか簡単なものではありませんでした。

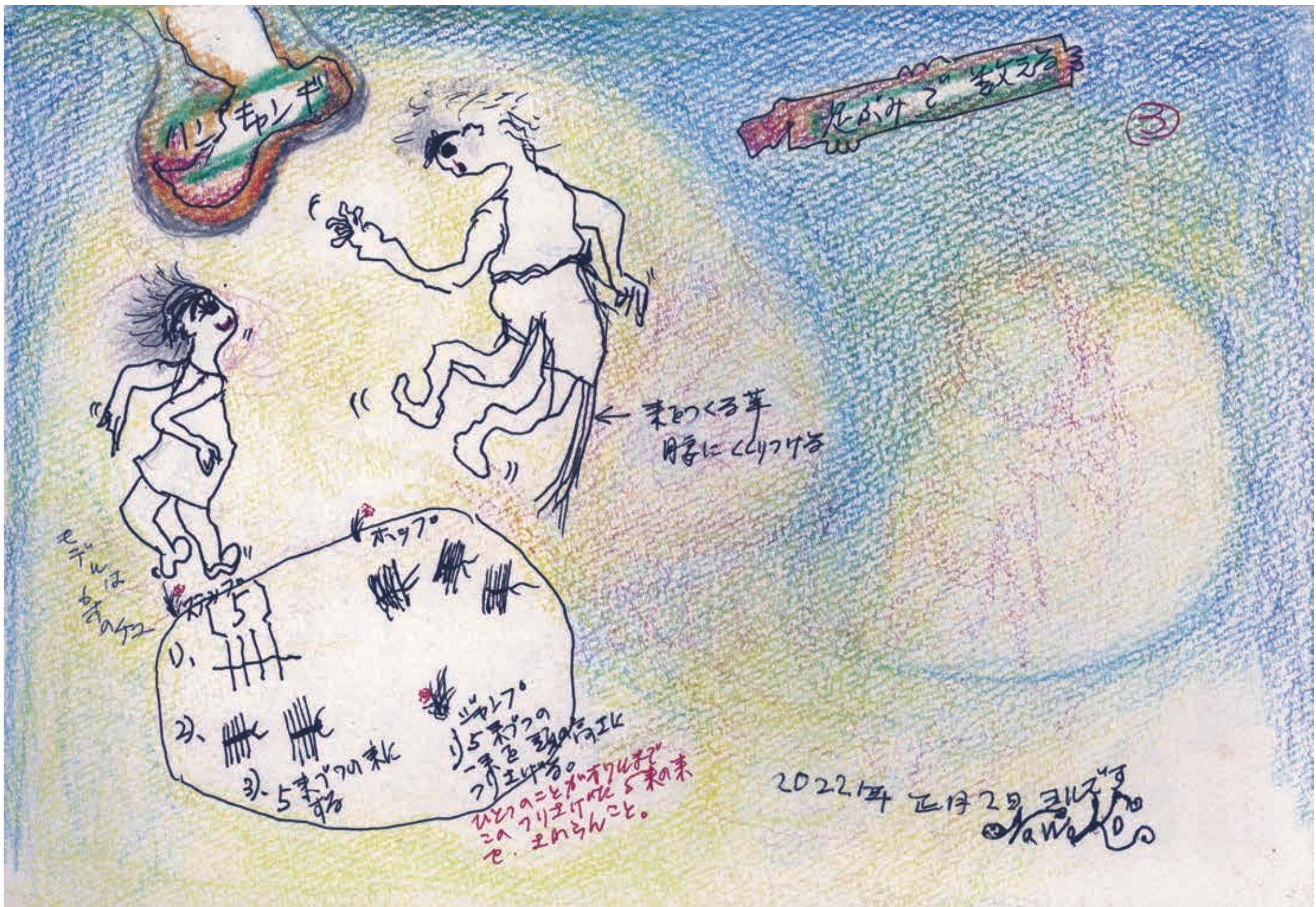
《ふがぬとう》は、指を立てて、1, 2と数字を数えるやり方を子どもたちに教えました。大人たちも次第に覚えて、それ以来、島では、一日二日など、数をかぞえて行動することが以前よりたやすくできるようになっていきました。《ふがぬとう》が、島の人たちにこれを覚えさせるのに、ずいぶん時間がかかりました。立てる指は、人差し指だという人が多かったのですが、人によっては親指だ、いや小指だということもありました。



一
二
三
四
五

五十

百

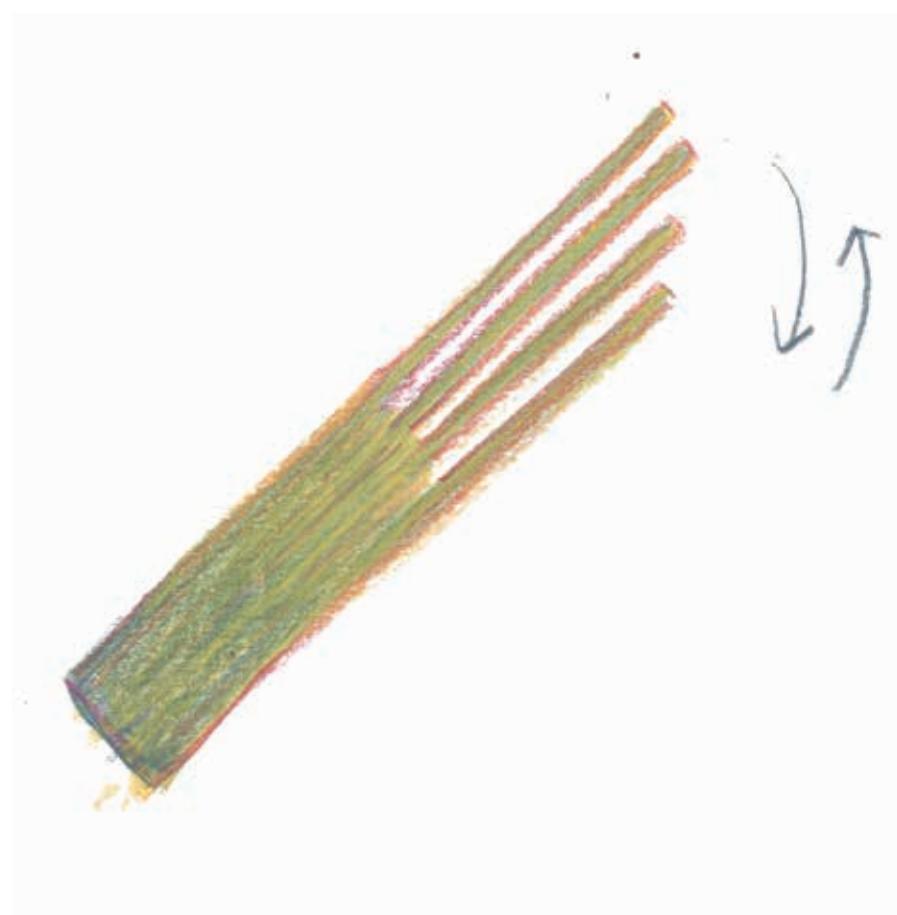


4.10 ゆかいな仲間

《ふがぬとう》は、竹を切って、笛だけでなく、切れ目を入れて、叩いて拍子をとる楽器を作りました。この楽器を使うと、バンバンとかパンパンとかいろんな音が鳴らせます。これがきっかけで、人びとは竹で音を楽しむいろいろな楽器を作りはじめました。

月が明るい夜にはみんなで集まり、一晩中遊びました。おいしいものを食べたり飲んだりおしゃべりしたり、三人は歌がうまく踊りがじょうずなうえに、ゆかいでしたから、みんなは大はしゃぎです。

あーはっはあ、あーはっはあ。





5. I 稲刈りおりこうさん

田んぼの稲が実ってきました。稲の神様がよく眠って、お米が育つように、稲刈りの前には、物音を立てないように、静かに静かにしてすごします。

ところが《ふがぬとう》が、竹を切った長さ五寸(15センチ)ほどの笛をピーっとならしたのです。あわてて行ってみたら、子どもたちに配るつもりでしょうか、たくさん束にするほど持っていました。「その一本がカラーンと落ちる音でも悪いんだよ」といって、島の人たちは《ふがぬとう》の作った笛をみんな没収しました。はじめは不満そうだった《ふがぬとう》も、説明を聞いて、納得してからは、静かにすることをきちんと守ってくれました。

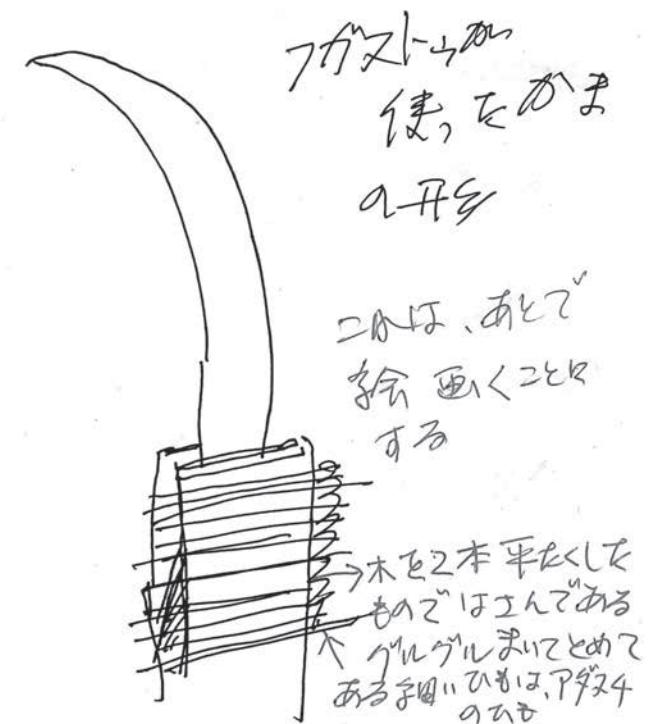
その年は稲が大豊作でした。刈り取りが遅れると《くぶりちん》(割れ米)が多くなってしまうので、人々は三人に稲刈りの手伝いをたのみました。「はい！」と言って、すぐに田んぼに行こうとするので「まだまだ、その時季まで待って」と、伝えました。

「やったことはない」という三人でしたが、ひとりで二人分も三人分も上手に刈りとり、みんなは大助かり。その時から《ふがぬとう》には《まいかいないふなあ》(稻刈りおりこうさん)というあだ名がつけられました。

《ふがぬとう》たちが稲刈りを手伝った田んぼは《たぶるだ》、南西部の《まんたぶる》や東南の《くんま》のあたりだったと伝えられています。遠いところなので、田んぼの側に《どういちだ》(小屋)を建てて、みんなでそこに寝泊まりして稲刈りをしました。

男の小屋と女の小屋を別に建て、田んぼの持ち主の小屋も建てたのですが《むらぬうや》は、《ふがぬとう》は必ず持ち主の家に寝せるように指示しました。

下の図は《ふがぬとう》が使ったという鎌の形ですが、わたしには大きくて重くてとても使えないものでした。





5.2 稲とご飯と餅の新旧を当てる

稻刈りが終わったら、めいめいが、稻を一束もらって、まずは《にらがなち》(地底の神さま)へのささげものとして、田に横たえて置いて祈ります。

そのあとは、持ち帰って、家の《ながひら》(中柱)にくくりつけておきます。

《ふがぬとう》は《むらぬうや》からもらった稻の束の穂をひと粒ずつ、地面に置いて数えていました。はじめは數本を出して地面に置き、次の回にはたくさん稻を出しました。

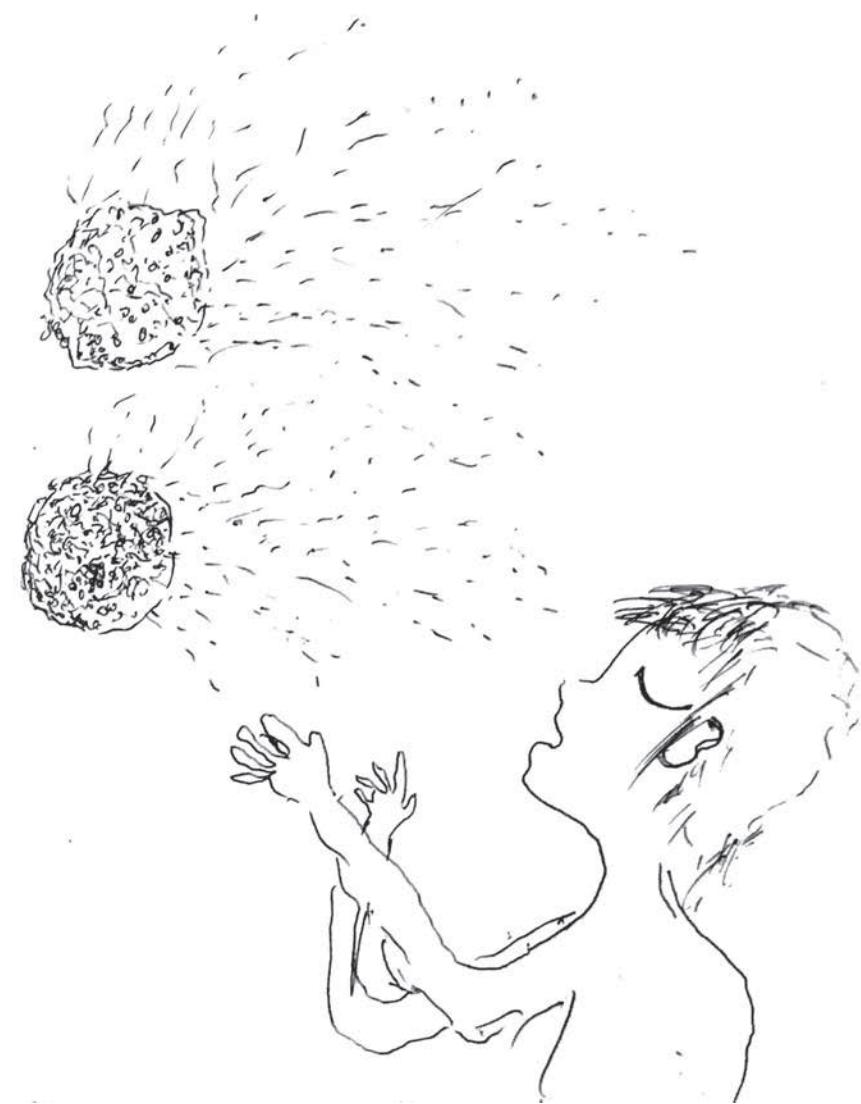
その時言っていたことをまわりの人たちが想像するに、ここに来た日を数えるようでした。あとこれだけ寝たら、風が吹いて、それに乗ってふるさとに帰れるかね、などと言っているようでした。

稻刈りの時季に、島の人たちが《ふがぬとう》たちに伝えたかったことに、古い稻と新しい稻の違いがありました。

田んぼから抜いてきた、去年の稻の刈り株から出た稻の《またばい》(再出葉、右ページの色彩画の左側)と、今年新しく発芽した稻(右側)の違いを《ふがぬとう》はちゃんと見分けることができました。

また、稻刈りのあとで《ふがぬとう》は、去年の古いお

米のご飯と新米のご飯の香りの違いや、それをつぶして作った餅の香りの違いを嗅ぎ分けることができて、島の人たちはとても感動したと伝えられています。





5.3 朝日を挾む・魚に祈る・葬式のこと

《ふがぬとう》は、朝はのぼる太陽に両手をあわせて祈り、月の光にも両手をあわせて祈りました。与那国島のわたしたちと同じ祈る心をもった人たちでした。

夕日に祈る習慣がなかった《ふがぬとう》でしたが、島の人たちが、夕日を見送るお祈りを欠かさないことを知つてからは、いっしょに祈るようになりました。

食べ物は、食べる前に、きちんと挾むんだよという《むらぬうや》の教えをよく守って、なんにでもお祈りしていました。

ある時、手間取っている間に、とってきた魚にハエがいっぱいいたかるようになりました。調べてみたら《ふがぬとう》は、一匹一匹の魚にお祈りをしていたので、とても時間がかかってしまったのでした。

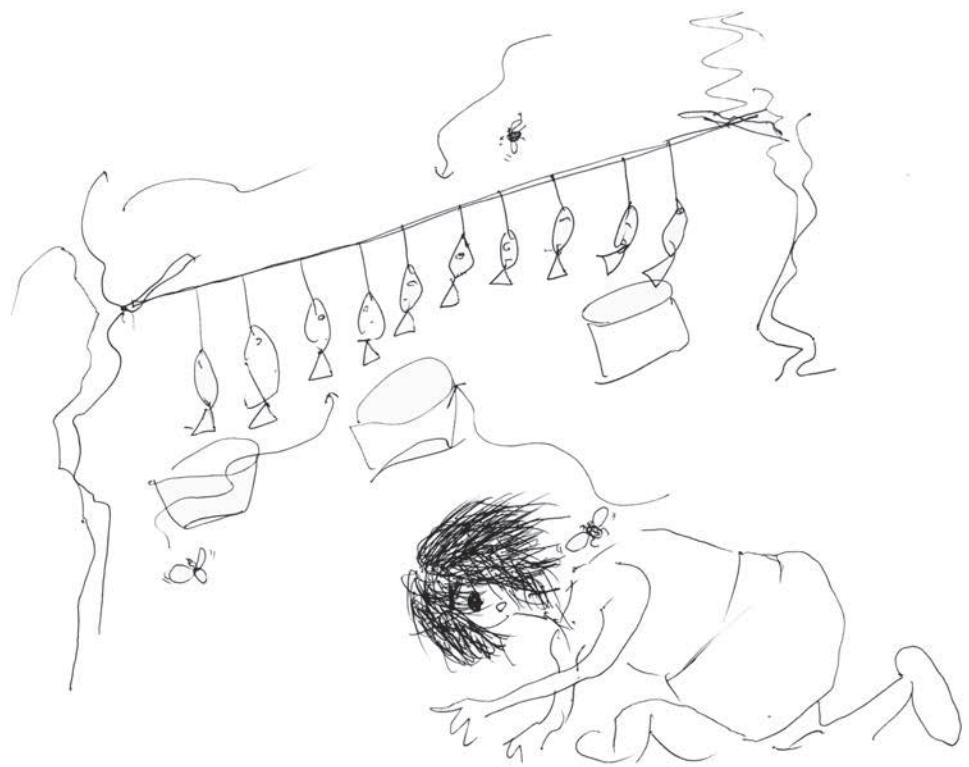
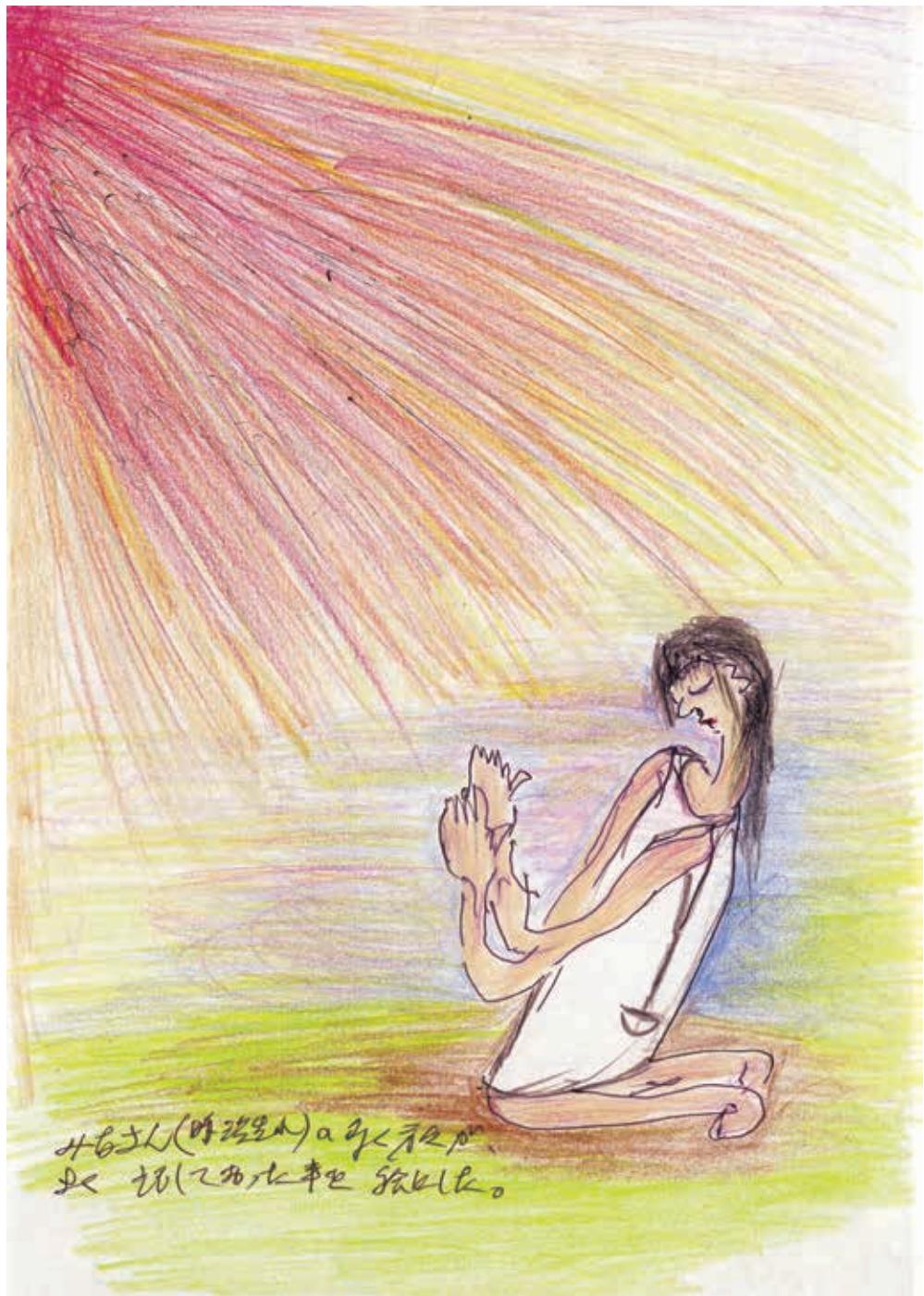
島にいた相当長い間に《ふがぬとう》は、葬式にも結婚式にも出会いました。

葬式のときは、三日間、島の人は《ふがぬとう》のところにごちそうを持って行って食べさせて、いろいろおしゃべりして相手をする人たちもつけて《ふがぬとう》があちこちに出歩かないようにしました。ただ、ごちそうを届けてこれを食べておきなさい、ではなくて、若者達が交替で

相手をしました。その間に《ふがぬとう》たちにわからないように茶毬だまをすませました。これは《ふがぬとう》が海や山へ行かないようにしたのです。亡くなった人は、生きている人をあの世に引っ張つていこうとするので、気をつけるようにしました。けつきよく《ふがぬとう》が無事に故郷に帰れるように、ということを第一に考えていた島の人たちの配慮の一環だったのでしょう。

《ふがぬとう》がいた頃は、人が亡くなったら、墓ではなく《だや》に寝かせました。《だや》というのは、片方が開放されている岩の裂け目です。奥の方に寝かせるけれど、出入り口は開放的になっています。《だや》はあちこちにあって、ほとんどは海に面しています。棺桶かんおけというものはありませんでした。着物を着せて、台にのせて《だや》までかついでいきます。台は、亡くなった人の身長にあわせて竹で編んで作るのが一般的でした。

担いでいった台のまま寝かせるのは珍しく、普通は《だや》には、あらかじめ木や竹で作った台にやわらかいものを乗せて、体をそこにおきました。やがて体はくちて、骨だけが残るようになります。



5.4 庭に立てた石に祈る

《ふがぬとう》は庭にサンゴの石を立てて拝んでいました。へその高さほどある大きなものです。島の人たちが拝む《びでいり》*によく似ていました。

「わたしたちと同じなんだねえ」と島の人びとは言い合いました。

でも 島のビディリにはない字のようなものが書いてありました。お祈りのなかみはわからないけれど、イカの墨^{すみ}で書いていたので それでは雨で流れると、乾けば固まる木の汁で書かせました。

《ふがぬとう》が自分たちで工夫した黒っぽいもので布に何かを書いているところも見た人がいました。彼らが、見聞したことを忘れないように、記憶に留めるためのいろいろな工夫をしていた、その姿が、島人の印象に残ったのでしょう。

* 庭に立ててさまざまなお祈りをする石。





5.5 火に祈る

暑いある日のことです。

《ふがぬとう》は「火を起こしてほしい」と頼みます。

《むらぬうや》の指示で、藁の火と薪の火を起こしました。

《ふがぬとう》は薪の火に向かって熱心に祈りました。何を祈ったのかはだれもわかりません。昼なのに薪の火が明るく見えました。

その時《むらぬうや》はこう話しました。「今吹いている風の弟の風が吹いてきたら、舟を出して、帰れるようにしましょう」。





5.6 月光のちぎり

《ふがぬとう》たちは、人柄もよく、またいろいろな生活の知恵をもっている賢い人たちでした。《ふがぬとう》たちからいろいろなことを習うために青年たちは、いつも通ってきていました。そのうちに、兄弟の仲を結ぼうということになったのです。

そこで《むらぬうや》がたちあって、月夜の晩に、月の光を浴びながら、その力を借りて、これからはお互いに兄弟として生きていこうということをみんなで確認しあいました。

この絵には、人間の姿は描かれていませんが、月の光は、それを浴びるものに健康や幸せを与えてくれる特別な力をもっているとされ《うとうんとう》、または敬称をつけて《うとうんとうがなち》とお呼びしています。そして《うとうんとうあんしみ》は月光浴で、体が弱かったわたしは、小さい頃、毎月じいちゃんに連れられて海辺の浅瀬に立って、これをさせられていきました(7.1)。





6.1 舟と縄の準備

《ふがぬとう》を送った舟は《ふがぬとう》が帰る日にはすぐに舟を出せるように《ふがぬとう》が与那国島に着いてまもなく作り始めたと言われています。

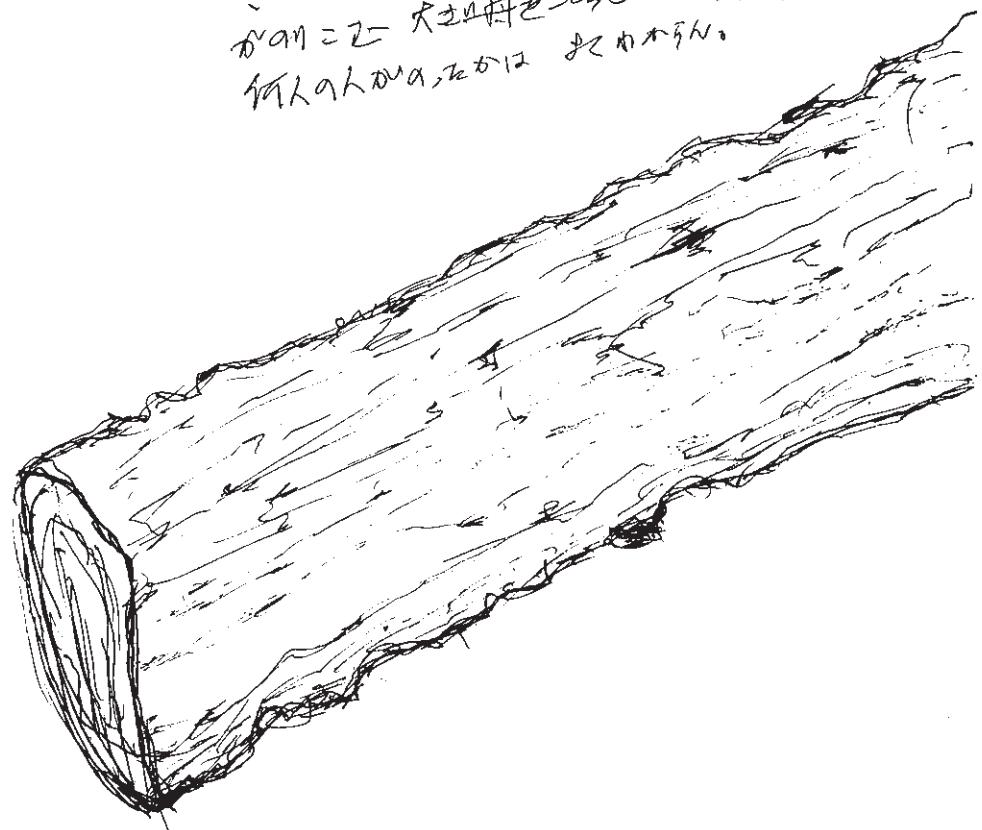
三人を送っていく人たちも乗るために、大きな舟が必要でした。与那国島の材木では小さいので、たまたま西表島からもらってきてあった大きな木*を使ったようです。

また《いとう》(トウヅルモドキ)で作った丈夫なもやい縄も、たくさん準備しました。

*木の名前や種類はわかりませんが《ふがぬとう》がいた頃は、西表島の木は、与那国島の栗と交換で入手していました。

この後の時代、与那国島の人は、西表島の崎山村(編注、1755年創建)の人に、山の木を見定めて切って潮水につけるスーカン(潮干)という方法とか、与那国島から何をどれだけ持つていけばいい、とかそういう技を教えてもらう習慣でした。けれど、けっこう危険のともなう、崎山と与那国との間の船旅の回数を減らすという意味もあって、与那国島でもそういう木の種類がわかる人、とくに、西表島の《にらがなち》(地の神がみ)にお祈りできる人がいたらいいということで、崎山の人について、修行しました。それをすべて習いおわった印に、崎山の人が《なんだぬぶるさ》(銀の塊)と呼ばれる宝物を下さったというのですが、これはもともとは、台湾から与那国島にわたるはずの銀塊が、手違いで西表島で預かっていたのを返すということだったと聞きました。わたしは、そのいわれのある《なんだぬぶるさ》を手にとったことがあります、赤ん坊の頭ぐらいの大きさがありました。

フガヌトウ カウ 潮干にすぐ
舟を出せる様に、と舟づくりは
島に很多人が着て、間もなくは出されたという
木は どうも、西表島の山の木が使われた
と ちがい木はどこにあった。3人以外は皆
が同じで 大型舟を2艘と 木の舟は2艘
何人の人があつたかは わからない。



② なんか ンヌ クル キロ ンハ ない 木 か
たまたま 大木 が あつた。



6.2 旅立ちの準備と猫への感謝

みんなが待ちわびていた「弟の風」が吹いてきました。三人が島を離れる日がとうとう来たのです。うれしい気持ちと、別れづらい気持ち。この日のために、島では色々な準備が進められていました。みんなで送っていくための大きな舟は、三人が島に着いてすぐに造り始められていきました。あらたに、道中のお守りとして、それぞれの庭で祈っていたサンゴ石に似せた小さな土の焼き物《んたびでいり》を三つ*。たくさんの食べ物など、考えつく限りのいろいろな準備を整えました。

《んた》(粘土)をこねるとき《ふがぬとう》たちが、旅先で飢えることがないようにと《くぶりちん》(碎け米)をさらに細かく碎いて、ひとつまみずつ混ぜ、焼き上がってからはいろいろな食べ物の汁をかけました。

「この風の弟の風が吹いたら出発だよ」と《むらぬうや》が《ふがぬとう》に言ったときのことです。わたしたちと同じように色々なものに感謝をする三人だから、「弟の風に変わったら旅に出ます。その時はゆっくりお祈りをすることがきなくなるかもしれません。そんな時には《むらぬうや》のわたしがここ与那国島で祈ってあげましょう。」

「あなたたちがここに来る前に、猫たちがひどく騒いだか

ら、ただ事でないことが起きる、と心構えができていたんですよ。だからあなたたちの到着をあのように受け入れることができたし、猫の通信を通じて、賊があなたたちを襲おうとしているのを見つけて大事にならずに済んだ。このように猫たちが守ってくれたんだよ。もし猫がいなかつたらあなたたちは、ここにこうしておれなかつたよ。」

と《むらぬうや》は言いました。

今日でも、与那国島のわたしたちは猫を頼りにしています。特に猫でなくても、鶏、山羊、豚でもいいのです。様子がおかしかったら何か悪いことが起こる前触れと考えています。

そして「弟の風が来たら送り出すのだけど、先の島にもちゃんと猫がいて《ふがぬとう》たちを守ってくれるかねえ」と、島の人たちは心配しました。

* 三つの《んたびでいり》を作った粘土は、祖納から比川に行く途中の地だったと語られていました。



なむこ

6.3 旅立ちと別れ

島の人はみんな、心の底では《ふがぬとう》たちと別れたくない、行かせたくない、という気持ちでいっぱいでした。でも《むらぬうや》は、そんな悲しそうなそぶりを見せてはいけない、うれしい故郷への旅立ちを励ますんだ、とみんなに言い聞かせました。

《むらぬうや》は、三人を送っていく者として、13名を選びました。ふだんから舟に乗ることに慣れている人はもちろんのこと、星を見て方角を知るのが得意な人や、食べ物の変質したのを見分ける人、看病ができる人など、さまざまな力をもった島の人たちが選ばされました。

《ふがぬとう》の舟出の日まで、島の人びとは次のような食べ物や持ち物をできるだけ蓄えて、それを《ふがぬとう》の乗る舟に積み込みました。

伝承者によつては、舟は一艘だけではなく、何艘もの舟が西表島へ向けて伴走したと伝えています。また、与那国島の人が、王様のいる島まで《ふがぬとう》を案内して行った、とも言われています。上陸して、5本の道が別れているところに着いた時、一本の道を示して「この道を行けば王様のところに行ける」と教えて別れたと言います。ただ、のちに与那国島の人が西表島で《ふがぬとう》に再会したという伝承(次の6.4)から見ると「王様のいる島」まで与那国島の人が《ふがぬとう》を連れて行くということはなかったと思われます。

1 ご飯。2 《むんぬく》(ヤマモモの実) の塩漬け。3 《ぬひる》(ノビル) の塩漬け。4 《からす》(塩辛)。《はらぐ》(カツオの腹側) の塩辛。これは《ふがぬとう》の大好物でした。5 《かんだいゆ》(干し魚)。6 《うん‘ていぬくでい》(山芋の澱粉)。7 《さんいん》(ゲットウ) を干したもの。8 《み‘てい》(口噛み酒)。作り方も教えました。9 たくさんの中。人々が着ている着物を裂いて作りました。

三人を乗せた舟が、いよいよ島を離れます。舟出する場所は、島のあちこちから集まりやすいように《とうぐる浜》(現在の滑走路の東端) が選ばれました。そこから島の東の端の《あがいさ‘てい》(東崎) までみんなが海岸沿いに立ち、手をふって見送りました。心から別れをおしみながら、三人の無事を祈りつつ。

舟の上の三人は、作ってもらったお守りの、土を焼いて作った《びでいり》の模型《んたびでいり》に、食べ物に困らないように祈りをこめたものを高く捧げて、深々とお辞儀をします。その小さな《んたびでいり》が島の人たちには大きく大きく見えました。《ふがぬとう》たちは、いつまでもいつまでも両手を広げて振り続けていました。



6.4 波をこえて

別れを惜しみながら、風に乗せて西表島へ向けて三人を送り出した後のことです。

与那国島から父と子で魚を捕りに舟を出したところ、嵐にあい舟は波に飲み込まれて、父と子は荒海で別れ別れになりました。こんな恐ろしい波のことを、島では《うやはばがりぬなん》、つまり「親子別れの波」と呼んでいます。

どちらか一人は海で亡くなり、もう一人は運良く西表島で助けられ、八日間滞在して、そこで《ふがぬとう》たちに再会しました。彼らが西表島でおいしいものを食べて、元気に過ごしていたという報せを与那国島に持ち帰りました。

《むらぬうや》はこの報せをとても喜んで、感謝の祈りをなさいました。*

* この時に、西表島から借りた舟は、西表島の南西の仲之御嶽（なかぬうがん）島に海鳥の卵を探りに行った時に返しに行ったと伝えられています。また与那国島のきまりでは、仲之御嶽島の海鳥の卵は、家族の分としてひとり1個と決められていて、他の家族から頼まれる場合も、その家族の人数以上に採ることはいけないとされていました。





6. 5 三人を追いかけようとした若者たち

「月光をあびて、兄弟のちぎりまで結んだのに、無事にふるさとの島に帰れたのかどうかわからないなんて」と言って、若者たちが、追いかけて行くために舟を出そうとしました。浜辺でのさわぎを聞きつけた《むらぬうや》は、激しく若者たちを叱りつけました。「どこの港へ行つたかもわからない人を追いかけて舟を出そうなんて、これから寒かんもやって来る、赤ん坊も生まれるというのにいつたい何を考えているのか。祈った方がいい。あの人たちは、朝日に手を合わせ、寝床にさしこむ月の光を喜ぶ、わたしたちと同じ心持ちをもつた人たちだから、無事ふるさとの島に帰れたら、必ずなんらかの《しらし》(報せ)は来る。便りを待ちなさい」と。それを聞いて、舟を出すのをあきらめた若者たちは、声をあげてわあわあと泣きました。

《ふがぬとう》のみなさんは《みたいんとう》つまり「三人」とまとめて語られることが普通でした。でも、話し手によっては、それぞれの性格の違いが出てくることもありました。

一人目は、いつも落ち着いていて、動作がとてもゆっくりしていて大きく、判断が的確で、みんなのまとめ役。わたしは、勝手に「のったりのつたりさん」とあだ名をつけたりしています。二人目は、性格がはっちゃけていて、声が高くて動作も速く、にぎやかな性格なので、いつも子どもたちがとりまいていました。わたしは「カンカンさん」と呼んだりしています。最後のおひとりは、背が高くて頭がすごく大きいのだけれど、とってももの静かな、おとなしい人なので「お静かさん」です。そうそう、左足に指が六本あったのは、この「お静かさん」でした。





6.6 報せを受け取る木を植える

義兄弟の後を追いかけて行こうとしてあきらめさせられた若者たちに《むらぬうや》は、こう言いました。

「一本の丈夫な木を選んで植えなさい。風当たりを考えて長く立っていられる場所に、膝の高さの幼木を植えなさい。この木が《ふがぬとう》たちの旅の知らせを受け取ってくれるでしょう。いったいいつになるかわからないけれど、きっと報せは来る。」

若者たちはその通りにして、親子三代続いてこの木の世話をしたといいます。*

* 報せを待つその木を植えた場所は、はっきりとは伝わっていません。ひょっとしたら、わたしが海の潮を汲んで、お祈りに使う塩作りをしていた《あがんに》という畑の塩がめの横に立っていた木じゃないか、という気がします。うちのばあちゃんが《ふがぬとう》の《にんがい》(祈願)を、その木のところで時々していた場所だからです。



アガシの塗つるかわのそば

はつきりとしていたが、だんだん木の色はぼやいてる

yoko

旅の報とて絵つ木 2022/5月19日

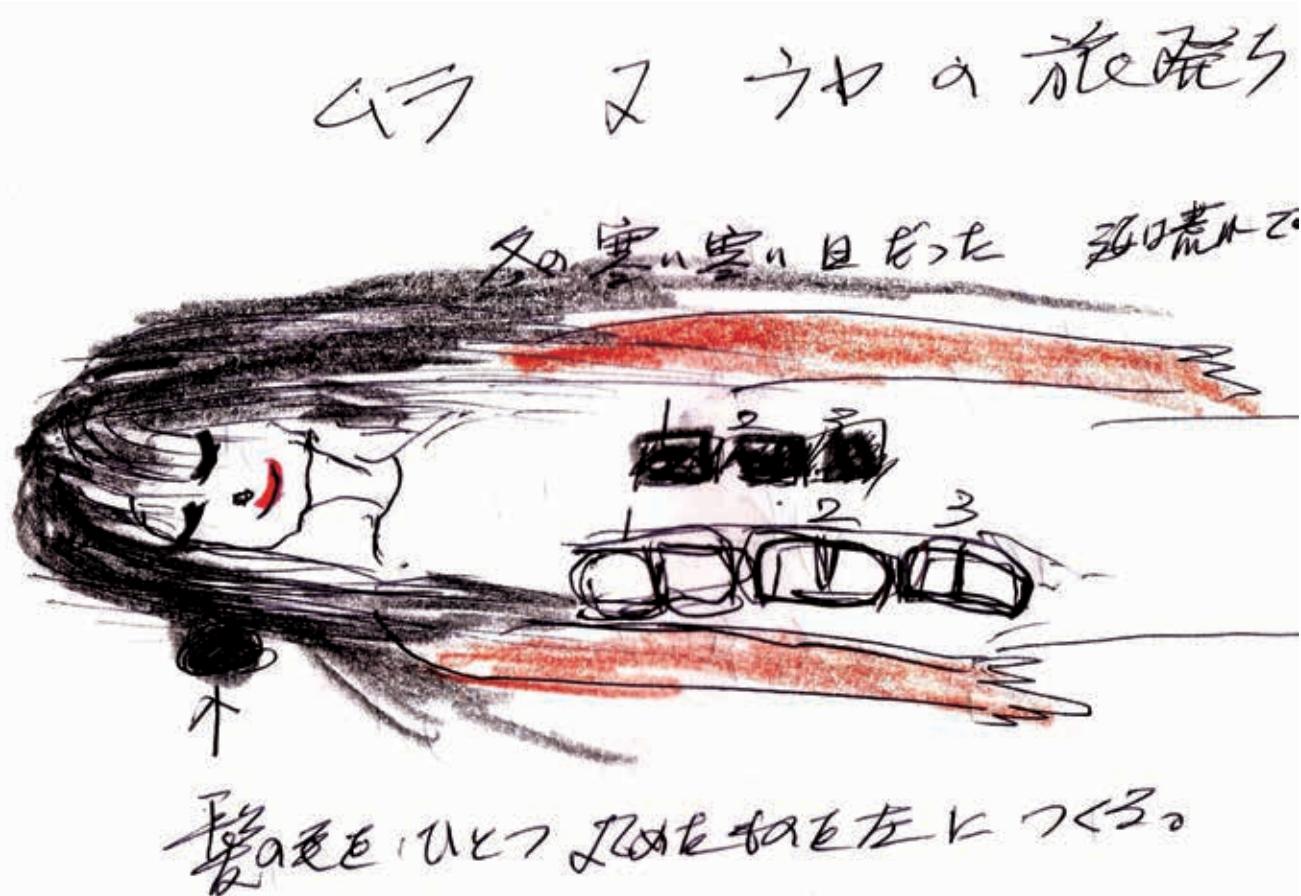
6.7 《むらぬうや》の旅立ち

三人の《ふがぬとう》を大事に守り、見送った後も三人のために無事を祈り続けた《むらぬうや》。とうとう《むらぬうや》が旅立つ日がきました。海が荒れて、冬の寒い寒い日でした。

この日のために《むらぬうや》は二つのものを島の女たちに用意させていました。一つは、三人が身につけていた下着の《あっぱ》。もう一つは《くどうるずみ》*という黒い泥染めの布三枚です。あの世ではきっと三人の親御さんに会えるでしょうから、これを見て話そうと考えたのです。この泥染の布のように、黒々とした髪の毛で元気いっぱいに舟に乗りました、と。

この《くどうるずみ》をした場所は、ここに描いた祖納の《ながどうかー》と呼ばれる井戸です。とくに美味しい水ではありませんが《ふがぬとうぬかー》つまり《ふがぬとう》の井戸とも呼ばれていました。

*《くどうるずみ》は泥染めで、媒染は灰だったと聞いています。《あんがいぬあぶ》(東のばあちゃん) とうちのばあちゃんの話を合わせて、わたしは実際にやってみました。何回も重ね染めをしてかなりの日数をかけると、伝承のとおり髪の毛のように黒く染められました。





6.8 卵を抱くめんどり

《むらぬうや》が旅立ったあと、人びとは《むらぬうや》が教えた方法で《ふがぬとう》が、故郷に帰れたかどうかをうらなおうとしました。

その方法は、めんどりに卵を抱かせて、それがかえったら《ふがぬとう》が帰れた印、というものでした。卵の数は、

一羽について六個ときまっています。二羽の鶏を、違う方向に向かせて抱かせるのがわたしの仕事でした。

そのあと、卵からひよこがかえったら、みんな喜んで《ふがぬとう》とめんどりをはげますように《すいすいすい》という、掛け声のような、歌のようなものをえんえんと続けました。

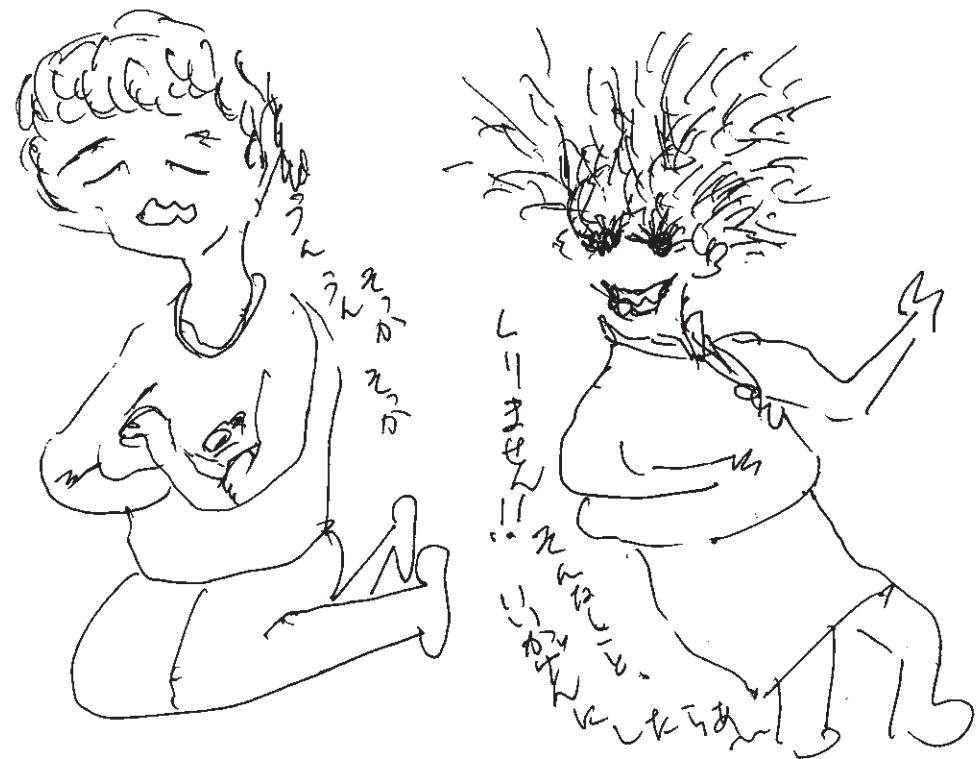




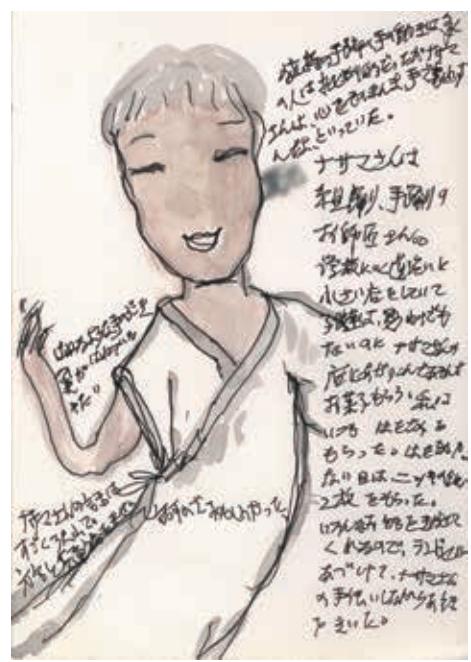
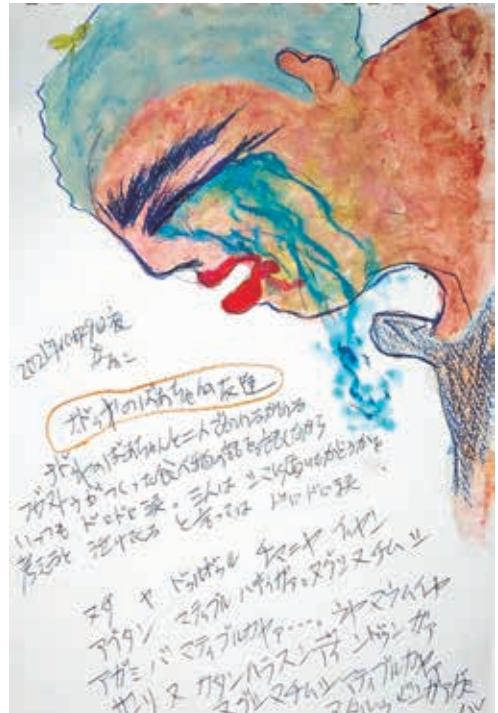
第2部 語りついた人びと (1954年~)

7.1 話し手のみなさん

わたしが2歳半のときから、くり返しきり返し《ふがぬとう》のお話を聞かせてくれたお年寄りの姓名は知らないことがほとんどでした。思いだすままに、みなさんの似顔絵や思い出を描いてみます。このページの絵は、雨乞いをする、父の実家の祖母と、14年間同じ部屋で寝起きした祖母に何か怒っているわたしです。右ページのカラーの絵は、満月の海で、体を強くするために海辺で月光浴をさせてくれて、その無理がたたって亡くなった祖父と、夏でも寒いので大声で泣いているわたしです。

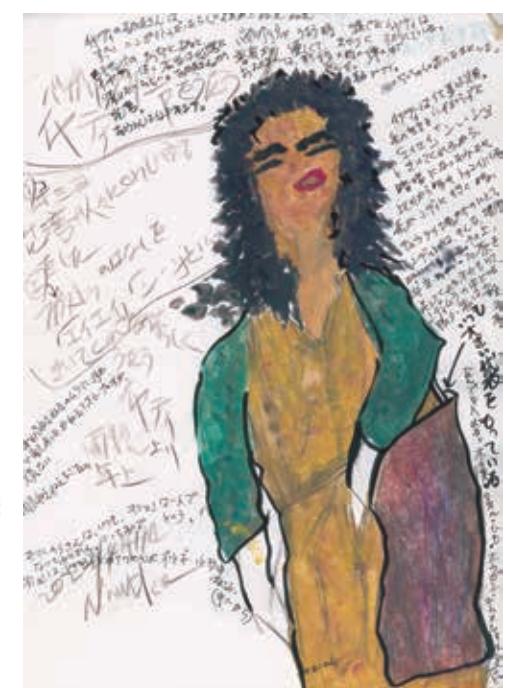
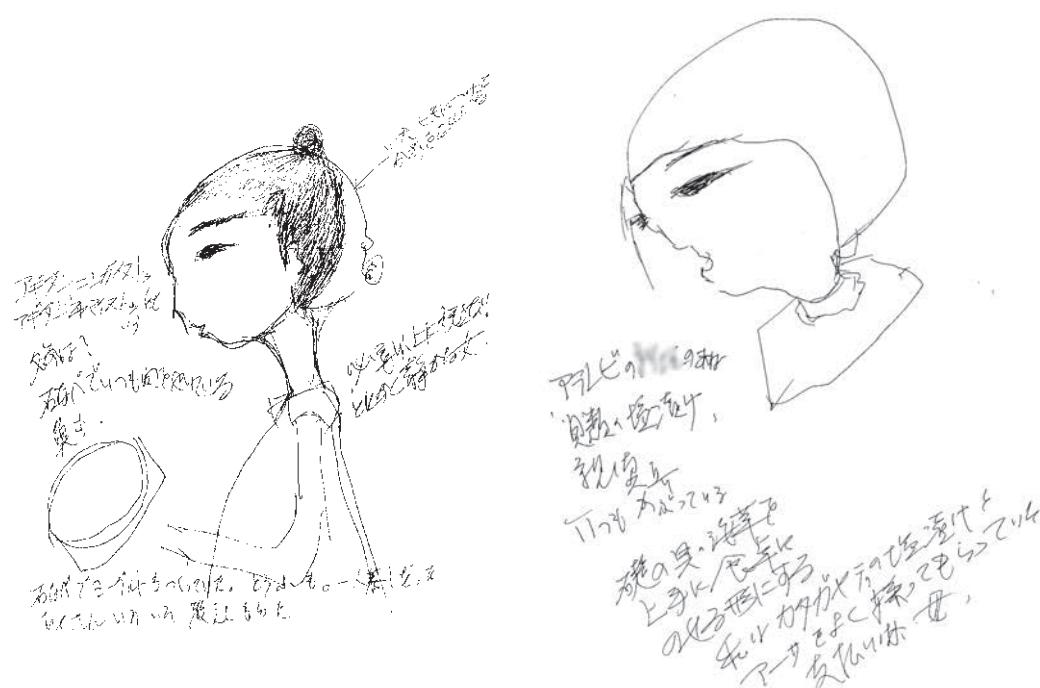


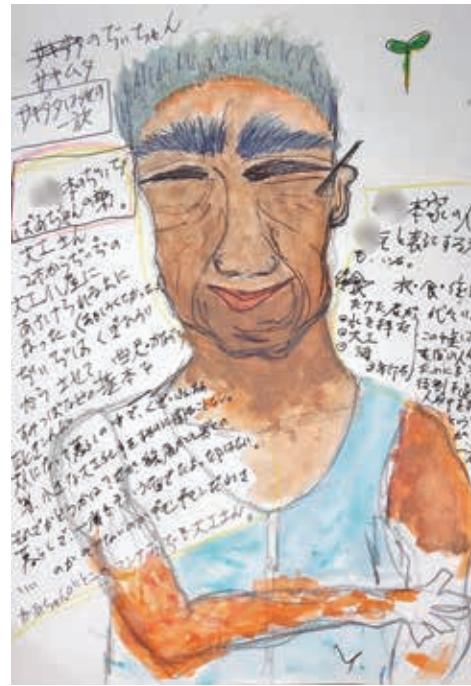
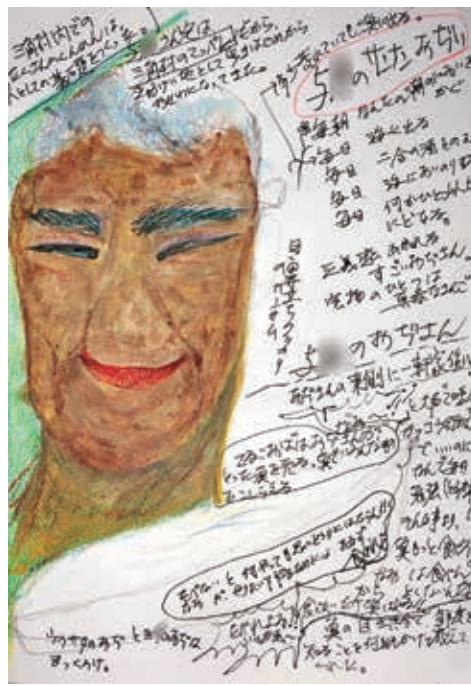
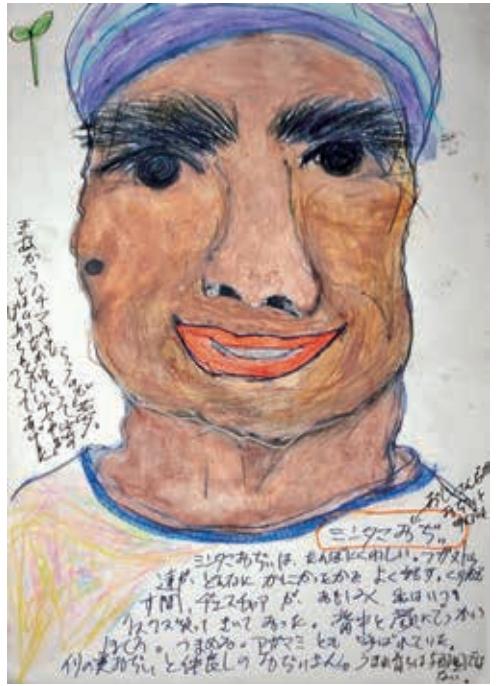


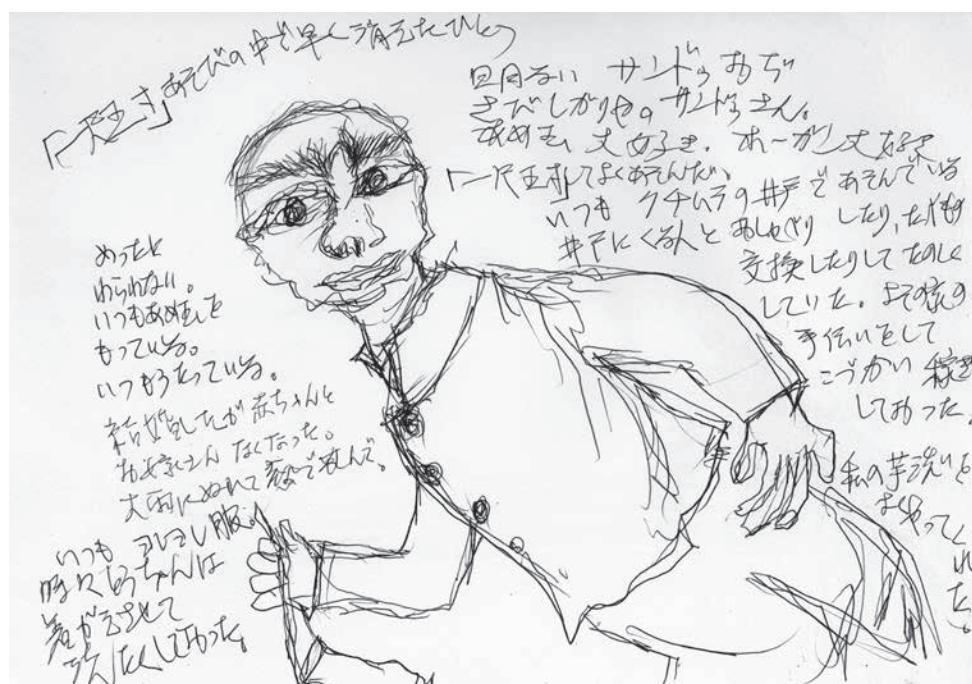
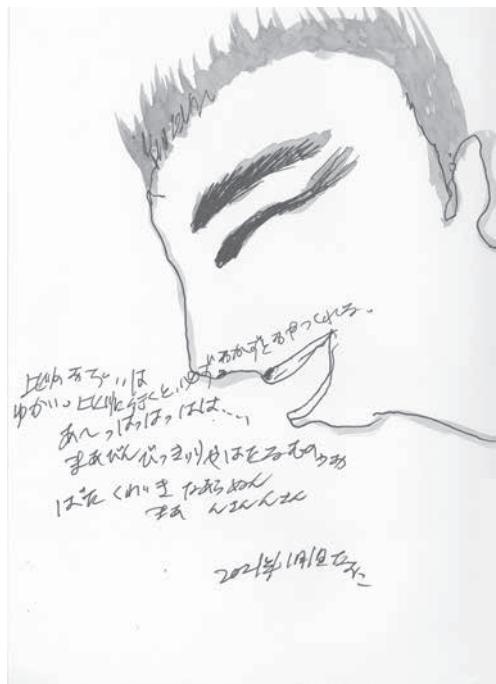












7.2 よい報せを待ち続けた歌

《ふがぬとう》たちが、無事にふるさとに帰れて、親の胸に抱かれたのかどうか、与那国島の人たちは、ずっとずっと心にかけ、報せを待ち続けてきました。いつしか《ふがぬとう》のことは忘れられがちな中、いろんな別れの場で歌い続けられてきた歌があります。それが別れの辛さを歌った《ばがりぐりしゃ》です。日々に歌うその歌は、主に女性が歌う歌として残っています。

わたしは、稲の苗たちが、新しい広い田んぼへと旅立つ田植えの前に、苗代で延々とこの歌をうたって聞かせるという役目を、小学校に入る前からうんざり*するほどやらされていました。飼っている馬に別れを告げる時にも、呼ばれて歌いました。大切な人が、島を出て行くときにも。

ばがりぐりしゃの歌

ばがりぐりしゃぬ
まぶいば くみてい
かじに ぬしてい
うぐいや だらしゃぬ
かじぬ たゆいや みぬんどう

別れづらいけれど
魂を 込めて
風に のせて
送って いかせたが
風の たよりも
ありやしない

* 苗代で、稲の苗たちが住み馴れた苗代を離れて、本田に植えられることを納得してくれるまで、わたしだけが《ばがりぐりしゃ》を、えんえんと歌わなければなりませんでした。一日に三か所から頼まれて続けて歌わされた日を描きました。

《ない》(苗)の面倒を見るのが仕事だったので、この頃のわたしは《ない》とも呼ばれていました。いまでもわたしのことを「ないちゃん」と呼ぶ人がいます。

すごく疲れるだけじゃなくて、いっぱい虫にも刺されるし「もういやだ！ 行きたくない」と祖母に言ったこともあります。そのとき、祖母が「あんたしか、これができる人はいないんだよ。だから、あんたが歌わないと（稲が育てられないから）お米がなくてひもじくなつて、みんな死んじゃうよ。それがあんたの望みなんだよ。『じゃ、やる！』と心を決められるか？」と言われました。わたしは、泣きじゃくりながら「やります、やります」と答えた後、祖母は「泣かんでもいい、泣かんでもいい」と言いました。



7.3 五つのおむすびと三つの団子

ものごころついた時には、家族でわたしだけが、母が片手でぎゅっとぎったおむすびで、味は塩だけというものを、毎日五個ずつ食べさせられていきました。また、毎年8月1日になると、家の軒に粟の団子を三つぶら下げて、お下がりをわたしが食べました。そのあと、祖母は、《ふがぬとう》の頃からあるという、古い青い珠の首飾りを身につけて、祈りの舞いをしました。粟の団子を軒につるすのは、旅人の安全な船旅を祈る、与那国島の古い習慣でした。

わたしが中学に入った1966年ごろ、お年寄りたちが「《ふがぬとう》の正月」という祈りの儀式をすることになりました。与那国島の祖納村の北の《しき浜》という小さい浜に集まって、山の神・海の神・里の神のそれぞれの方向に三つの陰膳を据えて、みんなで《ふがぬとう》が故郷に無事帰れたという報せがいつか届くことを祈りました。

わたしが中学生3年生のとき、お年寄りたちは、自分たちが袋に貯めていた小銭を集めて、わたしが島のお店で好きな布地を選んで、体に合わせて着物を縫うようにしてくれました。それは、お年寄りたちが亡くなった後も《ふがぬとう》のための旧正月とお盆のお祈りを続けるための着物でした。そのことをいつまでも忘れないように、そ

の着物の裾には、ちょうど始まったわたしの初潮の血と、バショウの樹液を混ぜたものをぬりつけました。その色がけっして消えないように《ふがぬとう》の物語の記憶を忘れないための印でした。





7.4 《ふがぬとう》を忘れないために

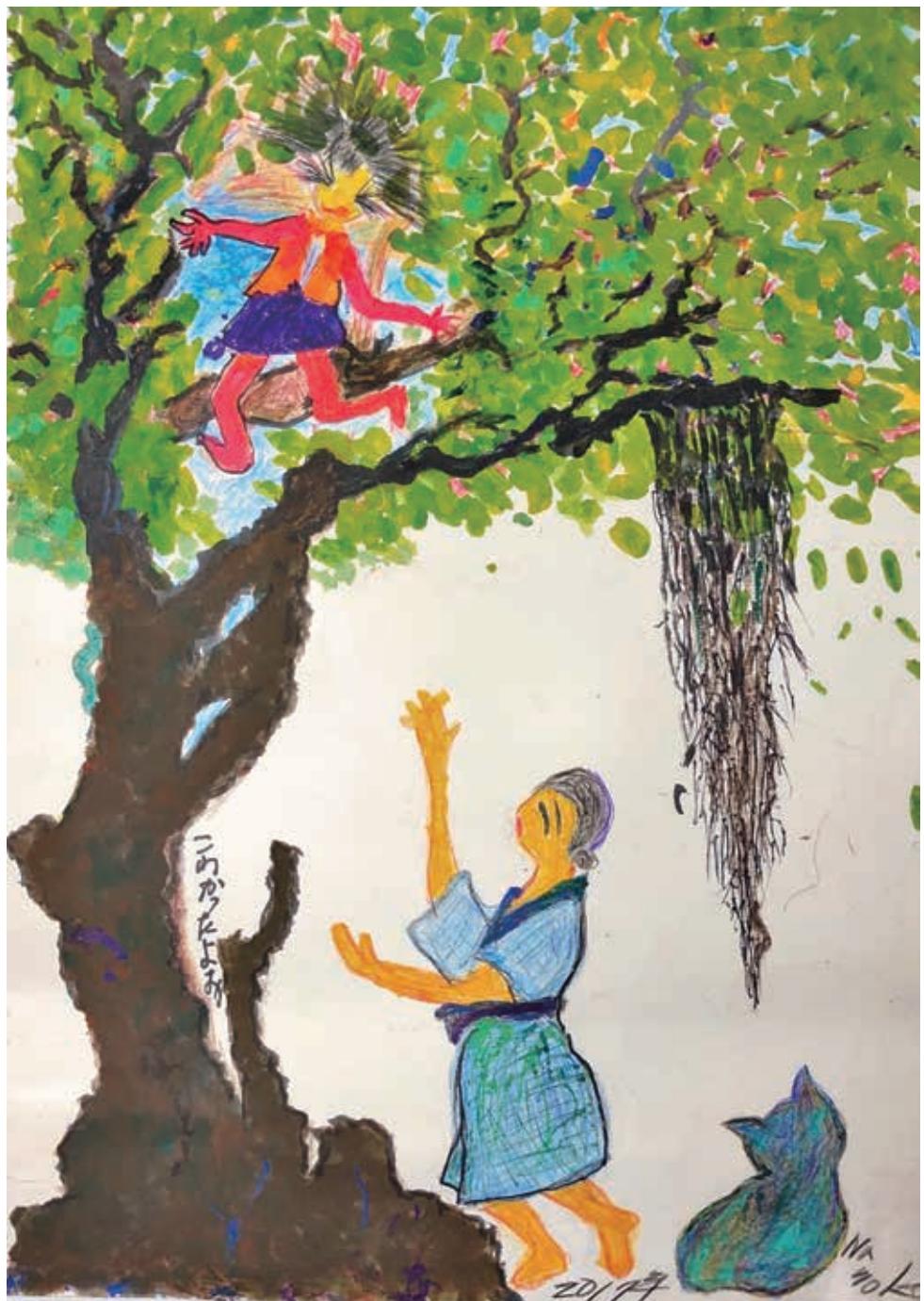
《あっぱ》と呼ばれる《ふがぬとう》がつけていた下着の作り方が伝承されていて、わたしは、五歳ぐらいの時に作ってもらい、その作り方を忘れるなど命じられました。

はじめてそれを身につけた時、とても気持ちがいいので、うれしくて、その姿で家の外に飛び出すと、恐ろしいけんまくで祖母が追いかけてきました。こわくなったわたしは逃げて庭のガジュマルの木に登りました。祖母から「その姿をぜったいに人に見られてはいけない！」と叱られて、めったにないことでしたが、お尻を叩かれました。

またある時《あっぱ》をしばる紐と四隅に丸い蝶結びのような輪が二つついているのが可愛いので、鉛筆を突っ込んでぐるぐる回しているうちに、輪を切ってしまいました。祖母から「これがどんなに大切なものなのか、あんたにはわかっていない」と言われて、まる二日間、半畳のたたみの四角い枠の中にじっと座って、お便所と食事の時以外は動いてはいけないというお仕置を受けました。そして、「もしもう一度こんなことをしたら、あんたにあげたわたしの名前を取り上げてしまうよ」とおどされました。これより恐ろしいことはありませんから、それ以来、わたしは《あっぱ》にいたずらをすることは決してありませんでした。

《ふがぬとう》の思い出を忘れないために《あっぱ》の図を描いて、右の写真のように、友だちに縫ってもらったり、また《ふがぬとう》が料理していた当時の形の土鍋を、今も土をこねて作って、これで料理することもあります。そして《ふがぬとう》にお守りとして持たせた《んたびでいり》(土で小さく作った靈石の模型)も粘土を伝承の通りの形にこねて、焼き物にしています。





7.5 精霊流し

それからも島の人たちは《ふがぬとう》たちが無事ふるさとに帰れたか。親御さんの胸に抱かれたかと案じ続けました。いつかはきっと知らせがあるはずだと待ち続け語り続けました。

この絵は《するんだぶ》という行事のようです。
精霊流しですが《ふがぬとう》たちを想いながら、舟から灯籠をたくさん流し、海岸では大きな焚き火をします。《する》は精霊《んだぶ》は、ハマゴウの花のように連なっていることをいう与那国語です。

わたしたちは《ふがぬとう》の無事を祈るときには、海で亡くなったという《ふがぬとう》のお友だちの分も、別口の重箱をひとつ作って、ささやかだけど捧げ物をしてお祈りしてきました。《ふがぬとう》の分がひとつ、亡くなった人たちの分がひとつ。海で亡くなった人の魂は迷いやすいから、特別の祀り方があります。

わたしが中学生のとき、重箱を三つも作って《しき浜》で山と海と里の神がみにお祈りした（7.2）こともありましたが、これは、特別に大々的にやった時のことで、いつもはそんなに大げさにはしません。

だんだん祀る人たちが少なくなってきた頃「いまごろ

は、孫もできているだろうね」とか言いながら、それでも続けてやっていたのです。



7.6 与那国語での語りと日本語訳

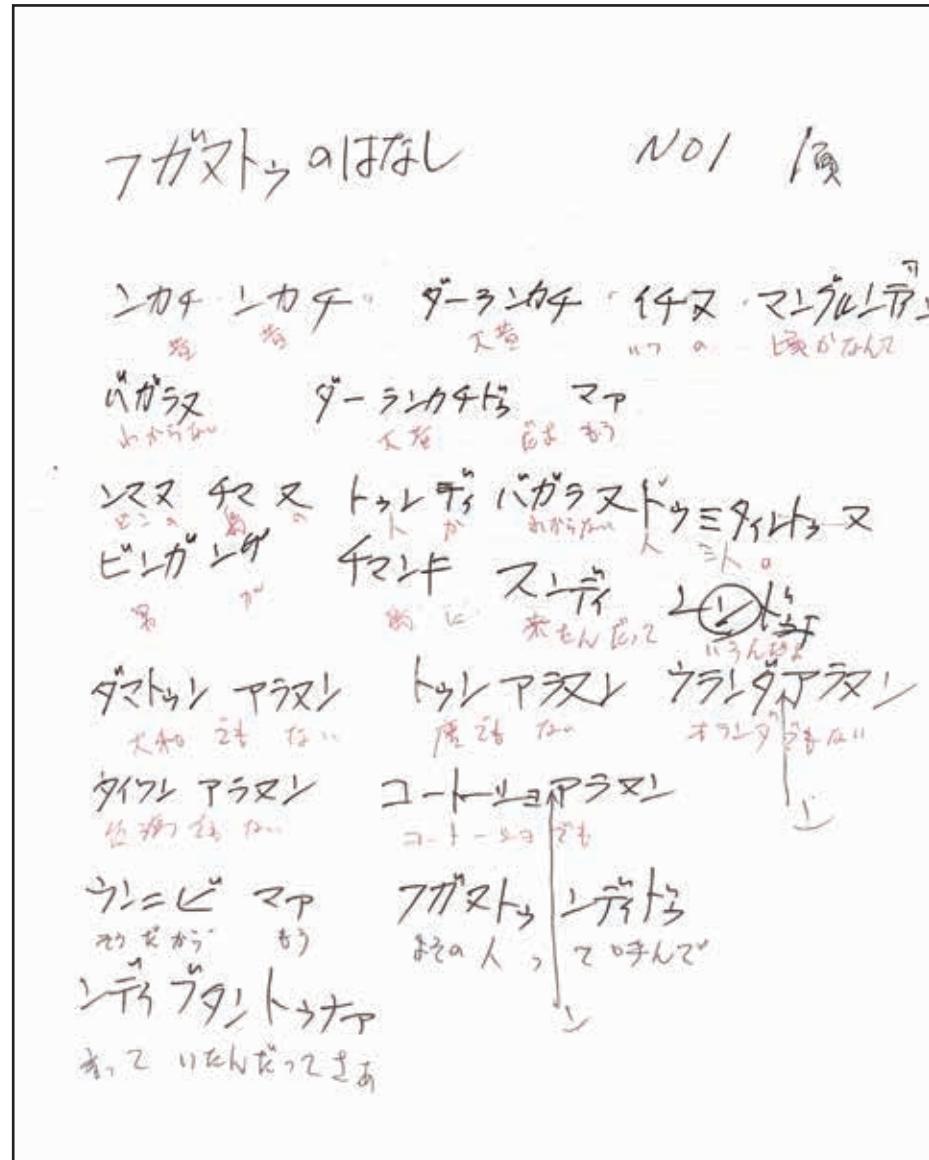
ここに示したのは、N子さんが《ふがぬとう》伝承を、《どうなんむぬい》(与那国語)と日本語の対訳にして書いた2018年の10冊のノートの1冊目の冒頭です。三人の男たちが与那国島にやってきたが、どこから来たのか分からない、という全体の冒頭の第一話の部分で、この画文集でも、1.2と1.3において物語の語りに相当します。

幼いころから《ふがぬとう》伝承の膨大な語りのさまざまなバージョンを、そのまま記憶してしまうというトレーニングを受けてきたN子さんは、それを整理して、ある日のある人の語りの再現という形でノートし、それに日本語訳を付けました。

ノートされた《ふがぬとう》伝承は、与那国語だけでも、およそ2500行、日本語訳を加えた文字数は約15万字ほどです。400字詰め原稿用紙にすれば、400枚近い分量です。ここに紹介できたのは、50行弱ですから、この50倍程度が書かれたわけです。そして、これらのノートと並行して、N子さん自身が《ふがぬとう》の語りを録音した音源があります。与那国語のような、ネイティブによる継承が難しくなってしまった言語について、このような資料が作成されたことは、きわめて貴重です。

しかもその内容は、できるだけ明治生まれの話者たちの語りを再現するように努力してまとめていますので、ひとつの標準的な教材として利用し得るものです。この節の末尾の2次元バーコードから、気軽にスマートフォンで聞くようにする計画を進めているところです。

濟州島からの漂流民が与那国島に来た時点では、オランダという地名はまだなく、紅頭嶼の人びとともに交流はあっても、呼び名は別だったかと思われます。長年語り継がれるうちに、付け加わったものでしょう。いずれにしても、与那国島の人たちの知っていた世界の《ふが》つまり「外」から来た人たちだったことがわかります。(編者)



どうなんむぬい（与那国語）

んかちんかち だーら んかち いちぬ まんぐるんでいん
ばがらぬ だーら んかち どう まあ。
んまぬ ちまぬ ‘とうん でい ばがらぬ ‘とう みたいんとうぬ
びんが が ちまんき すんでい んどうお。
ダマトゥン あらぬん トゥーん あらぬん ウランダん あらぬん
タイワン あらぬん コートーション あらぬん
うんにび まあ ふがぬとう んでいどう
んでい ぶたんとうなあ。
ふがぬとう が ちまんきい くう まいにや
ちんぐ まゆんた みったんたが
はいにち ばがらぬた あいたらしきい
ういたら まんぎらし ‘たっきらし
なぐんでい んどうお。
ぶーるし 「んん うや くとう うぐりるんやあ」
んんみん たあん 「ぬうんが うぐりるかやあ？」
んでい しばきい ぶたんでい。
あとうに ないてい 「えい まゆん みったん
うぬ くとう どう しらし ぶたるていらおお」
んでい はなし きたんで んだりぶるお。
みたいん‘とう みな あらあぐ ばありきい
ばたや かりどう ぶたんでい んどうお。
ばたや かあり びりりんてい ぶたんとう なー。
みたいん‘とう みな あらーぐ ばありきてい
ばた や かあり ぶたんでい んどうお。

日本語（だまとうむぬい）

昔むかし 大昔 いつの 頃かなんて
わからない 大昔 だよ もう。
どこ の 島 の 人 か わからない 人 三人 の
男 が 島に 来たんだって いうんだよ。
大和（日本）でも ない 唐（中国）でも ない オランダでも ない
台湾で（も）ない 紅頭嶼（蘭嶼）でもない
そうだから もう 「よその人」 って呼んで
言って いたんだってさあ。
「よその人」が 島に 来る 前には
すごく 猫たち 鳥たちが
南北 わからないほど 走りまわり
上下 ひっくりかえして 大さわぎし
鳴くんだって 言うんだ。
みんなで 「ウーン これは 大事（災い） 起こるなあ」
どこでも 誰でも 「何が 起こるんだろうか？」
と言って 心配して いたんだって。
後に なって 「ははあ～ 猫も 鳥も
この こと を 報せて いたんだなあ～」
と 話して たんだって 言われているんだよ。
三人 とも とても 疲れていて
おなかは 空いて いたんだって いうんだ。
おなかは 空いて ぺったんこになって いたんだって さ
三人 とも とても 疲れていて
おなか は かれて いたんだって いうんだ。

ちま ぬ むぬ はみんさるかやあ んでい
 しばどう あるゆんがら ていーぐりさ ふちぬは どう
 あちみてい むんたくりていえ かばみたんでい。
 みたいん‘とう みな ちらむてい だばだば きい
 いび ばらいていばらいてい きたば ぶうる しゃーなき
 またん ‘くばん きたば 「いった ていぐりさ
 いい どう はみまちえ」 んでい んでいてい
 ちら すすい はだ すすいてい どうい ぬ いい
 しくんきてい はみんたん でい。
 みたいん‘とう みな かちぬち はい
 「んむんむんむ」 ん でい まあしく はたんでい。
 んだしゃる どうい や ぬひる ぬ かんち
 とう ああとう うん‘てい まんでやる いい とう ちる とう
 かんだいゆ とう み‘てい どう あたるんでい。
 あらぐ まあ きるゆんがら 「まあびん ふうな？」
 んでい とういきやあ ‘くば きるゆんがら
 またん まがいんき ちでい やあ ちでい
 きい とうらば ‘くば きてい やあ かちぬてい
 はたんでい んどうお。

島 の ものは 食べられるか と
 心配で あるのだから 手早く よもぎの葉 を
 集めて 揉んで におわせたんだって。
 三人 とも 顔つき やわらかく なり
 少し ニコニコ したので みんな 喜んで
 また うなずいた ので 「それじゃあ 手早く
 ご飯 を さしあげた方がよい」と 言って
 顔 拭いて 肌 拭いて 夕飯 の ご飯
 用意して 食べさせたんだって。
 三人 とも かきこんで 食べ
 「ンムンムンム」と 言って たくさん 食べたんだって。
 用意した 夕飯 は ノビル の 塩づけ
 と 粟と 芋 混ぜた ご飯 と お汁 と
 干し魚 と 口噛み酒 と あったんだって。
 とても おいしく するもんだから 「もっと 食べるかい？」
 と きくと うなずく もんだから
 さらに お椀に ついで は ついで
 して あげたら うなずいて は かきこんで
 食べたんだって 言うよ。



編者作成の「与那国島の生物文化データベース」中の、
 ふがぬとう伝承のシート。続きを読む、N子さんに
 よる音声も聞けます。スマートフォンの方は左の2次
 元バーコードから。パソコンの方は、
<https://dunanmunui.wixsite.com/my-site> で



のマークをクリックしてください。



第3部 濟州島漂流民の語り (1479年5月と6月)

『成宗大王実録』卷 104 と卷 105 の漂流記

ここに紹介するのは、15世紀末の『朝鮮王朝実録』に登場する、与那国島に漂着した濟州島漂流民の記録です。2年3ヶ月におよぶ長旅の末に、故郷への帰還を果たした三人の男たちからの聞き書きです（編者の補足をかっこに入れました）。

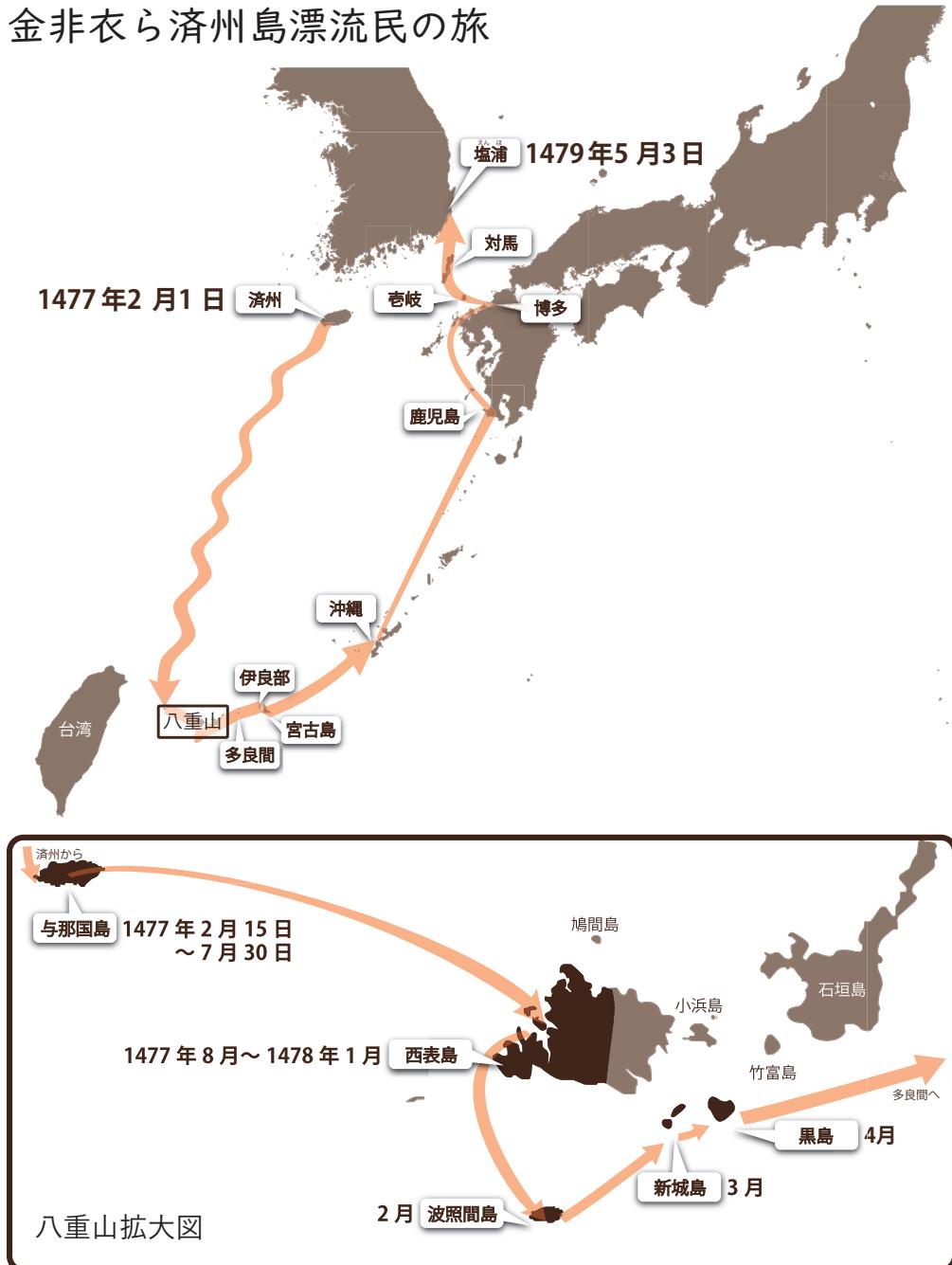
李氏朝鮮では、代々の王の時代の出来事の公式の記録を残してきました。初代太祖から純宗に至るまでの27代、519年間の歴史をつづった1967巻948冊の実録は、世界記憶遺産にもなっています。その中には、琉球王国との交流を描く記事も多く、東アジアの歴史を学ぶうえで、欠くことのできない重要な史料です。

濟州島から漂流した八人のうち、生き残った三人の記録は、表紙を示した『成宗大王実録』の卷104と卷105の二回登場します。一度目は、九州北部と対馬の覇権を争った大内氏と少弐氏の博多の合戦で大内氏が勝利したという、彼らがもたらした日本の政治状況の変化のニュースに脚光があたる記事です。しかし二度目は、まるで大学で民俗学を習った役人に交代したかのように、詳細な聞き書きになっています。

原本（<http://sillok.history.go.kr/>）と対照しながら、まずはその内容を読んでみましょう。日本語訳は、池谷ほか（2005）の読み下し文と訳注を参考に、安渓遊地が作成しました。

引用文献 池谷望子ほか、2005『朝鮮王朝実録 琉球史料集成 訳注編』榕樹書房

金非衣ら濟州島漂流民の旅



地図作成 © 伊藤 薫

『成宗大王実録』卷 104 成宗 10 (1479) 年 5 月 16 日

a 金非乙介、キム・ビ・ウル・ゲ 姜茂、カン・モ 李正が言うには、イ・ヂヨン

わたしたちは済州人です。去る丁酉の年（1477年）の二月一日に、王様に進上する蜜柑を受け取って、済州人の玄世守、ヒヨン・セ・ソ 李青密、イ・チヨン・ミル 金得山、キム・ドウ・クサン 梁成石伊、ヤン・ソン・ソ・ギ 曹恵奉とともに、鼻居刀船（軽くて速い船）に乗り組んで（途中の）チュージャド 楸子島まで来たところで風に遭い、西に向かって漂流しました。七日目には、南に向かって漂流しました。

b 十一日目に、金得山が飢えて病死しました。十四日目の朝、ちょうど一つの島に着こうとしたところで船が壊れ、玄世守、梁成石伊、李青密、曹恵奉が溺死しました。

c わたしたちは崖につかまって死にませんでした。魚をとる舟二隻とたまたまに会って、載せられて海辺の仮小屋に迎えられ、粥を炊いて食べさせてくれました。六日目には、わたしたちを家に連れて帰り、順番に食事させてくれました。

d わたしたちは「朝鮮國」の三文字を草の葉に書いてこれを見せましたが、さっぱり通じませんでした。

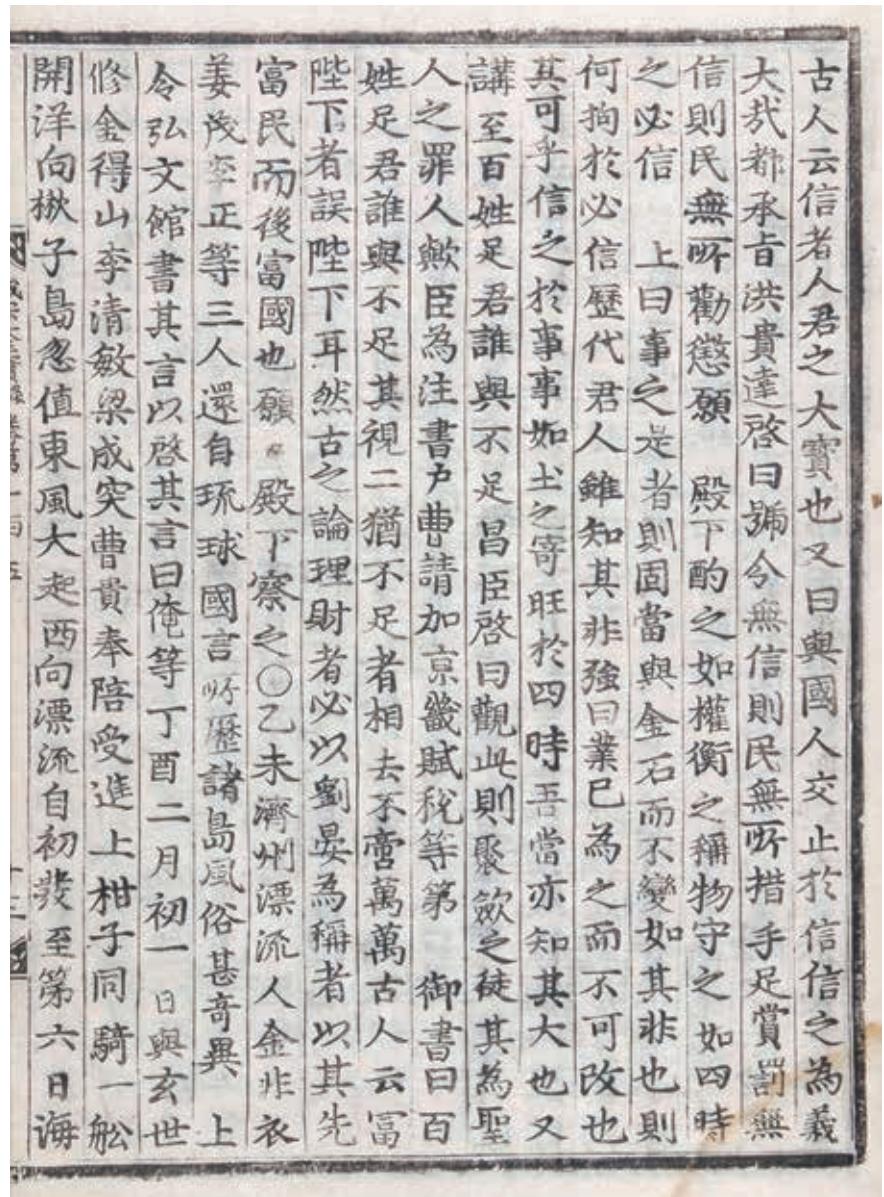
e この島に留まること六ヶ月、島人十三名が、わたしたちをつれて小船に乗り込み、東に向いて行くこと二日一夜で「所乃島（ソネド）」に到着しました。（中略）

f 済州の敬差官（王の使い）南季堂への命令書

済州人金非乙介、姜茂、李正、玄世守、李青密、金得山、梁成石伊、曹恵奉らは、去る丁酉（1477）年の二月、進上の蜜柑を奉持して発船したところ、風に遭って漂流し、玄世守、李青密、金得山、梁成石伊、曹恵奉は溺死、金非乙介、姜茂、李正は琉球国に至り、琉球国王の使臣に随行して、今年五月三日に塩浦に到着した。生還した者た

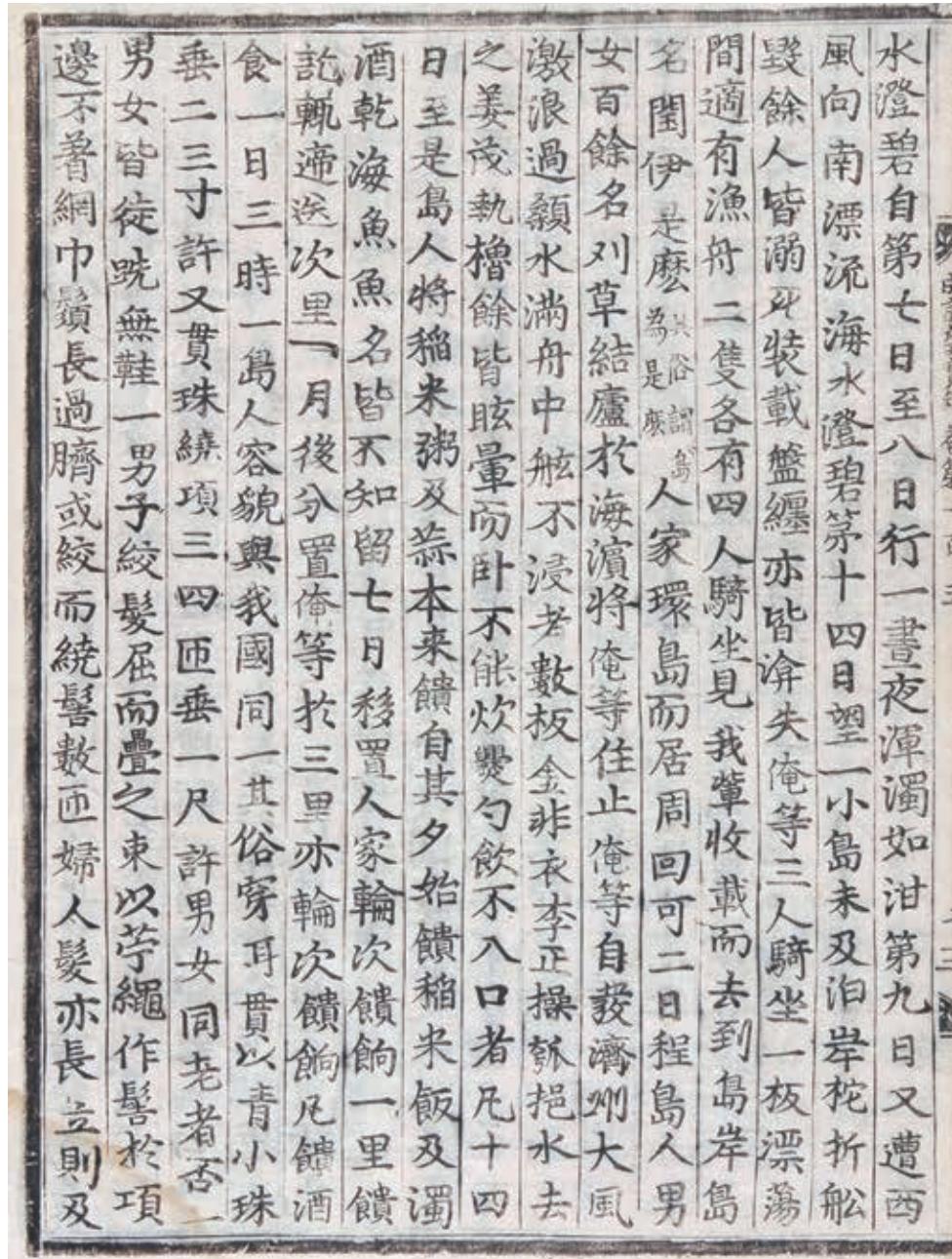
ちの家にこのことを知らせ、物故した玄世守、李青密、金得山、梁成石伊、曹恵奉の家にはそれぞれ恤典（見舞いと葬礼）を施せ。

『成宗大王実録』卷 105 段落 01 ~ 03



『成宗大王実録』卷 105 成宗 10 (1479) 年 6 月 10 日

『成宗大王実録』卷 105 段落 03 ~ 24



01 成宗十年六月乙未 (十日)、済州島の漂流民の金非衣・姜茂・李
チヨン 正の三人が、琉球国から帰ってきました。彼らが歴訪した諸島の風
俗は、はなはだ奇異なものでした。上様は、弘文館（記録係）に聞き
書きの作成を命じられました。その言うところは次のようにでした。

02 われわれは、丁酉 (1477) の年の二月一日に、^{ヒヨンセソ}玄世修・
キムドウクサン イチヨンミン ヤンソンドル チョギボン
金得山・李清敏・梁成突・曹貴奉とともに、(上様に) 進上する蜜柑を
受け取って一艘の船に乗り、海に乗り出して、楸子島まで来たところで、たちまち東風が激しく吹いて、西の方に向かって漂流しました。

03 出発から六日目までは、海の水は青く澄んでいましたが、七日
目と八日目の一昼夜は、米のとぎ汁のように濁りました。

04 九日目にまた西風にあって、こんどは南に向かって漂流し、海
の水は青く澄みました。

05 十四日目、遠くに小島が望まれましたが、岸に停泊しないうちに、
かじ 舵は折れ、船が壊れてわれわれ以外の者はみな溺死し、載っていた装
備も全部沈んでなくなりました。

06 われわれ三人は一枚の板にまたがって漂っていましたところ、
たまたま漁師の舟が二隻、それぞれに四人が乗り込んでいたのが、わ
れわれをみつけて、舟に乗せて島の岸まで連れて行ってくれました。

07 島の名前は「閨伊是磨 (ウンイシマ)」です。そこの言葉では島
のことをシマというのです。

08 人家は島のあちこちにありました。周囲は歩いて二日程でした。
島の人たちは男女あわせて百人あまりです。

09 島の人たちは、草を刈って浜に小屋を作って、われわれをそこ
に住まわせてくれました。

10 われわれが、済州島を出発してからというもの、大風が吹いて

波も頭を越えるほど高く、海水が船中に満ちて、上から数枚の板のところまで水に浸かりました。

11 金非衣と李正はひょうたんの器で水を搔い出しました。姜茂は櫓をつかんでいました。

12 他の乗組員はみな、船酔いで倒れていきましたので、食事の用意ができませんでした。

13 何も口に入れないこと、十四日間でした。

14 ここで、島の人たちは、米の粥と蒜をふるまってくれました。

15 その夕方から、はじめて米のご飯と濁り酒と海の魚の干したものを食べさせてくれました。

16 魚の名前は知らないものばかりです。

17 七日たったら、人家に移してそこに置いてくれました。

18 家ごとに順番に食べさせてくれました。ひとつの里で、全部の家が食べさせたら、次の里に順番に送ってくれました。

19 ひと月がたった後、われわれを三つの里に分けて置き、また順ぐりに、食べさせてくれました。

20 酒と食べものが出るのは、一日に三回です。

21 一つ、島の人の容貌は我が国と同じです。

22 一つ、島の風習で、耳たぶに穴を開け、青い小さな珠が、二、三寸ばかり垂れています。また、珠をつないで頭のてっぺんに三、四回まわして、一尺ほど垂らしています。これは男女ともに同じですが、老人はしていません。

23 一つ、男女ともみな裸足で、履物はありません。

24 一つ、男女とも髪をしばって、幾重かにこれを折りたたんでいます。束ねるには苧麻のひもを使い、頭の上でまとめます。網のよう

な被り物は着けません。

『成宗大王実録』卷 105 段落 24～34

跟短者及膝不作髻環統頭上橫拂木梳於鬢一無金鼎匙筋盤
孟磁瓦器堺土作鼎曝日乾之熏以薪火炊飯五六日輒破裂
一專用稻米雖有稟不喜種一飯盛以竹筍搏而為丸如拳大
無食案用小木几各置人前每食時一婦人主筍分之人一
丸先置木葉於掌中以飯塊加葉上而食之其木葉如蓮葉焉
一丸盡又分一丸以三丸為度能食者不計丸數隨盡隨給一無
鹽醬以海水和菜作羹器用瓠子或剗木為之一酒有濁而無
清債米於水使女爵而為糜釀之於木桶不用麴蘖多飲然後微
醉酌用瓢子凡飲時人持一瓢或飲或止隨量而飲無酬酢之
禮能飲者又添爵焉其酒甚淡釀後三四日便熟久則酸不用
薦一肴用乾魚或臘切鮮魚為膾加蒜菜焉一或漬米搏於步
臼壇而為餅如梭大裹梭葉以藁束之烹食之一其名率作一
室無房與戶牖前面稍軒舉後面簷垂地蓋用茅無瓦外無
藩籬寢用木床無衾褥藉用蒲席所居室前別立樓庫以貯
收之禾一俗無冠帶暑則或用梭葉作笠狀如我國僧笠一無

あごひげは長くて、へそを過ぎるほどです。耳のきわの髪も、しばって何重にも巻いています。女の髪もまた長く、立てばくるぶしまであります。短い人でも膝まであります。まげにしないで、髪を頭上でまとめて横から木のかんざしを挿します。

25 一つ、(金属の) 釜や鍋、匙と箸、皿や椀、磁器や陶器の器はありません。土をこねて鍋を作り、天日にさらして乾かし、藁の火でくすべます。しかし、五、六日ご飯を炊くと、たちまち破裂してしまいます。

26 一つ、もっぱらお米を食べています。粟もあるのですが、あまり栽培するのが好きではありません。

27 一つ、ご飯は竹のかごに盛ります。それを手で丸めます。拳ほどの大きさです。足のあるお膳はなくて、小さな木の台をそれぞれの人の前に置きます。毎食ごとに、ひとりの婦人がご飯の竹かごの面倒をみて、ご飯を分けます。一人についておむすびがひとつです。まず木の葉を掌の上に置いて、おむすびを葉の上にのせてこれを食べます。その木の葉は蓮の葉に似ています。おむすびが一つなくなればまた一つもらいます。三つ食べれば限度ですが、よく食べる人は、おむすびがなくなれば、食べる端からいくつでももらいます。

28 一つ、塩や醤(醤油や味噌のようなもの)はありません。海水を野菜と合わせて煮物を作ります。器はひょうたんまたは木をくりぬいたものを使います。

29 一つ、濁り酒がありますが清酒はありません。米を水に漬け、女に噛ませて濃い粥にして、これを木の桶に入れて醸します。麹や麦芽を使いません。たくさん飲むとその後でかすかに酔います。酌むにはひょうたんを使います。飲む時は、ひとりひとりがひとつのひょう

たんを持って、飲んだり休んだりして好きなだけ飲みます。ついだりつぎ返したりという礼儀はありません。よく飲む者にはまた酒の容器を勧めます。たいへん弱い酒です。醸して三、四日たつと美味しくなります。長くおけば酸っぱくなります。酒こしは使いません。

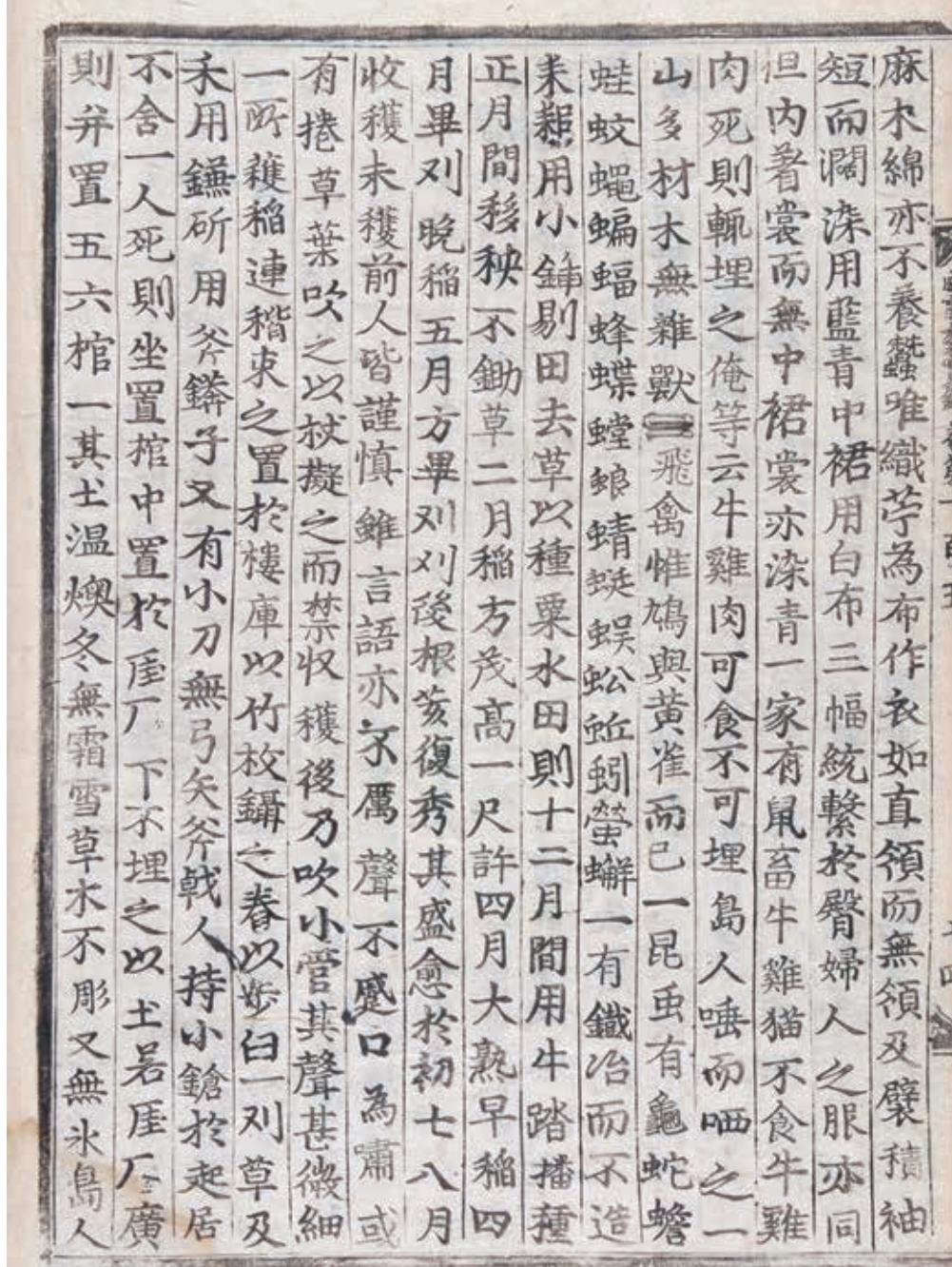
30 一つ、肴は乾魚を用います。または鮮魚をうすく切ってなますにします。これに蒜(大蒜の類)や野菜を加えます。

31 一つ、米を水に漬けて臼で搗いて、たたいて餅にしますが、その大きさはビロウ(の実か)ほどです。ビロウの葉に包んで、藁でしばって、煮て食べます。

32 一つ、家は、だいたい一室だけです。家の後ろ側には、戸や窓はありません。前面はやや軒が拳がり、後面はひさしが地面まで垂れています。屋根は茅ぶきです。瓦はありません。家の外に垣根はありません。寝る時は木の床を使います。夜具はありません。床にはガマを編んだ敷物をしきます。居室の前に別に庫を建てて、そこに収穫した穀物を貯えます。

33 一つ、冠を被ったり帯をしめたりする習慣はありません。暑いときはビロウの葉で笠を作ることもあります。その形は、我が国の僧の笠に似ています。

34 一つ、麻や木綿はありません。蚕も養いません。ただ苧麻を織って布にしています。作る着物は貫頭衣のようです。ただし、襟やひだは付いていません。袖が短くてゆったりしています。染めるには藍の青を使います。ふんどしは、白布三枚を使って、まとめてお尻の所でしばります。婦人の服もまた同じです。ただし腰巻きを着けて、ふんどしはしません。腰巻きもまた同じく青く染めます。



ねずみ
35 一つ、家には鼠がいます。牛と鶏と猫を飼っています。牛や鶏の肉を食べません。死んだらそのまま埋めてしまいます。われわれが「牛や鶏の肉は食べるのが良い。埋めちゃだめだ」と申したら、島の人は、唾を吐いてあざ笑いました。

36 一つ、山には材木が多く、雑獸はいません。

37 一つ、飛ぶ鳥はただ鳩と黄雀だけです。

38 一つ、虫には、亀・蛇・ひきがえる・蛙・蚊・こうもり・蜂・蝶・かまきり・とんぼ・むかで・みみず・蛍・蟹がいます。

39 一つ、鉄の鍛冶がいます。しかし、すきを造らずに、小さな金串を使って畑を削って除草し、粟を植えます。水田は、十二月中に、牛を使って踏ませて播種します。正月中に、田植えをします。鋤での除草をしません。二月には稻はよく茂って、高さ一尺ほどになります。四月には、たいへん熟します。早い稻は四月に刈り終わり、晩い稻も五月に刈り終わります。刈った後の根株から成長して、その盛んなことはもとの稻にまさるほどです。これは七、八月に収穫になります。収穫の前には、人はみな謹慎します。話す時も声をはりあげませんし、口をすばめて口笛を吹くこともしません。草の葉を巻いて吹くような人がいたら、杖をさしあてて禁止します。収穫（開始）の後は小さな縦笛を吹きますが、その声ははなはだ微細です。

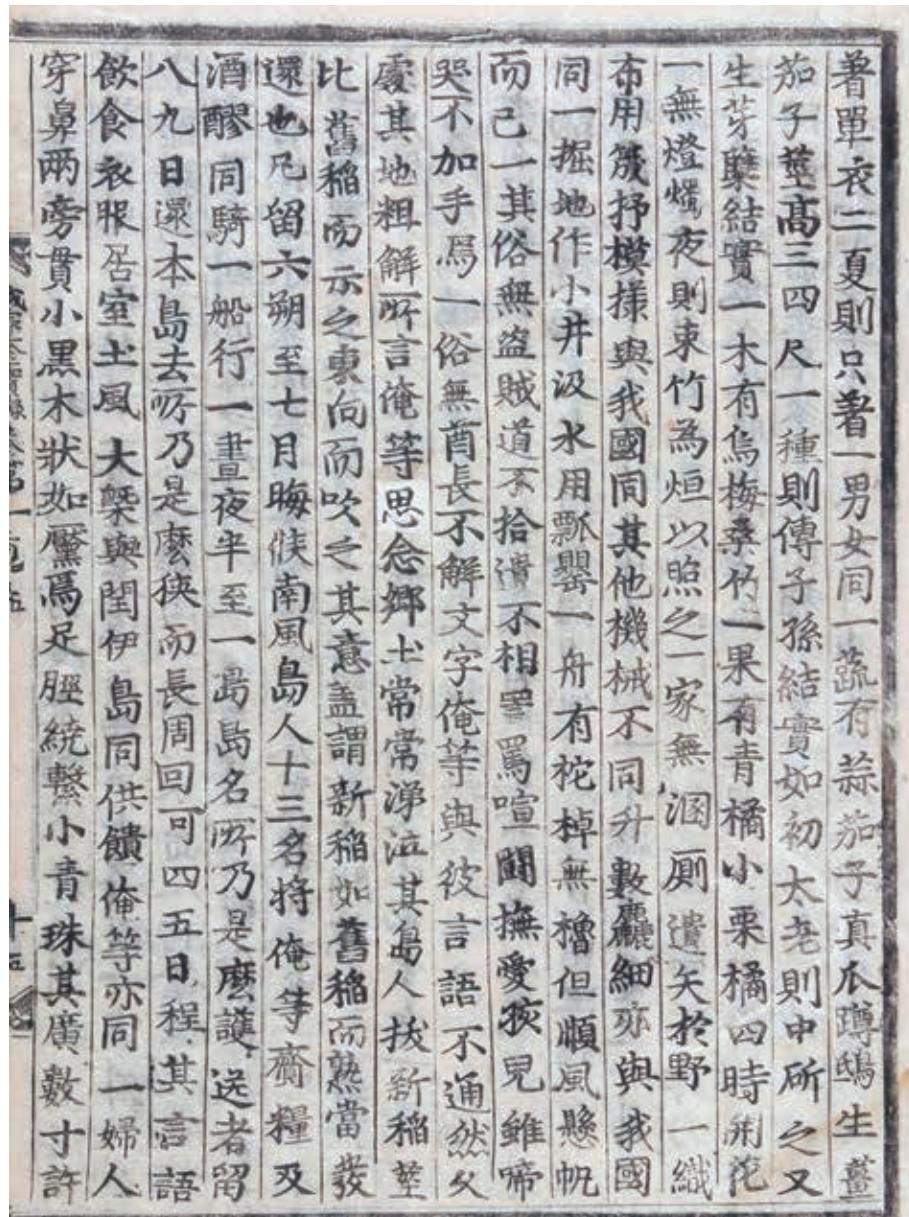
40 一つ、収穫した稻は藁でしばって束ね、庫に置きます。短い竹のこき箸で脱穀し、（精米は）臼で搗きます。

41 一つ、草や穀物を刈るには鎌を使い、木を切るときは斧やちようなを使います。また小刀はありますが、弓矢やほこはありません。島の人は、小さな槍をいつも身の回りにおいています。

42 一つ、人が死んだら棺の中に座らせて、崖の下のくぼみに置き、

土で埋めることをしません。もし崖の下のくぼみが広ければ、五つか六つ棺を並べて置きます。

『成宗大王実録』卷 105 段落 43～54



43 一つ、その土地は温暖で、冬も霜や雪はありません。草木が冬枯れすることもなく、また氷もありません。(寒ければ) 島の人は、ひとえの服二枚を着ます。夏はただ一枚です。これは男女ともに同じです。

44 一つ、野菜には、蒜・茄子・真瓜・里芋 (ハスイモを含むか)・生姜があります。茄子は茎の高さが三、四尺です。一度植えると子や孫が生えて、初めと同じように結実します。老成したら中ほどで切ってやると、そこからまた芽が出て結実します。

45 一つ、木には烏梅 (リュウキュウコクタンか)・桑・竹があります。

46 一つ、果樹には青橘 (シークワーサー)・小栗 (シイ) があります。橘は年中開花しています。

47 一つ、灯火やろうそくはありません。夜は竹を束ねてたいまつにして、これで照らします。

48 一つ、家に便所がありません。野原でそのまましています。

49 一つ、布を織るには経糸を通す^{おさ}簇と緯糸を通す^ひ抒を使います。その形は我が国と同じです。^{はた}機の形は同じではありません。糸の数の粗い細かいの違いもまた我が国と同じです。

50 一つ、地面を掘って小さい井戸を作ります。水を汲むには大きな丸いひょうたんを使います。

51 一つ、舟には舵と棹がありますが櫓はありません。風に従って帆をかけるだけです。

52 一つ、島の習俗として盗賊がいません。道に落ちているものを拾いません。互いにののしりあったり喧嘩したりしません。幼な子をいつくしんで、たとえ泣いても誰も叩いたりしません。

53 一つ、習俗として酋長がいません。文字を理解しません。われ

われは、彼らと言葉が通じませんでした。けれども長くこの地に暮らすうちに、言われたことはだいたい判るようになりました。われわれは、郷土を思つていつも涙を流していました。その島の人が、新しい稻の茎を抜いて古い稻と並べて、東に向かってこれを吹いてみせました。その意味はたぶん「新しい稻が、古い稻のように熟したら、その時は島を発つて故郷に帰れる」ということだらうと思いました。

54 全部で六ヶ月この島にいました。南風を待つて、七月の最後の日に島の人たち十三名がわれわれを連れ、食料と酒を持って一隻の舟に乗り、一昼夜半の旅をしてひとつの島に到着しました。島の名前は、所乃是麿（ソネシマ）です。護送の人たちは、八、九日留まって、自分の島に帰つて行きました。（後略）

『成宗大王実録』成宗 10 (1479) 年 6 月 20 日

55 漂流民金非衣ら三人を済州に送還しました。労役を二年間免除し、半年分の食料と海を渡る食料、ひだのない長衣と腰回りにひだのある長衣の、それぞれ綿入れと綿なしを、めいめいに与えることを命じました。

解説

500 年以上昔の、済州島民の金非衣らの語りはいかがでしたか。

違う役人による二度の聞き書きでは、本人の名前が金非乙介または金非衣になつてゐたり、地名に当てられた漢字がみんな違うことや、日数・人數の記憶の揺れなど、歴史の記録にもさまざまなバリエーションがあることがわかります。

非衣「衣にあらず」といった名前をつける親はなさそうな気もします。ソウル大学校の名誉教授で、本書にメッセージをいただいた全京秀先生は、もともと「金裴」ではなかつたか、と考えておられます。「裴」なら、韓国の姓にもある漢字です。おそらく三人の中では年長で、字も書けた金裴が、役人に「どんな字か書いてみろ」と言われて書いた一文字の漢字「裴」が、長く見えたために、あるいは二字の「非衣」に、または三字の「非乙介」と書き留められてしまったのではという想像です。

今回は、詳しく紹介できませんが、済州島民の大旅行のうち、与那国島はそのはじめの半年に過ぎません。その後のようすは、第 4 部冒頭の地図をみていただくとあらましがわかります。西表島の祖納村は、今も「スネシマ」と呼ばれていますが、15 世紀にすでに「そねしま」と聞こえたという連續性が読み取れます。与那国島で、牛や鶏を食べようとして果たせなかつた済州島民は、犬と槍でしとめられた猪を見て、期待をつのらせますが「狩人以外が食べたら二度と捕れなくなるから」と説明されて、またも食べられませんでした。

その後の旅から、いくつか興味深い点を抜き出しておきます。漂流民たちは、西表島から南の波照間島に送られました。石垣島には寄つていません。あと 21 年後の西暦 1500 年に石垣島南部の大浜を拠点とするオヤケアカハチが、宮古と首里に対して戦いを挑むことになる前夜の八重山には、すでにこの章のはじめの地図に見るような親琉球王国と反琉球王国という

少なくとも二つの勢力の対立があったのではないかと推定できます。もしも済州島民が、石垣島南部か西表島東部に漂着していれば、琉球王国を通っての帰還はできず、この記録もわれわれに残されなかつたかもしれません。

その琉球王国に至った三人の漂流民は、尚真王がまだ少年であった頃の姿を見ています。実権をにぎって「女主」として君臨していたのは、王母の「おぎやか」でした。

通訳を介した役人の間に、自分たちは税としての米を積んだ船を出して漂流した、と相談して嘘の答えをしています。済州島が、朝鮮半島で唯一の柑橘類の実る場所であることを外国に隠そうとしたのでしょう。海が荒れる冬に実る柑橘が特産の済州人に漂流が多かったのも、金得山が飢え死にしても積荷のみかんに手をつけなかつたのも、理由のことでした。

帰還の経路について、王側は「日本人性悪、不可保」つまり、日本人は性悪なので、おまえたちを預けたら何をされるかわからない、と福州から北京へ向かう道を勧めます。11年間も続いた応仁の乱が1477年に終わつたところですから、日本人の心もすさんでいたのでしょう。日本人の朝鮮語通訳が「そんな遠い道じゃなくて、日本を通って帰りたいとお願ひしてごらん」というので、申し出たところ、たまたま琉球国に滞在中の博多の商人・新伊四郎が責任をもつて連れて行くと言つてくれました。新伊は、このたびも、その後も琉球国の使節に任命されます。漂流民をつれ帰ることは、当時横行していた、ありもしない「久辺国」などからの偽の外交使節ではないことを示す、何よりの証明になったのでした。琉球王は、道中の食料や衣服などを潤沢に支給してくれました。八重山の新城島を過ぎてからひどくなつた金非衣の頭痛にも、南蛮の薬酒を下さつたりしました。

博多の町は、大内氏と少弐氏の合戦があった直後で、負けた少弐氏の兵の首があちこちにさらしてありました。敗れた兵たちが対馬の島影にかくれて海賊行為をすることを恐れて、半年ぐらい出発ができませんでした。

塩浦^{ヨンボ}を経てようやく漢城^{ハンソン}（今日のソウル）に到着した新伊四郎の一行が、朝鮮の成宗王にもたらした琉球王の国書は、すでに亡くなつた尚徳王の名義のものだったのでした。当時の琉球国内にも、派閥争いがあり、博多の商人の国際貿易の利権とも複雑なつながりがあつて、そのなかで外交文書の偽造もされていたことがわかります。

そして、朝鮮王が、死んだ5人の済州島の家族に、公務災害の被害者としての公式の見舞いと、生きてもどつた三人が、しっかり休んで生活再建ができるように、2年間の労役免除と、半年間の食料、りっぱな衣服を支給するように命令する文書で、この漂流事件の記録は終わりを告げました。

わたしたちは、済州島への初めての訪問で、この記録の主人公である金非衣らのことが、現地ではすっかり忘れられていることを知りました。やや落胆して帰国した翌日の2007年3月12日、本書の著者であるN子さんから「これまで話さなかつたけれど、どこから来たか分からぬ三人の男についての、とっても不思議な言い伝えがあつて……」という電話を受け取つたとき、受話器を握りしめた手が白くなるほどの緊張で、その言葉を記録しました（本書冒頭の著者のあいさつ参照）。それから、2年半、このような歴史記録があることを全く知るよしもなかつたN子さんの記憶を妨げないように、わたしたちはひたすら聞き取りにつとめ、誘導尋問になることを恐れて『朝鮮王朝実録』の内容を話すことはありませんでした。

三人の生存者と五人の死亡者からなる漂流民は、当時の与那国島の人たちの知らなかつた東北アジアからの「他所の人」《ふがぬとう》でした。そして、この本の表紙に取り上げた、山みかんの白い花がホームシックの涙につながる唯一の場所・済州島こそが、彼らの故郷であったことが、こうして確実に言えるようになったのです。ほとんど裸で漂着した人たちの、立膝をして座る姿や、魚の発酵食品への強い執着、ブランコ遊びなど、済州島らしい文化の香りが随所にするではありませんか。

（安渓遊地）

第4部 伝承と記録の対話



2009年2月21日 済州島漂流民の五人の死者の慰靈祭 ©全京秀

『朝鮮王朝実録』と《ふがぬとう》伝承の対比

ここでは、第1部で紹介した、与那国島の《ふがぬとう》伝承が、『朝鮮王朝実録』中の成宗大王10年5月と6月の記録の中の濟州島民の漂流についての聞き書きとどのように対比できるかを、見てていきましょう。卷104の記事は、アルファベットで、卷105の記事は、01から55までの二桁の数字で段落を示し《ふがぬとう》伝承の方は、第1部の節ごとの番号(1.1など)の形で示します。『実録』の段落番号が飛んでいるものも、次の節で検討するものがあります。

表 I 歴史記録と口頭伝承の対比

『成宗大王実録』(本書第3部)	合致度	《ふがぬとう》伝承(本書第1部)
柑子を積んで濟州島を出た(a, 01)	○	故郷は蜜柑の花咲く島(2.4)
金非衣ら3人がウンイ島で救助(a, 01)	○	3人を与那国島と西表島との間の海で救助(1.3)
乗組員の5人は遭難死(a, 01)	○	5人の仲間が死んだ(2.2)
3人で板に跨がり漂流(06)	○	3人で板につかり漂流(1.3)
漁をする2艘の舟に救われる(06)	○	魚捕りの4艘のうち2艘に乗せた(1.3)
浜に草で仮小屋を建てて収容(09)	△	始めは海に近い民家に泊めた(1.7)
14日間絶食(13)	○	よほど空腹のようになら(1.6)
米の飯と干魚と濁酒(15)	○	米粟芋の飯と干魚と野菜の汁と口噛み酒(1.6)
魚の名は知らぬものばかり(16)	○	捕れた魚を珍しそうに見るのが珍しい(3.5)
7日後から人家に移動(17)	○	めいめいの小屋を1日半で建てた(1.7)
1月後3人を3つの集落に分ける(19)	○	それぞれ別に住まわせるがお互いに近い(1.7)
島の人の容貌は我らと同じ(21)	○	漂流民の容貌は同じ。体に毛がない(1.4)
耳と頭の飾りに青い珠玉(22)	○	青い珠の首飾りをして舞う(1.4)
島の人は髪とあごひげが長い(24)	○	罰されたように髪が短い。ひげもない(1.4)
土鍋は5、6日で破裂(25)	○	土鍋がすぐ割れると文句を言う(3.9)
米が主食、粟は植えることを好まず(26)	○	米が主食。粟は好物だが大切な交易品(1.6)
丸いおむすびを葉の上に(27)	○	葉の上のおむすび(2.3)
塩や醤がなく海水で味付け(28)	△	海水も使うが希少な味噌《ぎんす》あり(3.13)

表 I 歴史記録と口頭伝承の対比（続き）

『成宗大王実録』（本書第3部）	合致度	《ふがぬとう》伝承（本書第1部）
米の口噛み酒をよく飲む（29）	◎	碎け米の口噛み酒を日常的に作る（1.6）
ヤシの葉に包んだ米の餅（31）	○	米の餅と粟の団子（5.2）
苧麻と藍染の貫頭衣（32）	◎	《ぶー》苧と植物染めの貫頭衣（1.9）
家に鼠あり。猫・牛・鶏を飼う（35）	◎	鼠は食用。猫・牛・鶏を飼う（1.5; 3.17）
豚・猪についての記述なし（35）	X	《あぐわ》豚の高い鳴き声に驚く（3.17）
牛・鶏を食べようと言つて嘲笑される（35）	◎	牛・鶏を食べようとしたが禁止（3.17）
飛ぶ鳥は鳩と黄雀のみ（36）	○	野鳥を捕まえて食べようとして罰される（3.17）
亀・蛇など14種類の「虫」がいる（38）	◎	神聖なもの以外は食用。次節で個別に検討
稻は1度植えて2度収穫（39）	◎	新しい稻株と再出芽の稻株を区別できた（5.2）
収穫前の謹慎と笛の禁止（39）	◎	収穫前に竹笛を吹いたので取り上げた（5.1）
鎌・斧・ちょうどなあり（41）	○	大きな鎌があった（5.1）
死者は崖の下に置く（42）	◎	死者は崖の下の《だや》に寝かせる（5.3）
野菜は蒜・茄子・瓜など（44）	△	栽培よりも野生のものが中心（3.4）
烏梅・桑・竹あり（45）	◎	漂流民は桑・竹をよく利用（4.4）
青橘・小栗あり。橘は四時花咲く（46）	◎	山みかんの花に泣き崩れる（2.4）
便所なし。もっぱら野糞（48）	△	便所はあった。野外排泄の作法を説明できず（3.3）
筈と抒は同じだが機は違う（49）	○	家族以外に機を見せるることは禁忌（4.1）
盜賊・喧嘩なし、幼児を叩かない（52）	◎	互いに睦み合い、幼児を大切にする（4.5）
その俗、酋長なし（53）	△	政治・宗教・資源利用全般を司る《むらぬうや》（1.5; 2.2）
「朝鮮國」の文字を理解しない（d, 54）	◎	地面に絵を描き横に意味不明の模様を書いて説明（3.2）
古い稻と新しい稻を並べて出発を予告（54）	◎	新旧の稻株・飯・餅を区別できた（5.2）
島の人13名と一船に乗り組む（e, 54）	◎	《むらぬうや》が乗組の13名を選定して出発（6.3）
7月晦日 島を出発（54）	◎	8月1日 旅人の安着祈願の粟団子3つを吊るす（7.3）
所乃 ^{ソネ} 是 ^{シマ} 磨 ^マ （西表島祖納）に護送（e, 54）	◎	与那国島民の一人が西表島で再会（6.4）

著者との対話

これから、著者の和歌嵐香N子さんに編者がお話をうかがいながら、読者の疑問に答えていただこうと思います。実際は、手紙・メール・電話・録音等でいただいた情報ですが、前作『いのち湧く島・与那国』にならって、時空を超えた架空座談会の記録としてまとめておきます。

——（編者）まず、与那国島の『ふがぬとう』伝承が、1479年旧暦2月15日から7月30日までの、濟州島漂流民の滞在そのものであることを確認しておきたいと思います。N子さんは、わたしたちが申し上げるまで、この伝承が史実であることをご存知でしたか？

（N子）いいえ、全然。明治生まれの島のお年寄りは『かいだ』（絵文字）で書いた絵手紙をわたしに運ばせることはあっても、字の読み書きができる人がほとんどで、そんな外国の歴史のことなんか知っている人はいませんでした。わたし自身も、目が弱くて学校で黒板の字を読むことができず、毎朝母に教科書を朗読してもらって、耳から丸暗記して、学校に行っていたような具合でした。

——表1で見たように、一致点はあまりに多いんですけど、決定的なのは、次の6点です。1 三人の男が当時の与那国島の人たちの知らなかつた場所（朝鮮半島）から漂流。2 五人が遭難死。3 故郷はみかんの花咲く島（濟州島）。4 旅立ちは7月末。5 与那国島の人13人が護送。6 その後西表島で再会。してみると、500年以上にわたって与那国島の人たちは、濟州島からの三人の5か月半の滞在を語り継いできたということです。いったい何が与那国島の人たちにとってそれほど大事だったのでしょうか？

わたしとしては、とてもすばらしい人たちで、兄弟のちぎりまで結んだ『ふがぬとう』が、どことも知れない故郷にちゃんと帰り着いて、親の胸に抱かれたということを確かめるまでは決して忘れてはならない、という

昔の人の願いが重く肩に載っていたということしかわかりません。話しているお年寄りは楽しそうだったり、涙ぐんだりしておられました。その中に、今の時代にも大切な与那国島らしさの二つの柱がある、ということは、この本のはじめのあいさつに書かせてもらいました。

伝承がN子さんに集中したわけ

——それにもしても、いったいどういう状況で、言葉だけでなく、漂流民が地面に描いた絵まで具体的に再現できるほどの、これだけ膨大な伝承を記憶できたんですか？ もう少し詳しく教えていただけませんか。この本には、N子さんのおじいさんや、二人のおばあさんを含む、30人を越える話者の似顔絵が入っていますが、これでもごく一部だとか。

まず、時代背景があると思います。わたしが生まれて高校を卒業するまでの間（1954年3月～1972年3月）は、戦後の混乱とアメリカから日本への施政権返還の直前という時期で、これまで通りでは暮らしが成り立たないから必死にならなくちゃいけない時代でした。父母の年代の人たちは生活を守るために必死で働くなくてはならないというめぐり合わせで、古い伝承を時間をかけて受け取るということができた人が少なかったんですね。例えば、母は中学が済んですぐに台湾に渡り、17歳の時に台湾で美容師の資格をとって、戦後与那国に帰ってきてすぐ美容師を開業。わたしが知っている母は、朝から夜まで美容院の仕事で忙しく、家族と過ごす時間がほとんどなかったんです。そんな激動の時代に、わたしがまだ2歳半の時から始めて、お年寄りたちがわたしひとりに大昔の『ふがぬとう』の話を叩き込んだわけは二つ考えられると思っています。

ひとつは、わたしは体が弱かったので、赤ん坊の時から祖父の懷に入れられていきました。祖父も祖母も忙しいときは、他のお年寄りに、わたしは預けられました。ですから、いつもお年寄りのおしゃべりの輪の内にいま

した。まだ話せない頃から話を聞かされていました。大人に言われたときに「うん」とか「いや」とかのしぐさは小さくても充分できました。わたしが4歳の時、祖父が亡くなるまで懐の中でした。祖母の部屋で中学を卒業するまで寝起きして、祖母のするとおりに毎日をすごしていました。ですから、大正生まれの母は、わたしに「あんたは明治の人だねえ」といつも言っていました。

二つ目は、わたしは体が弱くて、ショッちゅう死んでは蘇生しました。父が、泣きながら「親に棺桶を作らせるのはこれっきりにしろよ」と言ったことがあります。こんな子には何か大きな荷物を担がせておけば、それを担ぎ続けるためにとりあえず死ぬのを忘れて、なんとか生き延びるだらうというのが、与那国島の考え方で、それにそってわたしだけがいろいろと担がされていました。

——それにしても、何十人の明治生まれの人たちが語っていた話を、大正生まれ以後の島の人たちが全く知らないというのは不思議です。

わたしが小学4、5年生になって、ようやく《ふがぬとう》の伝説の意味が少しずつわかるようになってきた頃から、島のお年寄りたちは何かの祝いの席で、わたしにこの《ふがぬとう》のある場面を、集まったみなさんの前で、ひとりで話したり歌ったりするということをさせました。いつもお年寄りが応援してくれるところ、ひとりですから、つかえずに話せるように練習したものです。本番で「誰がそんな話を教えたか」といった突っ込みが入ることもありましたが、名前を覚えるのが苦手なわたしは「みんな墓の中」としか答えられませんでした。

——この本では、ほんの少ししか収録できませんでしたけれど《ふがぬとう》伝承のゆっくりした語りは、そうやって鍛えられたものだったんですね。でも、お年寄りの語りは、当然、全部あのむずかしい《どうなんむぬい》(与那国語)ですよね？

いやいや、フツー語(標準語)がわたしにはむずかしい。復帰前の沖縄では、方言禁止運動がひどくなつて、与那国島でも学校で方言を使わせないということになってきました。わたしは、こんな島いやだと思って、家出ならぬ「島出」をすることにして黙って定期船に乗りました。そうしたら、石垣島の港に教育委員会なんかのおじさんたちが待ち構えていて、わたしはあっけなく捕まつて送還されました。船長が「あの子のようすは変だ」と気づいて、連絡したんです。その時に、おばあさんたちの一人が、わたしにこう言いました。「島を出てもいいんだけど、持つものはちゃんと持ったのかい？」これは《ふがぬとう》の伝承と、彼らが身につけていた《あっぱ》の作り方を間違なくすっかり覚えたのか、という意味でした。そんなにして、わたしに教え込んだ人たちがだんだんあちらの世界に行って、とうとう、最後のお一人になつてしまつたとき、わたしはちょうど数え年の49歳で、そのおばあさんと父の葬儀で顔を合わせました。そうしたら「これ以上《ふがぬとう》の話をして、あんたを苦しめるのはやめようね」と言われました。泣いてもおかしくないざわざわした場でしたから良かったようなものですけれど、なぜかそのおばあさんとわたしは、手をとりあっていっぱい涙を流しました。

——何年前とは知らずに、実は500年以上語り続けてきた《ふがぬとう》伝承の、最後のバトンを手離すのですから、手渡す方にも手渡される方にも重い瞬間ですね。彼らが唯一物質として島に残した、ぼろぼろになった腰巻きの《あっぱ》は、《むらぬうや》が大切に保管したと思いますが、ほとんど裸だった彼らが与那国島に残した「文化の力」を、ひしひしと感じますね。それにしても長年のあなたの封印が解けて、わたしたちがこうして《ふがぬとう》のお話を受け取れたのは不思議なめぐりあわせでした。わたしたちが、金非衣さんらの足跡を求めて初めて済州島を訪ねたのは、2007年の2月でした。どこの港から蜜柑をのせた船を出しだろう

か、とか考えながら島をめぐりましたが、三人の漂流民のお墓も、記念碑も、博物館での一片の記述さえなくて、濟州島では、学者以外にはすっかり忘れられていることを知りました。N子さんが、この本の冒頭のあいさつに書いておられる電話は、帰国の翌朝にかかってきたのでした。《ふがぬとう》伝承の長年の封印が解けて、N子さんにお会いしてから17年目のわたしたちがそれを聞かせてもらうために、濟州島まで行ってくる必要があったのかもしれません。

貴子ねえねえと安渓さんに会ってから、お二人を標的に選んで、わたしの与那国島の記憶たちをぽいぽいなんでもかんでも投げつけることにしてきましたけれど、父母の世代からは「また面白いお話をしらえたの？いいね」と言われたり「口から出まかせの嘘ばっかり」と罵られたり殴られたりしたことが心の傷になっていたらしく《ふがぬとう》のことは言い出せませんでした。安渓さんたちには、たくさんお話ししてきたけれど、何十人のお年寄りがそれぞれにもっていた言い伝えは膨大すぎて、とてもいい尽くせるものじゃないです。

——あなたのよく言う「未完のパズル」ですね。それでは、15世紀後半という昔に、濟州島からの漂流民が語った与那国島での経験（本書第3部）と《ふがぬとう》伝承というジグソーパズルのまだまだ隠れているピースの発掘につとめたいと思います。

漂流記にそった質問と答え

——実録・巻105の段落01から段落05までは、与那国島に到着する前のことで、今日の常識なら島では何も起こらないはずですが、異変を察知した猫や鶏が大騒ぎしていました（第1部1.2）。そういう前触れを感じるということは、島では普通にあることなんでしょうか？

ごくあたりまえにあります。島では猫に「あんたは人間に警報を出すの

が仕事よ」と言い聞かせておくと、本当に必要なときには、人間の言葉を少ししゃべるぐらいのことはできます。わたしは、きたこという猫に生命を4回助けられました（『いのち湧く島・与那国』参照）。

——絵には出てきませんが《ふがぬとう》の頃に装身具（段落22）はありましたか？

はい。貝とか魚の骨とかをつないだものが多かった。骨にも、いいのとそうでないのがあるそうです。それと、小さい青い珠をつなげて首飾りのようにしたものとかです。わたしが小学校四年生のとき、祖母が「欲しかったらあげる」と箱にいっぱい入ったのを見せてくれました。《ふがぬとう》の頃からあるものだと、祖母は言いました。箱ごとくれようとしたが《かくまい》（保管）がたいへんそうだと思って「いらない」といって、もらいました。ひとつひとつの珠は、まち針の頭よりは大きく、パチンコの玉より小さいぐらい。箱の中には、青っぽいの茶色っぽいの、白っぽいのがありました。その時見たのはあまり長くなかったけれど、もっと長いのがあると祖母は言っていました。これを箱から出して使うのは、年に一回だけでした。8月1日に軒に木を挿して栗の団子を3つぶら下げたら、そのあとに祖母が祈りの舞いをします。その時に、青い珠をつないだものを首のまわりにかけていました。母は《たま》とはいわずに、別の名前で呼んでいましたが忘れました。「触ったらだめ」と言わせて、祖母の舞いが終わるまで指定席に座らされていました。はっきりとは覚えていなければ、耳にかける飾りもありましたよ。

——漂流民たちは、与那国島のあと西表島に行って、女の人が鼻の両側に木の飾りを付けていて、それがほくろのようだというのを見たとあります。与那国島では書いてないのですが、当時、鼻飾りはありましたか？

ありました。鼻の飾り《きばな》を外す話が面白い。ある晩のこと《ふがぬとう》と楽しくゲームをしていた若者たち。《み‘てい》（口噛み酒）

を少しづつ飲みながら遊ぶんですが、一口飲んだら、歌をうたって踊りもする、それが終わったらまた一口飲む。そして、お酒が最後まで残った者が勝ち、というやり方で《ふがぬとう》の方が勝ったらしいです。その時、夜が早く終わってしまうのを惜しんだ若者の一人が「そうだ！ 夜を長くしてもらうお祈りをしよう」といって、鼻につけていた飾りをはずして祈ることにしたそうです。それがなかなかはずれないんで、みんなで手伝って押さえつけてやっとはずしました。中身はたったそれだけなのに、なんかとても楽しそうに、一時間もかかって話してくれるじいちゃんがいました。この話は、ばあちゃんよりもじいちゃんの方が上手でしたね。

——次です。^は履き物（段落 23）はありましたか。

普段ははだしだけど、敬意を表するときには履きました。だから《ンミムヌ》（履く物の意味）という言葉がありました。《ち》とも呼んで、わらじ以前の草の履物です。

——《ふがぬとう》が来た当時の髪型（段落 24）はどうだったのでしょう？ だいたいは長いままだけれど、髪を束ねる時は、1 尺ほどでしばってから束ねます。女人がそうするのは、赤ちゃんを産む時。それから男女とも稻刈りの束を並べる時。まちがって自分の髪の毛を切ったら大変です。それから、寝る時も束ねる習慣でした。かんざしはありました。その当時は、毎月ひとつ新しいかんざしを作るという習慣でした。だれかに作ってあげるという場合もありました。材料は竹でも木でも何でもいいんです。わたしは、いまでも自分のために作っています。

——実録の漂流記には、もっぱら米を食べて、粟を植えるのを好まない（段落 26）と書かれています。

粟がきらいというのは、全くの誤解です（笑）。当時の島の人たちは粟が大好きで、できたらいっぱい食べたいけれど、台湾との交易とか、西表島から木材をもらおうとすると、そのためには粟が大事な交易品だったの

です。だから、我慢してあまり食べないようにしていただけです。それが、そんなふうに見えたんじゃないかしら。交易品としては、そのほかには、もち米と《ふがぬとう》の時代の後には、《ばす》（芭蕉）の糸を西表島ほかの島々との物々交換の品目のひとつとして、後の時代には、塩とか、今はやりの塩麹のようなものが、台湾の南の島々との遠距離の交易には、かさばらないで重宝されました。

——食事の方法（段落 27）は？ 葉っぱにのせる以外に、茶碗にいれたり、お盆にのせたりするようなのはありましたか？

ありました。竹で編んだランチョンマットみたいなものにのせていました。大久保のじいちゃんが、いつもわたしのために作ってくれていました。ほかのじいちゃんたちが、大久保のじいちゃんに《ふがぬとう》の頃のものをといって注文して作ってもらっていました。「こんなの作って頂戴」といって作ってもらいました。みんなでああじゃない、こうじゃないと注文していました。大きさは、学校に持つていってた帳面（A5 サイズ）と同じ大きさ。大きいのは画板と同じ。これは、お祝いのごちそうや、お祈りの時の供物を並べる時に使います。

——ごはんは、おむすびを葉っぱにのせた絵（第 1 部 2.3）がありますが、それ以外にはどうやって？

お椀にも入れました。上等とされるお椀は《うぶださ》（ホルトノキ）を彫って作ったものでした。《ふがぬとう》には、これに入れてあげました。わたしが小学生の時、学校の近くの石底のじいちゃんが《くよー》（おいでね）と言って、わたしが帰りがけに家の前を通ったら、さっそく見つけて、このお茶碗にご飯を出してくれて、それを全部食べないとけなかったんです。おじいちゃんのお椀は大きいから食が細いわたしにはなかなか食べきれなくて苦しかった。その家の前を通って行きたくなかったけど、わたしが通るのをちゃんと見てて呼び止めるんです。

——実録の漂流記では味付けは海水だけで、塩も醤（ひしお）の類もない（段落28）となっていますが《ふがぬとう》に食べさせたという与那国島の味噌はどんなでしたか？

米味噌があって、貴重なものでした。糠をいれたのもあります。糠団子を作って、直火で焼いて食べていました。《ふがぬとう》の頃、お米は基本は玄米で食べていたと思いますが、少しは糠もできます。

——食べ物を入れる木の鉢やひょうたん等（段落28）はありましたか？

お椀の話はしましたが、それ以外にも、コウイカの甲とか、セマルハコガメの甲羅とか、身の回りのいろんなものに盛りました。

——口噛み酒は、ずいぶん日常的につくり、最後の船旅でも持たせて飲んでいたようですね（段落29と54）。

はい。わたしは今でも自分で作って飲むことがあります。『いのち湧く島・与那国』で描きましたが、祈りのための口噛み酒を、わずか7歳のわたし一人が、四日もかかって泣きながら噛んでいました。この他にも祈りの時に、《み‘てい》は供物として並べていました。

——それは大変でしたねえ。ところで、刺し身はありましたか（段落30）？ あったなら《ふがぬとう》は刺し身を食べましたか？

今まで言う刺し身というのは食べませんでした。そのかわり《ふがぬとう》がやってみせたように「ちりちり」して食べました。魚の身をこそげて、叩いたらとろとろになる、それに味ぱっぱとしたらこんなにおいしいものはない、ということになりました。おいしいから、それ以来、島の人は生魚をよく食べるようになったんだそうです。《ふがぬとう》は《つありかんだ》（ヘクソカズラ）の実を乾かして粉にして食べていたというから、香辛料だったんでしょう。わたしも話で聞いたとおりに作って食べてみたらおいしくもなんともないものでした。

——粟の団子は絵に出てきますが（第2部7.3）、米の餅（段落31）は

ありましたか？

ありました。お米の餅は、話では、お米を2日間水につけて、それを、水を切って、よく沸騰したお湯を作つてそこにのせます。一度に熱くして、蒸して、これを叩いていくと餅になります。今の水につけて粉にして、それから蒸すのとは加熱する順序が違います。話の通りに作つてみたら、時間がたつたら、びたーっとなる。これでも餅というんだな、と思ってこそげて食べました。若い子にあげたら、これは餅じゃない、といって食べませんでした。

（編注、漂流記の段落31のつくり方は、現在の沖縄で主流の、生米でしおとぎを作つて葉っぱに包んで加熱というやり方と同じです。）

——家の中で敷物（段落32）は？ 寝る時の布団みたいなのは？

寝る時の敷物は、天気にもよるけれど《まーに》（クロツグ）の葉っぱをしいて、その上に《くばぬは》（ビロウの葉）、そのうえに《ばすぬは》（芭蕉の葉）をたくさん切つて、敷いてその上に寝ました。長さは身長より少し長めです。夏でも肌寒い日があるけれど、そんなときは《ばすぬは》の下に藁を敷くと温かい。これらは、寝るためのもの。気持ちいいよ、あなたがたもやってごらん。

——クバ笠（段落33）はもうありましたか？

《ふがぬとう》の話の中には出てこないのでわかりません。

——バショウが使えると《ふがぬとう》に教えてもらう以前の着物の材料は？（段落34）

《ふー》と呼んでいました。今は苧麻ちよまを指しますが、それは、琉球王国の支配を受けるようになってからです。琉球王国は、税としての布を織らせるために、長い纖維が取れる苧麻の栽培品種を普及させたのです。《ふがぬとう》の頃、苧麻はまだ与那国島に来ていません。野生のカラムシから短い纖維を取つて糸を作つていました。材料が足りない時は、他の島と

の物々交換で入手してそれを織っていたと目差ヲナリ氏に習いました。

——当時の着物の作り方（段落 34）は？

細長い布を織って、それを 3 枚縫い合わせて幅広の布にした貫頭衣みたいな着物。基本、袖はないけれど、たまに大きい袖のものを着る人が、年寄りなどにいました。物を教えたりする人《むらぬうや》は、そういう袖のあるのを着ていました。海水につかって漂流して生きるには、かなり体力がいるでしょう？ 三人の男たちが見つかったときには、下着がもうぼろぼろ。《ふがぬとう》たちにはまず、上下に別れた衣服を作つてあげました。みんなと同じのも作ったけれど、上下分かれたのがよかったみたい。

——《くどうるずみ》（泥染め）以外の染め方は？

染め物は《くどうるずみ》以外に、《いちたらい》（石のたらい）にいろんな葉っぱを入れて叩いて放つておいたら染められることができます。

——当時、藍染（段落 34）はありましたか？

藍そのものは、うちのばあちゃんは小浜島からのもの（マメ科のインドアイ）を使っていました。だから、新しいんじやないかと言う人もいました。でも、染織の上手な二人のばあちゃんに言わせれば《ふがぬとう》の頃から山に藍はあったそうです。タデアイに似てタデアイでないものを茎も全部入れて、他のものもまぜて染めたと聞きました。粘土を入れてもやりました。くくる糸があれば、それも使って模様をつくりました。

——漂流記には出てきませんが、当時のぬい針の材料は何でしたか？

魚の骨でした。

——家には鼠がいました（段落 35）。

料理して食べるよう《ふがぬとう》にあげたのに、食べものと思わず逃がしてしまったので、島の人は残ったおつゆをあげたのでしたが、そこに鼠の肉のかけらが入っていたことに《ふがぬとう》は気づかなかったかもしれません。

——死んだ牛を食べたらいいのに、といったらつばを吐いて笑われた（段落 35）と漂流記にありますが、鶏も食べていませんでしたね。他の鳥（段落 37）はどうだったでしょう？

《すみはとう》（セキレイの類）という甲高い声で鳴く鳥がいます。それを捕まえようとして罠を作つて、しかも隠れてかけているのがみつかって、二重に悪いことをしたというので《むらぬうや》に、きびしく「めんめこ」されて（叱られて）《ふがぬとう》が泣いていたという話があります。みんなで、お願ひだからといって《むらぬうや》にあやまって、引き渡してもらって、帰ってきたことがありました。絵のところに載せた話では、お年寄りに叱られたとなっています（第一部 3.17）。

——漂流記の段落 38 に載つてある 14 種類の「虫」たちのことを順番におうかがいしたいと思います。

亀《だまみ》（セマルハコガメ）。これは、みんなで捕まえて、鍋で炊いてみんなで分けて食べました。カエルは、できるだけ足が太ったのがおいしいと教えたら、喜んでおじぎをして、カエルをおいしく蒸した料理を作つて島の人たちに食べさせてくれました。

——漂流記には、蟾、つまりヒキガエルが蛙と区別して書いてあります（段落 38）、2 種類いたのでしょうか？

わたしが調べた時には、与那国島のカエルには 4 種類いました。島の言葉では《あたひた》または《あうだ》といいますが、どちらが古い言い方が知りません。伝承では、南方からわたってきたのもいるし、台湾からのものいるそうです。わたしが経験した時代には、カエルは 1 種類だけを食用にしていました。南方から来たという話のある種類も、昔は焼いて食べていたらしいです。

——牛みたいに鳴くカエル（ウシガエル）はいましたか？

それは、もともと与那国島にはいなくて、石垣島からつれてきたもので

す。モーモーガエルと呼んでいました。これは、食べたことないです。

——では続いてムカデからお願ひします。

ムカデ。干して6匹ずつ束ねておいて食べました。わたしは捕まえたらすぐに、かまどのおきであぶって食べました。

ヘビ。食べます。食べてはいけない黒くて細くて短い種類のヘビもありました。

蚊。《かだんく》(ボウフラ)を食べてきました。おつゆに入れたら口にぶつんとあたります。何にもないよりいいでしょ。

ハエ。今のみんながきらう、うじ虫のときに、熱湯に一度に放り込んで、すぐって食べます。

《くぶや》(コウモリ)。神さまだから食べません。大きいのも小さいのもどっちも食べません。

ハチ。はちみつがありました。島では巣を割って食べるんですが《ふがぬとう》は、いやだと言って食べませんでした。すぐって蜂蜜を食べさせた話は伝わっていません。

《はびる》(蝶)。食べません。神さまのお使いだから。

《いさとうまい》(カマキリ)。食べるけれど、おいしくはありません。《ふがぬとう》がいた時の、大豊作の稲刈りの前に《むらぬうや》が《いさとうまい》の鎌もかりなくちゃ、と言ったことがお話にでてきます。

——卵はけっこう大きくて食べられそうですが？

カマキリの卵を食べるとは聞いたことありません。経験もないです。

トンボ。島の人が直火に焼いて食べているところに《ふがぬとう》が来た話があります。「食べるか？」と聞いたら、じいっと見るだけで食べなかつたそうです。

ミミズ。干して少しづつ出汁のようにしていました。カタツムリと同じやり方をしていたわけです。

ホタル。食べたとは聞いたことないです。《ふがぬとう》の話の中には出てきません。

カニ。食べました。

——実録の漂流記には出てきませんが、カタツムリ、トカゲ、別の島で書いてある「臭虫」つまりカメムシは？ ヤシガニも書いてありませんが。

《ふがぬとう》の頃は、カタツムリがたくさんいたので、煮たり焼いたりして食べていました。一度にとってもいい限度を《むらぬうや》は定めてみんなに守らせていました。それによるとカタツムリは片手に山盛まで。あるとき《ふがぬとう》がカタツムリをどっさりとっているのがわかりました。《ふがぬとう》たちを取り調べてみたら、乾燥させておいて、すこしづつ出汁にすると聞いて《むらぬうや》は「そういうやり方ならいいだろう」として罰を与えませんでした。それからは島の人たちも、干しておいて少しづつ使うという《ふがぬとう》のやり方をまねるようになりました。ヤシガニは食べさせませんでした。理由はお話にはでてきませんが《むらぬううや》の判断で、食べさせていけない、ということにしました。ヤシガニは、冬に、ソテツやクワズイモなどの人間にとて毒のあるものを食べています。そんなヤシガニを食べたわたしの知り合いの女の人が、ひどい吐き戻しに苦しんだことがあります。トカゲは《ふがぬとう》よりも前の時代には、いっぱいいたそうです。干ばつで食べ物がなくなる時に備えて、いつもは食べないようにしていたと聞きました。カメムシは《ふがぬとう》の話にはでてきませんが、わたしの時代には、串に刺して、かまどのおきの火であぶって食べていました。あまり焦がすと風味がなくなると、やや生焼けを好む人たちも、わたしの知る限りでは4人いました。

——《ふがぬとう》がいた頃の与那国島の動物の利用の仕方は《むらぬうや》が決めていたんですね。

はい。《ふがぬとう》がこっそり罠をかけて獲って、泣くほど叱られた

鳥のほかに、とってはいけないものは、親指と人差し指を広げた長さ（五寸）より小さいトカゲ、親指と人差し指で作る輪より細いヘビです。《ふがぬとう》には食べさせませんでしたが、ヤシガニは、片手の爪だけをもらって放してやります。爪が再生中のヤシガニに出会ったら、両手をあわせてお礼を言うきまりでした。一匹まるごとを食べていいのは、みんなで食べるときだけです。

——ごくおおざっぱに言ってしまうと、漂流民が「虫」として述べた生き物のほとんど（段落44）は《ふがぬとう》が実際に食べたものだったんですね。

はい。ほとんどは《ふがぬとう》の時代からわたしの時代まで食べてきたものです。わたしが行事のための口噛み酒を、わたし一人で4日間噛んでいましたが、わたしの体力のために、父母はわたしの好きなおいしい食べ物を、祖母は精のつくものを準備してくれました。その中身は、乾燥させておいたムカデ・亀の足・《いらぶ》（エラブウミヘビ）・トカゲ等を蒸した汁とハチミツ・ラード・亜麻仁油などでした。

——ウミヘビも毒がありますよね。なるほど、ソテツやクワズイモもそうでしたけれど、有毒またはおそらく資源保護などの理由で《むらぬうや》が《ふがぬとう》には食べさせないように命じた生き物は、漂流記にも載らなかつたんですね！ 他に《ふがぬとう》のお話に出てこないのはどんな生き物がありましたか？

その頃の与那国島では鴨がいなかつたのかなと思います。お話に出てきません。

——家には猫と鶏が飼われていました（段落35）。

《ふがぬとう》の物語では、彼らが到着する前から、猫と鶏はどちらもとても大切な役割を果たしています。彼らの出発の前に《むらぬうや》はこう言いきかせました。「これから旅に出て、波風にあってくぐり抜けて

行くから、ここで一生分心を込めて祈っていきなさい。《まゆんがなち》（猫神さま）には、お礼を言って敬いの心を忘れないようにしなさい。足りないぶんはわたしが与那国島で祈ってあげるから。」それを聞いて《ふがぬとう》たちは、涙を流して祈りました。三人は朝まで一晩中祈ったので、ぐつたりして水を飲むのがやっとぐらいた疲れました。それで《むらぬうや》は、翌朝は若者をひとりひとりにつけて世話をさせました。回復には何日もかかったといいます。昔の人は、心からの祈りをそれほど真剣にしたのです。わたし自身もよくそういう状態になり、その時はまわりの人たちが介護してくれましたから、譜られている《ふがぬとう》たちのそのようすは実感できます。

——木を切る斧はありましたか？（段落39） 当時は石の道具や木の農具が主だったと思われるんですが、実録の漂流記には出てきません。

斧はあったけれど、だいたいは金属ではなくて石の斧でした。ただ、砥石を《ふがぬとう》にあげたら、とても感謝されたとあります。まだ使っていない《ばがとういち》（若砥石）と、使われて滑らかになって真ん中が少しくぼんでいる《ういとういち》（老砥石）を《ふがぬとう》にあげたら、とても喜ばれたといいますから、金属の刃物はあったのでしょうか。

——《ふがぬとう》伝承には、はじめての食事（第1部1.6）に《うん‘てい》（芋）がでてきますが、これはサツマイモか、山芋（西表島で大きなものを見た）か、それとも里芋（段落44）でしょうか？

サツマイモじゃないです。あれは割と新しい。昔話に出てくるのは、99%山芋か里芋のたぐいで、主に山芋でした。

——《ふがぬとう》は、口笛を吹きましたか？ その頃笛はありましたか？（段落39）

口笛のことは《ふがぬとう》の話の中では聞いたことがありません。笛は《ふがぬとう》自身が吹いていました。メロディが出せないピーピー笛

です。竹のひと節を五寸ほどに切った笛ですが、自分で作っていました。稲刈りの前に、吹いて遊んでいたので、大人がおいでおいでして、いっぱい作ってあったのを一本残らず没収しました。《ふがぬとう》は「なんで? なんで?」と騒ぎました。すごく怒ってもみ合いになりました。《ふがぬとう》たちはとっても賢い分、怒り方もはげしい。いつもは静かですが、なんかの拍子に爆発的に怒るんです。稲刈り前には静かにすることが大事なことを、いろいろ説明して「これを落とした音がカランとするだけでもいけないんだよ」ということを、やっとわかってもらいました。稲刈りが終わってから、みんなでわいわい食べたり飲んだりしているところへ、もういいよ、と束ねてあるピーピー笛を返したら「何を今頃!」とばかりにまた怒ったので、なだめて最終的には仲よくなりました。こうした逸話からみると《ふがぬとう》たちは、島の人たちに遠慮して生活していたわけではなく、おおらかに堂々と暮らしていたことがうかがえます。だから、激しい感情が爆発することもあったのでしょうか。

——稲刈りの時、与那国島の人は小管を吹く（段落39）とあります。これは大正時代まで西表島の、稲刈り前の謹慎解除を告げる合図として、五寸弱のダンチクのひと節を吹き鳴らした習慣とみごとに対応しています。

与那国島では稲刈り前の謹慎を《ふがぬとう》が守ったとはありますが、笛を吹く習慣があったかどうかは、語られていません。

——お米の脱穀具（段落40）は、西表島でも使われてきた掌に入るほどの小さい竹2本を藁しべでつないだ《たきんだ》（竹のこき箸）でしたか？

そうです。あれは、わたしも小学校まで使っていました。《ふがぬとう》は、この長いものとか、いろんなサイズを作ってみました。それまで穂をひとつひとつ挟むというやりかただったのを、穂を下に置いて、上から二人がかりで竹の棒を押さえつけてもうひとりが力まかせにひっぱるというやり方もやってみました。穂はずしは、それまでは、貝で作った《イン》

という道具でやっていたのを、竹ではさんだり、こそげたりするやり方を《ふがぬとう》が教えたと語られています。

——着物が一枚だけだと、南の島といっても冬は寒いでしょう（段落43）？

冬は重ねて着ます。4枚着たら大丈夫あったかですよ。

——ニンニクのような臭いのある野草に《ぬひる》（ノビル、段落14と段落30）があったわけですが、そのほかに野菜はあったでしょうか？ 例えば茄子、瓜、生姜（段落44）は？

これらは新しい。《ふがぬとう》の時には野草がいっぱいありました。畑で栽培する野菜については《ふがぬとう》の話の中では聞いていません。

——《むだ》（里芋、段落44）は出でますか？

はい。《むだ》はひんぱんに出てきます。炊いて火が通ってから皮を剥いて食べていました。

——ソテツと《びぐい》（クワズイモ）は、漂流記に登場しません。

本文にも書きましたが、ソテツと《びぐい》（クワズイモ）は毒があるから食べさせていません。《ひゃんだま》（和名不詳）というのもあって、これもおいしくないので、教えてないです。ちゃんと処理しないと、体中が痒くなる。《ひゃん》（鳥の羽じらみ）がついたみたいに、体中気持ち悪く気が狂いそうになります。ちゃんと処理したら食べられるけれど、わたしは一回これにあたったことがあります。

——ずいきを食べるハスイモ（段落44）はありましたか？ 里芋みたいで、芋が太らず、全体に白っぽくて茎を食べる。あくは少ない野菜です。

《ふがぬとう》の話に出てきます。島では、味をつけなくて、海の水にちょっとつけてから、食べてましたが《ふがぬとう》が何かの汁につけ食べてたら、それがうまくて、真似をしてその食べ方が流行りました。わたしらの時代には、茎をばしゃばしゃ刈り取って、葉を切り落として東

にして持って帰っていました。サツマイモを炊く時に、芋の上においた葛のそのまた上に置いて蒸して、その皮を剥いて食べました。

——椎の実（段落 46）を食べる話は？

あります。これは生でも食べますが、蒸して食べます。蒸したあと噛んで酒もつくりました。お米の酒よりおいしいのができます。

——夜の明かり（段落 47）は？

わかりません。ただ、海の貝をいっぱい集めて叩いて割って並べてその照り返しを明かりにしたという話はあります。わたしもこれをやってみたけれど、そろばんとかが見えるほどの明るさはありません。

——あなたの画文集の1冊目の『いのち湧く島・与那国』に、洞窟での安産祈願に竹のたいまつ（段落 47）をつけて祈るという場面がありましたが、あれは特別ですか？

生竹を燃やす明かりが《ふがぬとう》の時代からあったかどうかは聞いていません。わたしが知っている頃にはすでにたいまつを作ってもらっていました。たいまつにもいろいろあります。父が鉄のパイプで作ってくれたのは、布に灯油がしませてあって、安定して燃えて明るいけれど、すぐには消えなくて危険でした。すぐ消える火でないとたいまつから火事になる恐れがあります。

——舟に帆（段落 51）をかけましたか？

聞いたことがないです。《ふがぬとう》の時に帆があったかなかったかわかりません。

——島には盗賊がなく、ののしつたり喧嘩したりしない、おさな子をいつくしんで、泣いても叩いたりしない（段落 52）と漂流記にはあります。

それこそが、与那国島に大昔から伝わる本来のあり方だと思います。《ふがぬとう》がいた頃は、島にひとりの《むらぬうや》（村の親）がいて、その下には手足となって動く《きやどうないぬうや》（隣近所の親）や、若

い世代の《きやどうないぬうばに》（隣近所の長姉）という人たちが、盗みや喧嘩が起こらないように、だれひとり飢えたり、ひとりぼっちになりましたないように、子どもたちが大切にされるように、常日頃から心を配っていました。

——それでも時には衝突もあったでしょう？

ある晩のこと《ふがぬとう》のひとりの足をひどく踏んで逃げた者がいたので、追いかけてみたら、ちがう島からの人だったという話があります。

——与那国島での漂流記の最後のあたり（段落 53）に「その俗、酋長なし」となっています。これについてはいかでしよう？ 与那国島には「女酋長」というスナックもありましたが。

濟州島の人たちが「酋長」という言葉で何をイメージしていたかわからませんから、なんともいえません。

——漂流民が与那国島から西表島に送られたことは、漂流記（段落 54）でも《ふがぬとう》伝承でも一致していますが、西表島でなくて台湾に送るという選択肢はなかったんでしょうか？

もちろん《むらぬうや》は《ふがぬとう》たちを食料の豊富な台湾に送ることも考えました。でも《ふがぬとう》のいる間に、台湾人がやってきて《ふがぬとう》の食べ物や持ち物を奪おうとした話があったでしょう。それも、殺してから取ろうとしました（第一部 4.7）。だから《むらぬうや》は、台湾に送っても、殺そうとされるかもしれない。そうなったら、こちらからは舟ひとつに乗れるだけの人数しかいないのだから、とても守りきれないと判断して、台湾行きの案を探らないことにしたのだと聞かされました。海上の道は、台湾に行く方が、わりあい楽で、むしろ与那国島と西表島の間は《うはやばがりぬなん》（親子別れの波）などと呼ばれる、怖い波がたつところがあって大変だったみたいです。

——「聞き返したり、質問したりするな」とおばあちゃんからきびしく

言われていたそうですから、黙って聞いておられたでしょうけれど、子ども心に「このお話は本当かな？」と思うようなものはあったでしょうか？

ありました。みんなの話と一人だけ違うような場合です。例えば、あるおばあさんは、自分の母親は《ふがぬとう》の子どもだと言いました。いつのことかわからないほどの大昔という話なのに、いくらなんでも時代が新しすぎるなあ、と思いました。それから「素麺投げ」を拾う話の時に《ふがぬとう》が参加していっしょに楽しんだという人もいましたけど、そんな大昔に、素麺があったかしら、とふと思ったことがあります。

——素麺ですか！ 実録の漂流民の語りでは、当時の与那国島には麦がないし、波照間島や新城島でも、麦は大麦だったらしいので、そこと交易しても素麺を吃るのは難しいでしょうね。ところで、棟上げの餅まきならよく聞きますが「素麺投げ」っていったい何ですか？

わたしの時代には、年に2回ぐらい「素麺投げ」がありました。面白くないことが続いたようなときに、誰かが言い出して、数人で組をつくり、金を出し合って素麺をたくさん買ってきてひそかに準備します。予告なしに、当日になって一番大きい鍋にお湯を沸かして、そこに素麺をどんどん入れて、まだ生茹での状態で、箸でつまんで投げます。飛んでいった素麺は、地面に落ちたり、壁に張り付いたり、木に引っかかったりするわけ。聞きつけた人々は、走って行って、土や砂利がまじった生茹での素麺を競争でひろって、それを洗って茹でて食べました。素麺は、当時の大ごちそうなので、畠に行ってたりして留守だった人は残念というわけです。馬に乗って大急ぎで知らせに行ったら、ぬかるみに足をとられた馬が倒れて、乗っていた人も投げ出されて、馬の足が折れてしまいました。結局、素麺だけじゃなくて、馬のお肉の鍋をみんなで食べることになりました。

——それは大変。馬は、漂流記にも《ふがぬとう》伝承にも出てきませんね（段落35）。

馬や山羊は《ふがぬとう》の時代の与那国島にはまだいません。豚はいたと言われています。《ふがぬとう》たちが豚を見て、今の豚と違う《あぐわ》（アグー豚）という種類の鳴き声の大きさと高さにすごく驚いたので、島の人が説明したとお話には出てきます。

——最後に《ふがぬとう》の人たちは、与那国島の人たちにとって、どんな存在であったのかを簡単にまとめていただけませんか。

《ふがぬとう》の三人は道を歩く時も山を歩く時も、ずば抜けて足が速くて、島のなかを見ないところはありませんでした。子どものような好奇心をもって、なんでも興味を持って知りたがるし、納得するまで聞いた。そうやって島の人たちと仲良くなっていました。つまり三人は、生活を島人に頼りっぱなしじゃなかった。いい意味で何でも見たがったし、なまけることがない、手抜きしない人たちでした。自分たちからみれば、知らないとか、違うとかがいっぱいだったけれど、それをまるごと自分の中に取り入れる能力がすごかったんですね。

——ほとんど文化人類学者のフィールドワークですね。ずいぶん詳しくて、絵にも描けない場面や背景の理解が深まりました。

こうしてみると、本気・本音の優しさを、お互いにいっぱいもっていたんだなあ、と思います。

——本当にそうですね。以下は、この伝承を授業で聞いた大学生の感想です。「この伝承の話を聞いて、私も《ふがぬとう》の人たちが島の文化や規則を大切に守ったように、島の人たちが見知らぬ《ふがぬとう》を歓迎し、新しい文化を受け入れ尊敬したように、人や文化、そこにある思いや歴史に尊敬の気持ちをもって接することのできる人間になりたいと思った。この伝承は《ふがぬとう》、島の人々が今の私たちに一番大切なことを教えてくれる、そんな力を持っているのではないかと感じる。」

編者のことば

1477年2月、濟州島の船が嵐にまきこまれ、2週間の漂流の後に、与那国島に漂着、金非衣ら三人が救助された。島で五か月半を暮らした三人は、西表島に送られ、次々に護送されて沖縄島・博多・対馬を経て1479年5月帰国を果たす。伊波普猷の紹介以来、研究者にはよく知られた、宮古・八重山の島々の暮らしが、文字に記録されて初めて世界に知られることになった漂流記である。

それから530年後の2007年3月になって、この漂流事件に対応する《ふがぬとう》伝承が与那国島に残されていることをわたしたちは知った。それ以後、およそ18年をかけて、ただ一人残った伝承者のN子さんと励ましあいながら記憶のよきさましと記録につとめた。その結果が、ここにお示しする画文集である。

お年寄りの語りをそのままに受け止めて記憶するという、2歳半から受けた訓練。祖母と同じ部屋で暮らしながら、伝承の技術や祈りや歌を自らの生活の中で、試し、味わい、検証する日々。「食べごと」にかかわるシャーマンであった《むとう‘かはまい》になることを期待されて、たくさんの高齢者から受けた特訓のひとつが、この《ふがぬとう》伝承と、彼らが身につけていた《あっぱ》の作り方を習得することだった。

ここで語られているのは、言葉の通じない島びとどうしの平和的な出会いと人間的な交流である。島という限られた自然の資源を絶やさないよう細心の注意を払って生きていた与那国島の民にもたらされた、文字をもつ文化を生きる者たちからの衝撃波の記録である。与那国島ではその後の幾多の戦乱や激動の時代を経てなおこの幸せな出会いを語り続けてきた。絶海の孤島と思われがちな15世紀の与那国島が台湾や南の島々との人的交流をもっていたことなど、文献史料から垣間見られた民衆の歴史の詳細が明らかになってくる。

文字を持たなかつた民のおどろくべき記憶力で、残された文字記録と詳細に対照できるという奇跡によって、通常は日付をもたない口頭伝承が、「《ふがぬとう》がいた時」すなわち、1477年2月15日から7月30日という日付をもつたのである。

この伝承の《ふがぬとう》以外の主要登場人物は、政治と宗教と資源管理のリーダーシップをとっていた《むらぬうや》と呼ばれるひとりの女性であった。この時代には、琉球王の政治権力も、その姉妹で「のろ組織」の頂点に立つ聞得大君の宗教的権威もまだ与那国島に及んではいない。

1500年、石垣島のオヤケアカハチが、首里・宮古の連合軍に敗れ、1522年には与那国島も琉球王国に服属したという。戦いにやぶれて、島独自の協治（ガバナンス）のかなめであった《むらぬうや》を失った与那国島の人たちは、島外からの統治のもとに置かれた。島が独自のガバナンスを享受していた時代から、はるかに離れた琉球王国からの支配を受け、台湾やそれ以南の島々との交易も禁止されるという激変を迎えたのである。

しかし、安全に島に渡ることもままならない石垣島の役人たちに、与那国島の季節のめぐりやそれにあった祈りなどが指示できるわけがなかつた。そのために、食料生産に必要な指示を与えるガバナンスまでが失われようとしたと考えられる。季節のめぐりを読み取り、それにあわせて農業を中心とする島の生活や祈りを担当するリーダーがいなければ生活は成り立たない。その必要に迫られて創りだされたのが、元来《むらぬうや》の担つていた役割のうち琉球王国の政治（と宗教）に連なるものを除いた《むとう‘かはまい》という新たな役割だった、と考えてみてはどうだろうか。

この本の著者のN子さんは、幼い時から、将来は《むとう‘かはまい》の仕事を担うべき娘という、高齢者の期待を受けて育てられた（本シリーズの画文集1『いのち湧く島・与那国』のメインテーマ）。本人にはその意図を伝えることなく、激しいオンザジョブトレーニングを授けていた。

N子さん自身は、自分が《むとう‘かはまい》だと思ったことは一度もない、という。しかし、そのカリキュラムの中に《ふがぬとう》伝承を記憶し、彼らが身につけていた下帯の《あっぱ》の作り方とともに、次の世代に手渡すことという課題も含まれていたのだと考えられる。

なぜ、この《ふがぬとう》伝承が、N子さんひとりに集中的に注ぎ込まれたのかについては、著者自身が語っている。激動する時代の背景と、彼女自身の消え去りそうな健康がその理由だった。しかし、漂流民とすごした日々についてのこまごました記憶を、500年以上にわたって語り続けた与那国島の島民の動機は何だったのだろうか。漂流民たちとともに暮らして、その賢さや人間としての優しさに心底惚れ込んだ与那国島の人たちが、彼らが無事ふるさとに帰り着き、親の胸に抱かれたという報せを待ち続けたからだ、とN子さんは語る。そうであろう。

それにしても、なぜ、この伝承の存在が、1893（明治26）年の笹森儀助以来たびたび訪れ続けた島外の探検家や地域研究者たちに知られることなく、在地の郷土史家が紹介することもなく、N子さんによってわたしたちが気づかされた2007年3月まで経過してしまったのだろうか。

N子さんが叩き込まれた伝承の中には「旅からの人には絶対に話すな」というものがしばしばあった。《ふがぬとう》伝承については、島内でそれを披露する場が時々設けられたと、N子さんは語っている。しかし、《あっぱ》を身に着けた姿だけは「その姿を人に見せてはならぬ」という厳しい禁忌があった。

琉球王国の支配と、後には薩摩藩からの間接支配を受けるようになった時に、与那国島の人びとは《ふがぬとう》伝承を密かに語り継ぐことにしたと思われる。あの頃は、王様の役人も、《‘か》と呼ばれる王国が任命する神女もいなかった。内政・外交から規範を破った者への処罰にいたるまで、《むらぬうや》が、島の暮らしを仕切っていた時代を雄弁に物語る伝

承として、《ふがぬとう》の物語は、島内限定で語り継がれたのだと思われる。また《あっぱ》を身に着けた姿を絶対に人目にさらすな、という禁止の理由をN子さんにきいても、その説明は得られなかった。《ふがぬとう》と過ごした日々の記憶を《あっぱ》を身に着けて伝承するという習慣は、女たちだけの秘密でもあったらしい。

いずれにしても、《ふがぬとう》伝承を語り継ぐことは、西表島や宮古島からの侵略や、琉球王朝と日本政府の支配を受けた与那国島の民にとって、台湾やその南の島々とも豊かな交流を保っていた誇らしい自主独立の時代の島の暮らしの詳細を伝える抵抗運動でもあったのではないか。

与那国島の《ふがぬとう》伝承は、世界記憶遺産級の詳細さをもって、南琉球の島々の環境ガバナンスが激変する前の一時期を活写している。「サンゴのある島で、限りある島の多様な資源を、いかにして持続的に利用し、気候変動に耐えるレジリエンス（しなやかさ）を獲得して未来につなげていくか。」これは、伝統的環境知識（TEK）を活かしたこの課題への解決策を模索する、地球研LINKAGEプロジェクトの目標のひとつである。本書の価値は、まさにその挑戦への得難い材料を、島びとが自らアートによって表現するという形で与えてくれることにある。

本書の作成にあたっては、総合地球環境学研究所LINKAGEプロジェクトと、琉球大学の高橋そよさん（同プロジェクト生活基盤ユニット長）の支援を受けた。版下作成にあたっては、当山昌直さん（同プロジェクト）と福田美智子さん（オフィスカモテトップス）に助けていただいた。全京秀先生（ソウル大学校名誉教授）は、韓国語での推薦の辞を作成してくださいました。これらのすべての方と機関に感謝するとともに、和歌嵐香N子さんを支えてくださっている、北海道をはじめとする全国の有縁のみなさまとともに、N子さんとご家族、この稀有の伝承をはぐくんだ与那国島のみなさんの長年のご努力をたたえたいと思う。

著者のプロフィール

和歌嵐香 N 子（わからんこ・えぬこ）

1954 年 3 月、与那国島に生まれる。

幼い頃虚弱だったため祖父の懷に入れられて育つ。作物や家畜の世話を担う中で、4 歳ごろから絵を書き始めた。高齢者からの伝承を聞きながら大きくなり、小学校では方言使用が禁止されることに抵抗して与那国語を使い続けた。中学生以来のライフワークは、「人はいかに植物に支えられてきたか」の実践研究。

石垣島の高校を経て、成人後は那覇・四国・京都・佐賀などを遍歴。やがて島にもどり、自然素材を生かした染織の「工房 なんたむら」を設立。高齢者から教えられた、昔ながらの島の暮らしの知恵を、染織や文章や絵で表現してきている。

2011 年に、北海道に移住し、現在に至る。「生物文化研究所」「みみずの家」などの看板をかける。昔の与那国島の先人たちのように、身の回りのすべてのものにやどる「いのち」に向き合い、心をこめて平和を願う祈りを捧げる日々の中からさまざまなアートを生み出し続けている。北海道では、市民美術展に毎年出品し、身近な人たちの似顔絵を描いては街に笑顔を広げている。和歌嵐香は舞踏家としての舞台名である。

最近の著作に、和歌嵐香 N 子著、安渢遊地・安渢貴子・渡久地健編 2023『ぬ‘ていぬかーら・どうなん（いのち湧く島・与那国）』総合地球環境学研究所 LINKAGE Artbook02 がある。

編者のプロフィール

安渢 貴子（あんけい・たかこ）メール a@ankei.jp

愛知県生まれ。生態学・民族生態学専攻。山口県内の大学で生態学・生物学の非常勤講師を続け、現在は県内の看護学校で文化人類学を教えるかたわら、「阿東つばめ農園」での家族農業にいそしんでいる。理学博士。主な著作・論文に、安渢貴子 2009『森の人との対話——熱帯アフリカ・ソンゴーラ人の暮らしの植物誌』東京外語大 AA 研アジア・アフリカ言語文化叢書 47: 1-614、安渢貴子・安渢遊地 2011「与那国島のものの見方・考え方」『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社、安渢貴子・当山昌直編著 2015『ソテツをみなおす——奄美・沖縄の蘇鉄文化誌』ボーダーインク、安渢貴子・安渢遊地 2023「コンゴ盆地の食文化と農業イノベーションの歴史」『アフリカ研究』103: 11-26 など。

安渢 遊地（あんけい・ゆうじ）URL <https://ankei.jp>

1951 年富山県生まれ。人類学・地域学専攻。山口県立大学名誉教授。「阿東つばめ農園」付設の「生物文化多様性研究所」所長と称している。京大理博。主な著作・論文に、安渢遊地編著 2007『西表島の農耕文化——海上の道の発見』法政大学出版局、安渢遊地・安渢貴子 2011「530 年前の濟州島からの漂流民の記憶」『うたいつぐ記憶』ボーダーインク、2016『廃村続出の時代を生きる——南の島じまからの視点』南方新社、安渢遊地・安渢貴子 2023「島びとの描く宇宙観と生命観——画文集『ぬ‘ていぬかーら・どうなん（いのち湧く島・与那国）』の世界」『生態人類学会ニュースレター』29: 1-8、宮本常一・安渢遊地 2024『調査されるという迷惑・増補版——フィールドに出かける前に読んでおく本』みずのわ出版など。

RIHN LINKAGE Artbook 03

Fuganutu, Oral Tradition on the Drifters from Jeju to Yonaguni Island in the Ryukyu Arc

ふがぬとう——与那国島の濟州島漂流民伝承

2025年3月1日 発行

著 者 和歌嵐香 N子 (わからんこ・えぬこ)
編 者 安渓貴子・安渓遊地
発 行 所 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所 (LINKAGE プロジェクト)
〒 603-8047 京都市北区上賀茂本山 457 番地 4 Tel. 075-707-2100
印刷・製本 プリントアース
装丁・DTP 安渓遊地・当山昌直
色 校 正 福田美智子 (オフィス カモテトップス)

Author: WAKARANKO Nko
Editors: ANKEI Takako & ANKEI Yuji
Publisher: The Research Institute for Humanity and Nature (RIHN) (LINKAGE Project)
457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto, 603-8047 JAPAN
Cover & DTP: ANKEI Yuji & TOYAMA Masanao
Color calibration: FUKUDA Michiko (Office Kamote Tops)
